
伊吹さんの真相

倉田（改修1 A型）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

伊吹さんの真相

【Nコード】

N4525P

【作者名】

倉田（改修1A型）

【あらすじ】

日本で退魔師として生活していた田口伊吹は、敵の魔術師の攻撃を受けて異世界へと転生してしまいました。

このお話は、転生した田口伊吹が世界を裏側から操ろうと画策する魔族のボスを倒した後の平和な日々を描いています。

プロローグ

杉の木が数メートル間隔に生える針葉樹の森。第二次世界大戦時に大量伐採され、はげ山になった山々を再生させるべくして大量植樹された針葉樹は、植生域や森の保水効果などあらゆる問題を無視し強行した結果、花粉症や水不足、漁獲高の減少といった新たな問題を発生させている。

自分は真夜中の二時というのにも関わらずその針葉樹の森の中にいて、黒い大きな犬と十メートル程の距離を挟んで向き合っていた。犬は体長二メートル、体高一メートルはある巨犬な犬で、鋭い牙を上顎から剥き出しにしている所から狼といった風貌だが、分類した何処かの誰かさんには犬に見えたらしい。一方自分はというと、詰り襟の黒い学生服にオリーブ色のメッセンジャーバッグを纏掛し、拳銃を犬に向けている。どちらも日本の夜の森林にはならない存在だろう。

だが月明かりはそんな事にはお構いなしに木々の隙間から自分と黒い大きな犬一匹をぼんやりと照らしてくる。

その微かな光源の下、黒い犬は口から長い牙を覗かせグルグルと時折唸りながら首をこちらに向けて自分を睨んできており、今にも飛び掛かれそうな具合だ。

ただ、この黒い犬は自分にとって見慣れた敵で、今まで何十匹も倒して来ている。恐れる事などない、油断さえしなければ容易に仕留められる存在だ。

自分は両手で保持した黒いセミオートマチック拳銃を冷静に犬に向ける。犬はその大きな体躯を無防備にもさらけ出しおり、非常に狙い易い。銃の照準を腹部に定め、引き金を引いた。

乾いた銃声が静寂だった森に三度響くと、黒い犬は形状を維持出

来ずに霞の如く消滅していった。

今日は、森で野宿だな。犬を倒した場所からすぐ傍にある、真っ直ぐに伸びた大きな杉の木を背もたれに、自分はしばしの休息を取る。

「やはり、背中が痛いな……」

数日前、日本政府が運営する警戒監視網によってあの黒い犬、正確に述べればその魔力が探知された。探知された魔力は魔力量に基づく等級が付与され、民間人に被害が出る前に討伐すべく宮内庁に所属する自分が派遣されることとなった。

自分は田口家固有の能力、【物質創造】を使用しSIGSAUR社のP228という拳銃を創造及び利用して討伐を成功、今に至る。何だかこの言い草だと自分はあたかも何でも創造出来るようにも聞こえるが、世の中そこまで都合がいいものではないのでここに断つておく。

田口家の固有能力【物質創造】は条件を満たさないと使えない。また、家族でも一人たりとも同じ条件の人間はいない。例えば曾祖父は見た事がある物ならば同時に四つまで【物質創造】出来るという反則的な能力だが、祖父は触れた物に限定され、父は金属のみ、自分に至ると拳銃一丁しか創造出来ないのだ。こう述べていると世代を経る毎に弱体化しているように思えるかもしれないが、我が兄は地球上のあらゆる物質と接触すると対消滅という現象を起こして物質をエネルギーに変換、つまり消してしまえる反物質という危険物を創造出来るし、我が姉は武器と彼女自身が見做した物ならあらゆる物を創造可能。我が妹ともなると小型擬似天体が【物質創造】出来るというもはや創造ではなく想像の部類に入るような能力を保有している。

つまり自分だけが家庭内部で圧倒的弱者の立場にある訳で、昔は戦術次第でどうにかなった妹との模擬戦も今では小型天体 小さなブラックホールや太陽が飛んで来るのだ による弾幕を回避するので精一杯だ。

「はあ」

才能の分配率が家族間で余りにも不公平な現実には、また自らの弱さに落胆しながら目を瞑っていると、不意に睡魔が訪れ、次第に意識が薄れていった。

太陽が地平線下にある、紺青色の空。携帯電話のアラームで五時ジャストに目を覚ました自分は、立ち上がって伸びをする。杉の木に寄り掛かっつての寝心地は大変悪く、背中からゴキバキと嫌な音が聞こえた。やはり寝袋程度は持つて来るべきだったかと後悔する。

討伐依頼が届いたのが昨日の午後六時。それから学生服を着替えもせず慌ててオリーブ色のメッセンジャーバッグを引っ提げこつちに来てしまったからな。寝たはずなんだが、寧ろ疲労した気がする。まあ、今日は幸い祝日だ。帰ったらゆっくり寝よう。

自分はバッグから五百ミリリットルペットボトルに入ったミネラルウォーターを飲んで寝起きの不快感を振り払い、電車で朝帰りをすべく帰路に着いた。

電車を何度も何度も乗り換えをし、我が家のある国ヶ原市に到着したのは日も高く昇っているであろう午前十時だ。あいにく梅雨シーズンが到来したせいか曇り空だが、自分は晴れより曇り空の方が個人的に好きなので問題はない。ただし、湿度が高くなってジメジ

メしてくると晴れた方がいいと思う程度の好みだが。

新幹線が通過する程度の規模はある国ヶ原駅を抜けると、典型的だが商店街が広がっている。郊外に出来たショッピングモールに客足を奪われ、若干寂れている商店街。これも今の日本では典型的なのだろう。開く事のないシャツター群を通過し半時間程歩くと、我が家である五階建ての小さなみすばらしいマンションが隣の最近建築されたファミリー向け高層マンションに圧倒されている姿が見て取れた。

エレベータすらない我がマンションに不満を抱きながら少し錆が見え隠れする階段を五階まで登り、部屋のドアの鍵を開けて中に入る。中の構成は洋室二つにリビング、キッチン、トイレ、お風呂付き。まあ、悪くない広さだ。

玄関から大して長くもない廊下を通ってキッチンと一体化しているリビングへ足を運び、黄色い四人掛けソファにダイブする。ああ、疲れた。このまま寝てしまおうか……ん？ そういえば同居人はもう起きたのだろうか？ 重い体を起こして廊下へ逆戻り。右手にある木製のドアから聞こえる健やかな寝息を聞くに、まだ同居人は寝ているらしい。

同居人の名前は速水^{ハヤミコウ}光。同じ退魔師である。しかし自分とは違い、光は退魔師でも名前が知られる程有名な存在だ。

特別なゆかりのある（らしい）日本刀を使い熟し、その圧倒的な剣技、力、速度で敵を易々と倒していく姿は畏怖すら覚える。それは自分以外も感じているようで、他国の退魔師に“サムライ”と聞けばこいつの名前が返ってくる程。無論、日本でも（表では）一、二を争う力を持つ。

しかもイケメンで優しいと来たもんだ。危ない目に会った女の子を退魔師の圧倒的な力（いいのか？）で何度も助けフラグを立てまくっている。ただ、光自身は自分が危ない仕事に就いてるからと彼女を作ることを拒んでいるのだが、その曖昧な態度が、ハーレム拡大の原因になっているのだ。光に惚れた女の子が可哀相でならない、

いつそ光をイスラム教徒にしまおうかね。

しかしそんな彼も朝は苦手なのだ。いつも自分が起こし、朝食まで作る。まあ、嫌ではないのだが何故あれだけ完璧なこいつが朝だけは苦手なのだろうな。フラグ作りに役立つのか？

あれ、何故光の部屋の前にわざわざ立っているのだろうか？ ああ、そうか。光は今日学校に用事があるんだったな。

「はあ」

思わず天井を見上げ溜め息をつく。何というか、無意識に光を起こしに体が動いてしまう事に軽く絶望したのだ。

「光、朝だ。起きてくれ」

絶望感をひた隠し、ドアを叩いて起床を促す。

「ん…あと少し」

「もう十時過ぎてるぞ。確か今日は生徒会の集まりがあるとか言っ
てなかったか？」

「ええ！？ 集まりは九時からなのに！ 何で起こしてくれなかつたの！？」

「え……だって、昨日は依頼だったんだ。仕方ないじゃないか」

遅刻だ！ と喚きながら光は自室から飛び出し学校へ向かう準備を始める。そうなんだよな、光は生徒会の役員で、まだ一年生というのに会長になるという噂まである。つまり、勉強も抜群に出来る文武両道な奴なのだ。

自分達が通う国ヶ原第一高校は、自分みたいに少し力のある人ばかりが通っている。よって、世界トップクラスの实力がある光が会長に選ばれようとしているのはまあ順当ではあるんだがな。

「ほら、朝食は抜かすな」

朝は食べないと駄目だ。髪を所々はねさせたまま玄関へ駆けていく光へ、準備でどたばたしていた間に焼いておいたトーストを投げ渡す。

「サンキュー、行ってきますー！」

「ああ。気をつけてな」

ボタンと乱暴に扉を閉じて光は行ってしまった。慌ただしい奴。ふう、光の帰りは遅いし暑いし、お昼は適当に素麺でもすするかね。ピピピピピピ。襷掛けにしたメッセンジャーバッグに突っ込んだ携帯電話が鳴り出す。この単調な電子音は仕事の依頼だ。バッグから携帯電話を取り出し、応答する。

「近くに黒魔法の使い手が出た。身柄を捕らえる。場所は双子山、報酬は五百、生死は問わず」

「了解」

電話の相手は政府の役人。退魔師関連の仕事をする公務員は出世出来ない代わりに、高い給料を貰っている。対して退魔師の仕事は強制、固定給。ボーナス有り。公務員が羨ましいよ。また、退魔師は異能者が犯罪を犯した時裁く役目もある。あまり気は進まないが仕方がない。嫌な話ではあるが、こういうノルマ外の仕事は別途に給料が支払われる。自分で稼がなくてはならない以上、あまり仕事にあれこれと文句を付ける訳にもいかないのだ。

学校では光の活躍が目立たないが、実戦で使える退魔師は学校には少ない。実は自分は学校ではまあまあ強い方だったりする。だからこそ、生死は問わず（デッド・オア・アライブ）の案件が回ってくるのだが。

戦いの準備を始めようと装備を整えるべくリビングから横開きの戸を開けて、自室に入る。邪悪な力を纏めて黒魔法と日本の省庁は呼ぶので何があるかはわからないのだ。相手がわからないのは、大変困るね。創造で使う銃と同じ規格の銀の弾丸が入ったマガジンや色々な効果がある札を追加で持って行く事にしよう。

また、遅くまでかかりそうな仕事だ。光には外食や出前でも食べて貰うか。

準備を完了した自分は休む暇なく自宅を後にした。

双子山は国ヶ原市郊外にあり、標高五十メートル前後の山が二つ並んでいる事からその名前が付いたらしい。

木々は以前は林業が行われていたお陰で手入れされていたそうだが、今は外国からの輸入品に負け荒れ放題だ。

もうじき日が暮れる。お昼から索敵し続けている自分は創造した銃を構えた左腕を学生服の内に隠し、疲労した体に鞭打ち歩みを進める。

おっと……見つけた。双子山の山頂付近、木に寄生する何とかという虫が繁殖した際に纏めて木々が伐採され、今では雑草の生い茂る地点。そこに黒いローブを着て、雑草を刈り払い何やら魔法陣を書いているあからさまに怪しい御仁がいる。ただ、自分と魔力の格が違う。勝てる訳がない。違うというか、もはやあの黒ローブと自分の魔力を比べたら自分の魔力は小数点以下だ。

まずいな、自分では殺される。

バッグから携帯電話を取り出し光に電話する。

「伊吹、どうしたんだ？ 今日の夕食なら素麺がいいな」

「馬鹿、違う。双子山にやばい魔法使いがいて敵いそうにない。来てくれないか」

「わかった、十分で着く」

光は一流だ。仕事だと理解した途端、声が鋭くなった。こういう面もあるので、ハーレムなんてふざけた物を構築していても男子からの評判は……まあ、呪詛を送られたりとかは時々しかない。

自分が思索から抜け出し、再び黒ローブへ目を向けると奴はこっちを見詰めていた。おっと、まずい。

「……モウジユンビ、デキタカ？」

ちっ、気付かれたか。

勝ち目はない。銃を乱射し山を一気に駆け降りていく。

「ハハハ、ニガサナイヨ！」

スピードまで相手が上か、最悪だな……。みるみると距離が縮まっっていく。このままじゃ殺される。何とか時間を稼がなくては。会

話を試みる。

「おとなしく捕まれ！ そうすれば死なないですむぞ！」

「キミガワタシヲコロス？ 八八八八八八！ オモシロイジョウダ
ンダ！」

返事は火球か！ 無礼な奴め！

三十ばかり放たれた、橙色の炎の塊。サッカーボール程の火球の内、自分に当たる危険のあるものだけを七つばかり銃で撃ち落とす。

「アマイネ！ ウチオトスヒツヨウナイヨ！」

何い！？ いつの間に移動したんだ！？ 後ろから、黒魔法使いが火球を放つてきやがる。素早い奴め……。

火球が自分に直撃しているのを、木の上から眺める。

「甘いのはお前だよ」

倒されたのは、自分の身代わりを作り出す幻想の札で出来た偽物。銃を発砲した際に閃光の札を使って銃のマズルフラッシュと誤認させながら黒ローブの視界を奪い、その隙に幻想の札で身代わりを作成し木の上へ退避したのだ。そして身代わりを攻撃し仕留めたと勘違いさせて警戒心が薄れた所を上から銃で蜂の巣にする予定である。

ん？ 何かおかしい……。

「ワタシガミヤブレナイトオモイマシタカ？」

「がっ……！？」

奴は……… あえてこっちに乗って来たのか……。一瞬の内に移動し真後ろから放たれた火球が体を焼く。一発だけではない、高さ十メートルの高さから落ちていく自分に複数発は当たっただろう。意識が途切れなかったのは幸いだ。

地面に落下と同時に痛みを堪え四肢を踏ん張って横に跳び、木を火球の射線上に挟む。

「オソイヨ！」

「くそっ！」

何て速さだ。もう目の前にいるなんて。だが近付き過ぎだ！ 拳銃を五メートル以内の至近距離から乱射する。これだけ近ければ狙

いを付ける必要もない。

「ハハハハハ！ ソンナナマリダマ、アタリツコナイヨ！」

こいつ人間か！？ 弾丸十三発を全て左右にステップを踏むだけで回避しやがった。

「フフ、モウ、オワリダヨ。オロカナオロカナ、タイムシサン」

黒ローブは右手を真上に掲げ、火球を二十発以上を空に浮かせて愉快げな声をあげる。すっかり日の暮れた双子山を、大量の火球が明るく照らす。

「凄いなあんだ。あらゆる面で実力が突出している。自分はとても敵わない」

「ハハハ。ホメテムムダダヨ。キミハココデシヌンダ」

「いや、ほめてる訳じゃない。ただ少しあんだの注意をこちらに引き付けておきたくてね」

「！？」

瞬間、黒魔法使いの左腕が切り落とされ、空に舞った。

「アアアア！！ オノレエエエ！」

黒魔法使いの悲鳴が辺りに響き渡る。

「助かったよ、光」

自分の前には血が一滴たりとも付いていない日本刀を右手に持って立つ、速水光の姿があった。

黒ローブが滞空させていた火球が制御を失って地に墜ち速水光の真後ろで爆発したのは、自分が正に死んでしまうピンチに瀕した時に都合よく現れた事といい狙ってやっているのかと勘繰りたくなるがまあ助かったからいいや。

「友達なら当然たる伊吹。援護は任せた！」

そして光は援護しろと意味不明な台詞を残して視界から消え、次には黒魔法使いの間合いに入る。一撃。黒ローブはどさりと倒れる。お前に援護なぞいらさないじゃないか。

「あ、もう終わったんだ？」

「会長、もう終わりです。光の独壇場ですよ」

目の前には茶髪をストレートに背中の中半ばまで伸ばした男が現れた。彼は桐生優キリユウ ユウ。現在の生徒会長であり、退魔師界では“パーフェクト”と呼ばれる。日本で光と一番を競う実力だ。

“パーフェクト”の名前はあらゆる魔法を使い熟すことから呼ばれている。つまり、遠距離最強。近距離型の光と組むと恐ろしいまでに強い。ただ強さには羨望を覚えるが、“サムライ”だの“パーフェクト”だの恥ずかしい名前は勘弁したい。ついでに彼はとびきり美しい女顔な事でも有名で、背中の中半ばまで伸ばしている艶やかな茶髪と相俟って誰も彼もが初見では美少女と勘違いしてしまう。そのくせ女と間違われると怒り出すのだから理不尽だ。髪を切ればいだろうに。

まあ、それはそれとして。あの“パーフェクト”がいれば自分の援護は要らないな。思えば、これが油断だったのだろう。

「ク、オ……オマエタチモミチツレダ！」

黒魔法使いの魔力が十数メートル離れた場所にあるさっきの魔法陣へ流れ、発動。黒い光を放ち出した。

「会長！ この魔法陣の効果は何ですか！？」

「わからない！ だけど空間に作用するみたいだ！」

身の危険を感じ咄嗟に防御の札を使う。魔法陣と自分の間を阻むように、うつすらと青い半透明な壁が生まれた。これで自分は何とかなるが、あの二人は大丈夫だろうか？

二人に目を向けるが、杞憂だったようだ。光は会長の展開した防御の札よりも遥かに強固な【魔法障壁】で守られている。

「しまっ……」

二人に目を向けていたその時、何かに急激に引き寄せられる感覚に襲われる。魔法陣に吸い込まれ………！！

「……夢、か」

自分に何かを向かって叫ぶ一人の姿を最後に、私は目を覚ました。

一、郷愁の朝

「……夢、か」

私は目をパチリと開き、赤茶と焦げ茶、二色で構成された煉瓦の天井を視界に納めた。

何故だろう、天井に親しみを感じる。この天井を見るのは久しぶりなような気がしてならない。

「目を覚ましたっ！」

突然耳元で大声が上がる。迷惑だなあ、起きたばかりにうるさいじゃないか。一体誰？ 首をクルリと曲げると、明るい緑色のセーターの上によれよれの白衣を羽織った格好の若い実直そうな男が、私へ目にクマをこしらえた疲れた顔で微笑みかけている。彼は確か、医師をしているフィアウルさん。その彼がどうして私の寝ているベッドの枕元でしゃがんでいるのだろうか？

「アレシア……アレシアあっ！」

私の下半身辺りから聞こえた女の声。今度は誰だ？ 何だか声が掠れているようだが……いや、ちょっと待てよ、この声は……？ まさか、信じられない。

私は上半身をベッドから跳ね起こして彼女の姿を確認する。

彼女を目にした瞬間、私の頭は真っ白になっていた。

「お母さん……?」

ポツリと、頭に浮かんだ単語が口から抜け出す。

「そうよ！ あなたのお母さんよ！」

お母さんは椅子から勢いよく立ち上がり、飛び掛かるようにして私の頭をその胸に抱く。お母さんの胸に顔を埋められた私は心が懐かしさでいっぱいになって、気付いたらむせび泣いていた。

一年と数カ月程前の事だ。私は六歳としては異例ながらも転生した人間としての知識と経験を生かし、ロミア共和国の最高学府である学園へと飛び入学した。そこでの生活はとても楽しく、有意義な物だった。特に、親しくさせて貰っていたサハリアおね、こほんサハリアさんとファルサリアさんとの学生生活は転生前の退魔師人生では味わえなかった親しい人間関係を構築出来てたんじゃないかとすら思えた。

しかしそれをぶち壊しにしたのが、魔族の存在だ。彼らは自民族の繁栄の道を、自ら以外を排除する事によって成し遂げようとしたのだ。

彼らは狡猾かつ陰湿だった。各国政府に内通者を仕込み、それぞれの国の国民感情を煽った。

人々は残念ながら魔族に扇動されてしまい、二大強国ロミア共和国とペロポネア帝国を筆頭とする各国が戦争を開始してしまった。そんな中私は偶然にも魔族の存在に気付いてしまい、また魔族も私が気付いた事を察知した。これが全ての始まりと言えるだろう。

私の情報が魔族の本拠地に到達される前に情報保持者を殺害し、

身動きを取りやすくする為に私は死んだ事にした。

そして私は一年数カ月を世界各地の搜索に費やして魔王とも呼べる存在の息の根を止めたのだが……。

魔王を倒した所までは覚えている。だがどうして私は自宅にいるんだ？ あの島からここまででは、短めに見積もっても三千キロはあるぞ。

でも、今は考える事は後回しにしたい。魔王は死んだんだ。もういいじゃないか。

お母さんのそれほど豊かとは言えない胸だが、一通り泣いて落ち着いた今では気恥ずかしい。私の涙でぐしょぐしょになった毛糸で編まれた淡いベージュのワンピースから、というよりその内部の膨らみから離れようとするが、お母さんにながちりと頭をホルドされてしまっている。となると今度は逆に、こんな事を気にしているとは思われたくない若干の意地と、もう少し位甘えても罰は当たらないという本心が私の胸中を支配し始めた。

お母さんの胸の中にと、何故だかとても安心するんだ。心が安らぐ。体勢からすれば、ベッドから上半身を起こした少女の顔を成人女性が胸に押し抱いているという、死角まみれで即応性にも欠ける簡単に殺害出来る体勢なのだけ。理性とは違う、何か本能的なもの働きのかな？ ま、考えるのはいいや。あと少しだけ、こうしていよう……。

「良かったわ……アレシアが生きてて」

上擦ったお母さんの声が私の耳に届く。

「本当にのう。僕にはまだ実感が湧かないわい」

このしわがれた声は、お祖父さんだ。その声も心なしか感情が高ぶっているように思える。お祖父さん、元気にやっていたかな。ちゃんと果物食べてビタミン摂取してたかな。

「僕も驚きましたよ。アレシアちゃんにまた会えるなんてねえ。これも、ディーウアさんのお陰ですね」

ん？ ディーウア？

「そうだったわ。あなたがアレシアを連れて来て下さったのですものね。ありがとうね、ディーウアちゃん」

「良いので御座いますよ。アレシアちゃんも望んでいたでしょう」

会話の流れとしては最後に発言した彼女がディーウアなんだろうが……私の知ってるディーウアと違うんですけど。

感傷に浸ってた気分がすっかりディーウアらしき人物のおかげで吹っ飛んでしまった。

「そんな事言わんでくれよ、ディーウアさん。僕らは君に非常に感謝しているんだ。何度感謝してもしたりない程ね、何か望みがあるなら出来る範囲で恩を返させて貰いたい」

では……と、少し考え込んでからディーウア（仮）は躊躇いがちに口を開いた。

「もしよろしければ、この家に数カ月の間住まわせて頂けないで御座いましょうか？」

まあディーウアお金持ってないし、そうせざるを得ないよね。それはいいとして、こんな丁重な言葉を使うなんてディーウアらしくない。でも、声は間違はなくディーウアだよ。どういう事なの？

「それだけでいいのかい？」

お前は一体何者だい？ 私は強く押し付けられたお母さんの胸部から無理矢理頭を回転させて片方の目をディーウア（仮）の聲がする方へ向ける。

「はい。駄目……ですか？」

狭い部屋の中、フィアウルとお祖父さんの間に立っていたのは茶髪を肩にかかりそうな位まで伸ばした十五歳前後の可愛い少女だった。って、ちょっと待て！ お前は誰だ！？

「そんな事ないわ。大歓迎よ、ねえお義父さん」

「勿論だよ」

咄嗟に叫んでしまったが、幸いお母さんに強く押し付けられてたのでムゴムゴと僅かに口から意味不明な音が漏れただけで済んだ。

「ありがとうございます！」

頭を下げるディーウア（仮）。その頭を上げる時に目が合う。ニコリと微笑み掛けられた。

「さて……そろそろ僕は帰りますね。診療所に行かないといけません」

頃合いだったらしく、フィアウルさんが立ち上がりおいとまの意を告げる。すっかり存在を忘れてたが、彼はどうしてここにいるんだろう。

「フィアウル先生ごめんなさいね。アレシアの為に徹夜させちゃって」

フィアウルさんにお礼を言うお母さん。発言からすると、私は何処か病気だったり負傷したりしてるのかな。

「何言ってるんですか、患者を助けるのが僕の誇りなんですからむしろ呼んでくれて嬉しいんです。それにアレシアちゃんにも会えたいしね」

そう言い終えたフィアウルさんは、ではお大事にと言い残して部屋を出て行った。

「ああ、マリーさんはアレシアと一緒にいてやりなさい。僕が見送るから」

「そうはいかないわ。先生には無理させちゃったんだもの。ディーウアちゃんアレシアをお願い」

「任せて下さいませ」

お母さんは名残惜しげにゆーっくりと私を離し、ベッドに横にさせてシーツを丁寧に掛けてくれた。うーん、ベッドよりお母さんの方が色んな意味であつたかかったな。

「大丈夫よ。すぐ戻ってくるわ」

私はそんなそぶりをしたつもりはなかったのだが、不安げにでも見えたのだろうか。私の肩に手を添え、安心させるようにお母さんが声を掛けてくる。

私はそれになづく事で返答すると、お母さんとお祖父さんはフイアウルさんの見送りに部屋を出て行ったのだった。

二、ディーウア（仮）

お母さんとお祖父さんはフィアウルさんの見送りに部屋を出て行った。

室内には窓際のベッドで上半身だけ起こした私と、部屋の左右の壁に沿うように配置された木製の戸棚と本棚の間に立つディーウア（仮）だけ。

私はディーウア（仮）と二人きりだ。

二人きりで話せる機会はこの先当分ないと考えた私は早速質問する。

「あなた、本当にディーウアなんですか？」

ディーウアは元々最新鋭ステルス戦闘攻撃機として【物質創造】した純然たる兵器であり、人型にモードチェンジ出来るようにはしたとはいえ、それは魔力消費を抑える目的だった為なので身長十センチ位のちびっ子だったはず。それがどうして年齢十五歳前後の美少女となっているんだ。

「御主人様は私をお忘れになられたので御座いますか？」

いや、忘れた訳じゃないよ。確かに顔や体格からしてちびっ子の時のディーウアを今位大きくすればちょうどあなたになるんだろうさ。

「いやでも、何でおっきくなってるんだ？」

転生前の口調に戻って質問する。特別どちらの口調が良い悪いという気持ちはないが、ディーウア相手にはこっちのがしっくりくるのだ。

「何をおっしゃっているので御座いますか？ 御主人様が私に魔力を流し込み過ぎた故の結果で御座いますよ？」

あたかも私のせいと言いたげな物言いだね。

「どういう事？」

デューウアに事情をただした所、こういう事らしい。

魔族の王と戦闘後、私はいきなり倒れてしまったらしいのだが、意識を失う直前にデューウアを【物質創造】したそう。しかし私が増減を間違えたらしくデューウアに流入した魔力が余りに膨大な為、制御が付かなくなりそうになったとの事。よって身体を敢えて成長させ魔力を消費する事にし、ついでに知識も手に入れたらしい。デューウアに当時の説明を受けて、ぼんやりと記憶が戻ってくる。そつだ、確かに私はぶつ倒れてしまったんだ。だからフィアウルさんがいた訳か。

「よく分からないな。何故大きくなると魔力制御が可能になるんだ？」

「私の操作可能な魔力量には限界が御座います。また、私の体内に蓄積可能な魔力も限られております。故にこの姿になったので御座います。しかし、ならなければおそろく……」

デューウアは真面目くさった顔で、両手を胸の前に持って行く。

「恐らく？」

そして両腕を大きく開いた後、一気に閉じた。手を打ち合わせた音が室内に響く。

「パーン、と破裂したかと」

デューウアが炸裂する光景が頭に浮かぶ。流石に内臓があるとは思えないが、凄惨な光景になるのは間違いないだろうな……うえ、想像するんじゃないかった。

「その為、身体を成長させる事に致しました。身体が大きくなったからで御座いましょうか。蓄積可能な魔力量が大幅に増加したのも良い方向に働きました。以上が理由となります。納得頂けましたで御座いましょうか御主人様」

「……納得した。それは仕方ない」

想像したらデューウアの置かれた状況を克明に理解したよ。体が

炸裂しかけてたんじゃ大抵の事は許すしかないだろう。

「御理解頂け何よりで御座います」

となると、ディーウアが私をここまで運んで来た訳か。なら、礼を言わないと。

「あー、ディーウア」

ち、中々言いにくい。面と向かって言おうと思ったのに、ついそつぽを向いてしまう。

「何で御座いましょう」

「えーと、だな」

言え、こんなの簡単じゃないか。

「はい？」

「その、何だ。助かったよ。あ……ありがとう」

く……頭に血が上って来ている。何でだか知らんが、敬語でなら臆面もなく言える感謝の言葉がひどく気恥ずかしい。

「こちらこそ、そのような可愛らしい御姿を拝見させて頂き有り難う御座います」

ななな何を言ってるんだこいつは!?

「ゴホン！ その、やけに丁寧な口調は何なんだ？」

ディーウアめ、悪い方向に成長したな……私はほてった頭を何とかしようと話題を変える。

「仕様で御座います」

「嘘つくな。以前は語尾にわざとらしく“〜です”を必ずつけていたじゃないか」

とにかく頭を冷やす為、口を動かし続ける。

「それは、その。あの頃はそれが丁寧だと思い込んでいたので御座います」

「そうだったんだ……」

顔を赤らめ恥ずかしがるディーウアを前に、私は人工知能の性能に魔力量が左右する事を一つ発見。まだまだ、【物質創造】を使いこなせていない事に気付かされた。

「それじゃ、今から魔力を削ったら元に戻るんだろうか？」

本当はそんな事する気はないが、さっきの意趣返しにボソツと呟いてやる。

「勘弁して下さい御主人様。恥をかきたくはないです」

心底困ったような顔を見せるディーウアにやり過ぎたかと思いい何か言おうと口を開いた時、階段をドタバタと駆け上がる音が聞こえた。

ディーウアと二人して何だろうとドアを見つめると、ドアをバタンと乱暴に開いて部屋へお母さんが入って来る。そして私を見て安堵したような笑顔を浮かべて一言、「アレシア」と私の名前を呟いた。

「どうしたんですか、お母さん」

何かあったのだろうか。私はベッドから滑り降りディーウアの横を通ってお母さんに駆け寄る。

「な……何でもないわ」

そう言ってお母さんは近寄る私と視線を合わせるようにしてしゃがみ、そのままの体勢で抱きしめてきた。額と額が触れ合う。お母さんの荒い呼吸が私の顔の表面を撫でる。どうやら相当急いで来たようだ。

「私はいなくなりませんよ、お母さん」

多分、まだ私の帰還に実感が伴っていないのだろう。だから不安になったんじゃないかな。本当に私は実在するのか、と。ならどうしたら不安を払拭出来るかなんだが……まあ、何とかやってみよう。「そう、そうよね。分かってるわ」

肯定の意を早口でまくし立てているが、それが逆にまだ安心出来ていないという事を推察させる。しかし、体を密着させてこれ以上近付きようがない位私は傍にいるのにまだ安心出来ないならどうしたらいい？

「はい、これからはずっと一緒にいましょう」

取り敢えず、安心させるような言葉を送ってみる。

「そう……ね、一緒にいましょうね」

お母さんの声がまた上擦り始め、その瞳は潤んできている。これは効果有りで見ているのだろうか。

「はい、一緒にいましょう」

一応もう一度、同じ台詞を繰り返す。私自身の希望も込めて口から出したこの台詞は、ついにお母さんの涙腺を崩壊させてしまった。うーん、やり過ぎてしまったみたいだ。反省。

「何で、泣いちゃうんです？」

俗に言う、感動の再会は既に済ませたじゃないか。なのにどうして？

「え？」

「涙、出てますよ？」

お母さんは言われて始めて気付いたらしく、私を抱きしめていた右手を自身の頬へ持つて行き、涙に触れた。

「あ、あれ、私、どうして泣いて……」

「泣かないで、下さいよ」

仕方ないなああと、ささやかな微笑が私の口に浮かぶ。

「な……何言ってるの。アレシアも涙、出てるわよ？」

「え？」

言われてみると確かに、頬を一粒の涙が流れているのを感じた。

お母さんも、柔らかい笑みを浮かべ出した。

「ふふふ……」

「えへへ……」

二人して、微笑みながら、涙を流す。

何だか、くすぐったいような、温かいような、不思議な気持ちになっただ。

「うん！ じゃ、朝ご飯にしましょう！」

十分程経つただろうか。急に元気一杯になったお母さんは私を抱えて立ち上がった。

「お母さん？ 私、自分で歩けますよ」

私のいなかった間にももの凄い心労をかけてしまったんだ。もう迷惑はかけたくない。

「駄目。私がこうしたいのよ」

弾んだ口調で私に答えるお母さん。そう楽しそうに言われると、反論出来ない。

「ほら、ディーウアちゃんもいらっしやい」

「はい、お母様」

ディーウアの事、すっかり忘れてた。というか、全部見られてたのか……。お母さんの肩から顔を出していると、後ろから着いて来るディーウアと目が合う。もらい泣きでもしたのか瞳を潤ませているディーウアと顔を合わせると、急に恥ずかしくなってきた。肩から顔を引っ込める。

「ふふっ、甘えん坊さんね」

すかさずお母さんの胸に押し付けられた。く、どっちにしろ羞恥を味わう訳か。

ええい！ 母親なんだから恥ずかしくない！ うん、これでよし！
内心を押し殺しながらお母さんに抱き抱えられ部屋から廊下へと出る。

変わってない……懐かしいなあ。

気持ちは完全に切り替わり、感傷の思いで心が満たされていく。
私の部屋を出て廊下の右側を見ると彩色ガラス扉があり、その扉はベランダに繋がっている。一方左側を見ると部屋の扉が四つ並んでいる。四つの扉の見える左側へ扉を横目に足を進めると、やがて右側に階下へ続く階段が見つかる。階級には途中に窓があって、そこからお隣りさんの自慢の中庭が覗ける。今年も様々な花が咲き乱

れている様子が見て取れた。彼らは元気に過ごしているだろうか。階段は一階廊下に繋がっていて、この廊下の左側には五つの形の異なる扉が並んでいる。一番左端の立派な木製両開きの扉が居間兼応接間に続く扉だ。真鍮製（だと思う）のドアバーをお母さんが直角に回転させ居間に入る。

「変わってないですねえ……」

落ち着いた焦げ茶色を下地に黒の網目模様が入った壁紙。薪を燃料にパチパチと炎が音を立てている煉瓦の暖炉。部屋の中央には斑紋の美しい白い大理石のテーブル。長方形のテーブルの長辺に沿うように設置された二対の四人掛けソファ。窓際では格子窓から差し込む朝日を明かりにお祖父さんがロッキングチェアに座って新聞を広げている。

「マリーさん、アレシアは大丈夫なのかい？」

私達に気付いたお祖父さんが新聞から顔を上げる。

「大丈夫よ、先生の腕は確かだもの。ね、アレシア？」

「はい」

「そりゃ良かった」

再び新聞に顔を戻すお祖父さんにディーウアが一礼した後、開きっぱなしのドアを通って食事室の中へ。

食事室には十人は座れる大きな木製のテーブルと椅子があるだけだが、壁紙は白を基調とした明るいものとなっている。

「少し待っててね、すぐ用意するから」

お母さんから椅子に降ろされた私。うーん、床に足がつかない。

成長したはずなんだけどな。

「あ、私にも手伝わせて頂けませんか？」

台所へ向かったお母さんをディーウアが追い掛けていった。

台所から聞こえてくるお湯の煮え立つ音や包丁が規則的に何かを刻んでいる音をバツクに私は一人椅子に腰掛け、久しぶりに無為に時間を過ごしたのだった。

三、ある朝の食事室

台所から聞こえる賑やかな物音に耳を寄せながら、席に着いてしばらく足をぶらぶらさせてるとお母さんが木のトレーにスープを四皿載せて運んで来た。スープから立ち上る湯気が私の傍に漂って来て鼻孔をくすぐる。

「美味しそうな匂いですね」

「ふふっ、お代わりはいっぱいあるわよ」

お母さんは次々とスープをテーブルに配置していった。

その配置は私のいた頃と変わっていない。長方形のテーブルの短辺にお父さん、お父さんの右手の長辺はお父さんに近い順にお母さん、そして私。左手には一つ空席を空けてお祖父さんが座る。空席は私の生まれる前に亡くなったお祖母さんの席。四つのスープはお母さんとお祖父さんと私の席、それと私の右側にもう一皿と置かれる。最後のはディーウアの分だろうか。

「少し待っててね、お義父さん呼んでくるから」

「はい」

お母さんが居間に消えると、入れ代わりに台所からディーウアが植物で編まれた籠を抱えてやって来た。平たい籠には丸いパンこちらではパンヌと言う。まあ、たいした違いじゃない。がいくつも入っている。

「パンヌ屋さんに行つてたのか？」

「その通りで御座います」

「ご主人のモフアラスさん、元気にしてた？」

「私がパンヌを受け取った中年男性がモフアラスさんでしたのなら、健康に差し障りはなさそうで御座いましたよ」

「そっか、良かった」

あの人も随分お世話になった。我が家の食卓で出て来るパンは全てモファラスさんのところで焼いて貰ってて、昔は毎日私がパンを受け取りに走っていたなあ。時々くれたクッキーはさくさくほくほくしてて、格別の味だった。

後は何故だかいじめられた私をかばってくれたりもしたっけ。スカートめくろうとしてきたり背中を叩いてきたり、所詮ガキのいたずらだったから寧ろほほえましかったけどね。

「私は何処に座ればよろしいので御座いますしょう?」

物思いに耽っていた私を、所在なさげなディーウアの声が現実を引き戻す。

「ここだと思うけど、ディーウアも食べるつもり?」

「いけませんか?」

俯くなよ。シヨックを受けたらしいディーウアへ、慌てて訂正の言葉を放つ。

「そういう意味じゃなくて、食べる事が出来るのか? という疑問なんだが」

「はい、可能で御座いますよ」

「食べた後は?」

「……無粋な事を聞かないで下さい。私は魔力で構成されているので御座います」

「あ……すまない」

ディーウアと会話を交わしていると、お母さんがお祖父さんを連れて戻って来た。二人は各々の席に座る。お母さんは私の隣に、お祖父さんは私の向かい側だ。

「待たせて済まなかつたね。さあ、食べようか」

お祖父さんの言葉を合図にして、全員がスプーン片手に食べ始める。

スープは肉と野菜を具材に、塩で味付けされただけの簡単な代物。

それでも少し薄味な塩加減は間違いなく、お母さんの料理だ。

「どうしたの、アレシア？　もしかして、おいしくなかった？」

私のスプーンを持つ手が止まっているのに気付き、お母さんが声を掛けてくる。

「いえ、とても美味しいですよ。ただ、お母さんの料理……懐かしいなって思ってた」

嫌だな。涙が出て来た。いい加減にしてくれと思うね。もう散々泣いたじゃないか。

「おかしいですね、何だか勝手に……悲しい訳じゃないのに……」
いくら指で拭いても溢れる涙は止まらない。おかしいなあ、私はここまで涙脆くはなかったはずなのに。

「アレシア……」

お母さんが身を乗り出し、私に覆いかぶさるようにして抱きしめてくる。

「お母さん……」

やめてよ。余計涙が溢れ出て来るじゃないか。

朝ご飯の席はすっかり湿っぱい雰囲気になってしまった。全員が黙々と食事を口に運ぶ。雰囲気悪い。

「私がない間、どうしてましたか？　何か変わった事はありませんか？」

何とか場の雰囲気を変換しようとして適当に話題を振ってみる。

「変わった事、ねえ……何かしら」

悩むお母さんに対し、お祖父さんが誇らしげに口を開いた。

「ジェイソンが参謀次長になったじゃないか」

「参謀次長？」

参謀次長というと……トップである大統領から数えて六番目か。以前が近衛軍団軍団長だったから大出世だね。

「わああ、アレシアちゃんのお父様は凄い方なのですね」
ディーウアは早くも感嘆の声を上げる。

「そうね。おかげで戦場に行かなくてすむようになったのはいいけど、中々帰って来ないのよね」

ただお母さんはあんまり嬉しくなさそう。

「しかし僕の息子も偉くなったもんじゃないか！ あの歳で参謀次長には普通なれるもんじゃあない」

対象的にお祖父さんは自慢げだ。

「確かに偉くなったわ。なりすぎなくらいね」

お母さんの刺々しい口調の台詞に、お祖父さんも苦笑するしかない。

「マリーさんは社交会が苦手かい？」

「貴族が多くて堅苦しいのよね、司令本部主催の社交会って。あーあ、中隊長同士の社交会までは気楽だったのにな」

愚痴をこぼすお母さん。口の中にスプーンを入れたまま話す。スプーンがお母さんの口に入ったまま上下にゆらゆら。つい、目で追ってしまう。

「軍団長辺りまでは下からの叩き上げもいるが、四軍司令部より上になると余程の才かコネクションがないと第三階級出身にはつらいからな……その点、ジェイソンは実力であそこまで行ったんだ。素晴らしいよ」

「まあ、あの人が有能なのは確かだけど。でももう少し家庭に貢献したっていいと思いませんかお義父さん！」

あ、スプーンがテーブルに落ちた。

「あ、ああ、そうだな。仕事に夢中になりすぎているくらいはあるな」

「でしょう！？ あの人の仕事優先で最近一回も帰って来てないし！
少しは顔を見せなさいよっ！」

やばい、お祖父さんがお母さんの導火線を着火してしまったみたいだ。話題を変えよう。

「あー、ところでお父さんは私が帰って来た事知ってるんですかね？」

「今だ、お祖父さん。逃げるんだ。そんな意思を込めて目配せすると、お祖父さんはうなづく。」

「え？ あら、すっかり忘れてたわ。でもそれより……」

「そりゃ大変だ！ 俺が報せに行こう！」

「いや、でも……」

「なあに、朝食後の散歩も兼ねるから心配はいらんよ！」

お祖父さんは食事室を出ていく前にちらりと私に振り向き、ウインク。私は微笑みを返事にして、計略成功を喜んだ。て、あれ。何で扉の前で立ち止まっちゃうんだ。

「お義父さん、大丈夫ですか？」

その急な動作停止に、お母さんが心配になっただらしい。椅子から立ち上がって、お祖父さんの元へ歩み寄る。私も心配だ。ついて行く。

「あ、ああ。大丈夫じゃ。問題ない」

確かに見た目は健康そうではあるけど、さっきのは流石に不自然だ。

「ですけどお義父さん。少し休んでからいかれたらどうですか？」

お母さんも同意見らしい。お祖父さんを引き止めにかかる。

「いや、何。アレシアの笑顔に見とれてただけじゃよ」

「いや、その言い訳は無理があるだろ。」

「あら、そうなんですか？」

お母さんは私の方を見る。いやいやいや、こんな低級な嘘に騙されちゃ駄目だよ。

「本当だとも。それよりジェイソンに早くアレシアの帰還を伝えてやらねばな」

そう言ってお祖父さんは食事室の扉を閉めていった。お母さんにそれを引き止めるそぶりはない。

「お母さん、お祖父さんは大丈夫でしょうか？」

せつかく再会したばかりというのに、ぼっくり逝かれてはたまらないんだが。

「お義父さんもせつかちね……まあ、大丈夫じゃないかしら」

そうかなあ。大丈夫かなあ。もういつそ私がお祖父さんと一緒に直接会いに行こうかなあ。

「では、私が同行致します」

私の心情を察してくれたディーウアが申し出てくれた。ディーウアがついてくのなら、安心だ。

「そうしてくれますか？」

「任せて下さいませ」

「ごめんなさいねディーウアちゃん」

申し訳なさそうにお母さんがディーウアへ声を掛ける。

「ちようどロミリアの町並みを見たいと思っておりましたから、気にしないで下さい。では、行って参ります」

「お祖父さんの事、お願いしますね」

「行ってらっしゃいディーウアちゃん」

お母さんと私に見送られて、ディーウアは玄関の扉の取っ手に手をかけているお祖父さんの後を駆け足で追いかけたのだった。

四、ご近所さんの来襲

お祖父さんとディーウアの外出後、朝ご飯を平らげた私達は食後のお茶を嗜みながら食事室でくつろいでいた。

私はお母さんの膝上に乗せられ、再会するまで何をしていたかを曖昧に話す。

「海岸に打ち上げられたって……だ、大丈夫だったの!？」

曖昧にぼやかしても私の話は刺激的なようので、始終お母さんは顔色を変えている。というか刺激が強すぎたらしく、私を不安解消に抱きしめる用途で使用する為に膝上へと強制移動させられてしまった。

「はい。運よく釣りに来ていたカルロスさんとヒューイ君に助けられたんです」

胸を撫で下ろすお母さん。よかったと小さく呟いてから先を促してくる。

「それで、どんな人達？」

「カルロスさんは優しいお爺さんでヒューイ君は元気な十歳位の男の子でした。二人は家族で、私を二人の家に案内してくれました。そこで一週間位でしたかね、色々と面倒見てもらったんです……いつか、また訪ねたいです」

「その時は私も行きたいわ」

「きつとみんな喜ぶと思いますよ、ん？」

家の扉をしきりに叩く音が聞こえてくる。お祖父さん……じゃな
いはず。お祖父さんなら家の鍵を持っている。

「あら、誰かしら。見てくるわ」

「はい」

私を椅子に移し立ち上がり、廊下に繋がる扉へ向かって歩き出したお母さんへ私は簡素に返答する。その後、扉を閉めて廊下を駆け足で進むお母さんの足音が私の耳まで届く。

足音が止み、入り口の扉の施錠を外した金属音と共に、訪問者の声が聞こえ始める。どうやら訪問者は複数人いるようだ。何者だろうか。少し様子を見てみよう。

お母さんの出て行った扉をちょっとだけ外側に開き、入り口を片目で覗く。

「あ！ 本当にいたぞ！」

「え？ どこどこ、どこよ？」

「おっ！ あそこじゃ！ ワシは見たっ！」

テッドさんに、デウラテさんに、アティースアさんに、ズムウォルトさんに……ああ、懐かしいなあ。もしかして、私に会いに来てくれたのだろうか。玄関には、私が近所で仲の良かった人々が押しかけていた。

まだ私に会いに来たとは決まっていけないのに、つい私は嬉しくなつて扉を開き彼らの目の前に姿を現す。朝から次々と旧知の人物との再会が実現し、思わず私の頬も緩む。

「皆さん久し振りです……ね？」

んーと、どうしたのだろう。皆さん固まっていらっしゃる。私、死んだと思われてたから、いきなり姿を見せたのは少し衝撃的だったのかもしれない。とりあえず声を掛けてみる。

「あーと、この通り私は無事ですけど……」

無反応かい。

あ、そういえば、昔も時たまこんな事あったっけ。この世界の人の達のボディランゲージの一つのようだし、少し待とう。

十五人の固まった人間を掻き分けて、お母さんがこつちに歩いて来た。彼らを見て「威力は数段上がったみたいね……」と呟くお母さん。威力って、何の事だろう。ああ、十五人も人間が呆然と突っ立ってたら確かに威圧感はあるよね。

「皆さん、どうしちゃったんでしょうね」

前々からこのボディーランゲージの示す意味が分からないんだよなあ。何を示しているんだか。

「……さあね」

お母さんは難しい顔で私を見つめてくる。あれ、何で私を見るのだろう。

「何か？」

「いいえ、何でもないわ」

「？」

あー、まあいいか。ボディーランゲージに深い意味があるとも思えない。

今回は死んだ人間が生きてた事に対しての驚きに違いない。びっくりして固まった、という事だ。気持ちは分かる。分かるけど、固まる事はないんじゃないかな。

ボディーランゲージの示す意味について考えて数十秒程経過しただろうか。他のみんなよりいち早く正気を取り戻し、辺りの固まったままの人々を挙動不振に見回しているテッドさんに気付き声を掛ける。

「お久しぶりですね」

「あ……夢、じゃないのか？」

私を凝視し、口を半開きにしたままテッドさんが尋ねてくる。

「違いますよ、私は帰って来ました」

「ほ、本当に帰って来たのか？」

テッドさんの声が震えている。

「はい、そうですよ」

口を大きく開き、ガタガタと震え出すテッドさん。これは……大丈夫だろうか。

テッドさんの様子に一抔の不安を覚え始めた時、突然テッドさんが大声が上がる。

「な、何てこった！ マリーさん、よかったじゃないか！」

テッドさんは歓喜の勢い余って隣にいたお母さんの肩をつかみ激しく揺さぶる。

「え、ええ。ありがとう」

苦笑いで応じるお母さん。

テッドさんの大声に反応して、みんなも活動を再開させ始めた。

「あらあらまあまあ！ アレシアちゃん綺麗になったねえ！」

「よく無事で戻って来たなあ！」

「愛でたい！ じゃなかった、目出度い！」

「ああ……生存してくれてたのね」

「くそっ！ マリーさん、ウチの馬鹿息子と交換してくれないか！」

「ははははは！ 今年は良い年になりそうだぜ！」

「はっ、だから政府の言う事は信用出来ないんだよ。ほれみい、アレシアちゃんは生きとるじゃないか」

「おばあちゃん、そんな事よりもっとアレシアちゃんの近くに行きましょー！」

「ママ……あのお姉ちゃん、女神様？」

「何言ってるんだいもう忘れたのかい！？ バルカ家のアレシアちゃんだよ！ ああもう見てご覧よあの容姿つたらもう！」

みんなで一斉に話し始めるものだから何を言ってるのかが分からない。

「ちょ、ちょっと！ 一人ずつ話してくれませんか！？」

制止に入るが、しかし。

「あらあらごめんなさいね」

「確かにそうだよなあ」

「かあいいなあ」

「なあマリーさん、テッドなんかに構ってないで話を聞いてくれよ！」

「ははははは！ こりゃすまねえなあ！」

「あたしや前々から言ってたろう？ 魔族はいるんだよ」

「おばあちゃん、静かになっ」

「ああ何て綺麗なんだろうねえ！」

「ママっ！　しーっ、だよ！」

「薄々感じてはいたが、無駄なようだ。」

「ハハハ……」

「駄目だこりゃ。もう、苦笑いするしかない。」

「あら、まあ」

「ぐぼあっ！」

「げぐあ……」

「ほえ……」

「ああもう本当に訳が分からない！」

顔を赤くしたり、いきなり再度固まったり、奇声を上げ出したり、赤い液体を吐き出したり、何なんだ一体。以前はこんな事はなかったのに。どうなってるんだ。これが時の流れなのか？

「マリー！　一体何の騒ぎだ！」

その時、入り口の扉が乱暴に開け放たれ男の声が響き渡った。

「アレシアが生きているというのは事実なのか！？」

入り口に立つ男の声は喧騒の中でも響き渡り、全員が押し黙って視線を彼へと向ける。

その中の一人である私の目にも、彼の姿が映った。

そこには黒一色の服装に身を包み、肩を上下させている父の姿があった。

「お父さん……お父さん！」

「アレシア……」

逸る気持ちに足が動き出す。デウラテさんとハフムさんを掻き分け、お父さんに駆け寄る。お父さんも私に向かって走り出す。十メートルもない二人の距離はあっという間に縮まり、私はお父さんの腕の中に抱き寄せられた。数センチの空間を境に、目と目が合う。

「大丈夫か？ 体は何ともないのか？」

不安げに語りかけてくるお父さん。大丈夫だよ。

「私はいたって健康ですよ」

「そうか、良かった」

お父さんの顔に、穏やかな笑顔が浮かんだ。つられて私も笑顔になる。

ギャラリーと化した近所の皆さんからは祝福の拍手が上がり始めた。

五、理性は何処へ

お父さんと抱き合い、お互いの存在を確認しあっていた時の事、あの時お父さんが近所のみなさんに「皆さん、申し訳ないが家族だけにしてくれないか」と言ったのが始まりだった。それに対してデウラテさんやアティースアさんみたいな良識的な一部の人を除き、一斉に抗議しだしたのだ。

「あら、私もアレシアちゃんを抱っこしたいわ」

「おいおい、オレ達にも少し位触れ合わせてくれよ」

「その肢体にすりすりさせれ！」

「いいなあ、ジエイソンさん」

「マリーさん聞いているのか！ いくらでも出すから！」

「おやまあ政府の奴隷になったジエイソンさんのお出ましかい？」

「ちょ、おばあちゃん黙って！」

「えーっ！ ワタシもあの女神様といちゃつきたい！」

「気持ちは分かるけど……あたしゃあんたの将来が心配だよ」

お父さんはみなさんの剣幕に一瞬たじろいだが流石は軍人、直後に言い返す。

「本当にすまないと思う。だがしかし」

「何よ！ アレシアちゃんは私の物よ！」

何という事でしょう。逆接詞を口にするると即座に反撃されてしまいました。

ずんずんとファァーティマさんがお父さんに近寄り、私はあつという間にファァーティマさんの胸の中に強制移送されてしまった。

「あー、もう！ くっうー！」

そしてファァーティマさんは私の頬に顔を擦り付けて来る。おーい、あなたは何がしたいんだ。

「あら、私にも抱かせてちょうだいな」

「オレにも少しだけいいだろ？」

「ファーティマさんずるいぞ！」

「アレシアちゃん……欲しいなあ」

「大体政府は情報を民衆にもっと流すべきなんだよ。そうすりゃ平和になるんだ」

「あーはいはい。そうですネー」

「ママ！ ワタシ行ってくるっ！」

「え？ どこにだい？」

「というか……ファーティマさんに顔を擦り寄せられる私は恥ずかしさで一杯だ。」

大体私はこの体に転生してから言葉遣いと排泄方法以外何一つ変えてないんだ、その言葉遣いだってTPOを弁えてた私は昔から使い慣れてた丁寧語に変えただけなんだ。髪は確かに長い、これは両親の強硬な反対にあつて仕方なしにしているだけだし、私の傍には長髪の美少女顔の男子がいたからそこまで変だと思えないんだ。排泄方法はもう諦めたよっ！

とにかく！ まだ精神は肉体が第二次成長を迎えていない以上、転生以前の男性のソレを維持し続けているんだ。だからつまり何が言いたいかと言うと妙齢の女性に抱き着かれて頭が沸騰しそうなんだよっ！

お父さん、何とかして。すぐるような思いでお父さんに目を向けるも、生暖かい目線で見つめ返された。ひどい！ 貴様それでも父親か！

「おばさんワタシにもっ！ ワタシにも触らせてっ！」

軽い振動と共に私の足が何者かに掴まれる。下を見ると六、七歳の女の子が私の両足を抱きしめている。何をしてるのこの子！？

「お、おばさん！？ 失礼ね！ 私まだ二十歳よ！」

残念ながら地球と違って結婚適齢期が十五歳前後なので立派に行き遅れだよ。というか放して！ って、今まで脳内でしか喋ってな

「助けてお父さん！」

「アレシア？っ！」

私の必死の叫びに瞬時に反応し飛び出したお父さんは、一瞬の内に私をお父さんの手の内に確保する。お父さんは知恵も回れば戦闘能力もある有能な人物、頼りがいがあるね。

「た、助かりました」

ともかく感謝する。あれ、何で丁寧語だとすらすら言葉が紡げらんだらう。

「それはどうかな、アレシア」

「え？」

お父さんの懐疑的な返答に辺りを見回すと完全に包囲されていた。やばいです。

「ジェイソン、お帰りなさい。アレシアちゃんを渡してくれるかしら」

呼吸の荒いお母さん。私と同じ白銀色の長髪を振り乱し翠色の目を爛々と輝かせながら口元に垂れたよだれを拭こうともせず、にじり寄って来る。綺麗な顔が台なしだ。

「マリー、今の君は正気じゃない。少し頭を冷やしてくるんだ」

ちよつとおかしい事になっているお母さんに、お父さんが強烈な口撃を与える。

「な、何ですって!?!」

うわあ、オブラートに包んで言おうよお父さん。お母さん激昂しちゃったじゃないか。

「何よつ！ 私が帰って来てって言うても帰らないくせに何で今日は帰って来るのよ！ アレシアちゃんは確かに可愛いし綺麗だし食べちゃいたいなーとは時々思う事もあるけどそれでも私はあなたの妻なのよ！ 妻より娘が大事なの!?!」

お父さん、これは本格的にやばいじゃないか。頭に離婚の二文字がちらつく。私はいいから妻と答えとくんた。

「マリー、アレシアは今まで死んだと思っていたんだぞ？」

「だから何よっ！ そんなにアレシアが大事ならアレシアと結婚……させないわ！ 絶対させるもんですか！ アレシアは私が引き取ります！」

もつ何言ってるんだ。目茶苦茶にも程がある。

「マリー！」

「あ……」

お父さんは私を床に抱き下ろし、お母さんを抱きしめた。

「マリー、君の事が好きだ。君を大事に思っている。そうでなければ結婚なんてしないさ」

ひゅーひゅー、よく真顔でそんな事言えるねー。ん、誰だよ腕の袖を引つ張るのは。今大事な所なんだ。

「アレシアちゃんはこっちでいい事しましょうね」

はは、フアーティマさんまだやる気満々みたいですね。

「え、いや、ちよつと、お父さん？」

悲痛な思いでお父さんを見つめるが、今お取り込み中のような。真剣な眼差しでお母さん見つめ合っている。

「中々帰って来られないのは本当にすまないと思っっている。でも君だって今帰って来たのがいつもと違う意味なのは分かるだろう？ 亡くなったはずの娘が突然帰って来たとは知らされたんだ。マリー、君ならこの知らせを聞いたオレの気持ちを理解してくれるんじゃないか？ どうだい？」

「うん……ごめんなさい怒鳴ったりして。でも、寂しかったの」

フアーティマさんに引きずられ、近所の皆さんの中心に連れ込まれる。どうしよう、このまま私は一体ナニをされてしまうのだろうか。

「あんた達邪魔よ！ 男は消えなさい！」

「何！？ そりゃ差別じゃないのか！？」

「何でだよ！ 愛でるだけじゃないか！」

そこに一つの光明が差し込んで来た。男性陣を女性陣が排除にかかったのだ。この抗争、上手くすれば隙をついて逃げられるぞ。

「うるさいねえ！ さっさとどっかいつちまいな！」

「うわあ！ 狭いんだから杖を振り回すなっ！」

「痛い！ 当たってる！ 当たってる！」

な、情けない。あんたら男だろ。男性陣はホーエル家のお婆さんによってあっさりと廊下の隅に追いやられてしまった。

「仕事にのめり込み過ぎていたかもしれないな。これからは出来るだけ帰って来るよ」

「本当！？」

「本当だとも」

「ジエイソン！」

「ぐ……無念、だ」

「いてて……杖は反則だろ」

「まさか本当に当てに来るなんてなあ」

「さあここからは女だけよ」

フアーティマさんが胸を張って宣言すると同時に、体の至る所をべたべたと触られていく。

「あらあらまあまあ！ 触り心地の良い肌ねえ！」

「はあー、どうやったらこうなれるのかしら。この白銀の髪、腰まで延びてるのに梳いても全然手に引っ掛からないんだけど」

「ワシもこんな孫が欲しいねえ。見てみいこの目！ 紅いんだよ。幸運の印だよ」

「本当、宝石みたいだね」

「えへへー、女神様のお肌すべすべー」

「あたしは複雑な気分だよ。でも、ま、アレシアちゃんなら仕方ないかねえ」

あー、何だかむかむかして来た。何だろう、俗に言う勘忍袋とやらが切れてしまったみたいだ。

「もう服が邪魔くさいわね。脱がしちゃいましょう」

「あら！ 大胆ねえ！」

「ええっ！？ ぜ、全裸にしちゃうの！？」

「全く、最近の若いのは……服からちらっと見えるのがいいんじゃない

ないか」

「おばあちゃん、いいじゃない！」

「えへへー、女神様脱ぎ脱ぎしましょー」

「初夜つて訳かい、気が早いねえ」

私はね、伊達にここまで生きてないんだよ。この程度の修羅場、本気を出せばちよちよいのちよいと解決出来るんだ。でもね、久しぶりの再会で私の為に舞い上がってるんだと思ってたからこそ遠慮をしてたんだよ。

だがもう限界だ。付き合ってられん。

「ふふふふふ。ふふふふふふふふ、今までこつても好き勝手にやってくれたものですねえ」

「ア、アレシアちゃん。何だか怖いんだけどー」

「あ、あらあら。やり過ぎたかしら」

「ご、ごめんなさいアレシアちゃん。私どうかしてたわ」

「め、女神様……ふええーん！ ママードーしよー！」

「おー、よしよし。自業自得だね」

「も……もう付き合いきれません！ さようならー！」

私は魔力を身体に纏わせ【身体強化】し、力技で包囲網を離脱。階段を駆け上がり自室に閉じこもった。少しは反省しろ！

五、理性は何処へ（後書き）

私の表現力不足で申し訳ありませんが、近所の人々の凶行はひとえにアレシアの魅力が原因なのです。彼らが異常なのではなく、アレシアが異常なのです。

六、鐘の音と共に

私が二階の自室に駆け込む事遅れて数十秒後、どやどやと近所の人々が部屋になだれ込んで来た。そんなに広くもない私の部屋に全員は入り込めず、先陣を進むファータイマさん筆頭に女性陣ばかりがぎゅうぎゅうになりながら室内へ進入して来る。これを受けて私は部屋の最も奥にあるベッドへと後退。シーツに潜り込み、籠城を決め込む。

とは言え、実はもう怒ってはいないけれど。階段を駆け上がった体を動かしたらストレスは発散され、平静を取り戻す事が出来た。

しかし後々同じ事をされたら嫌なので、今の内にきっちりとけじめを付けておこうと思ったのだ。つまり、私がどれだけ嫌がるかを今の内に知って貰おうという事。

「アレシアちゃん！ ベッドでならいいって事ね！」

だが、シーツの中にいる私の耳に息を弾ませたファータイマさんの声が届き愕然とした。

「何でそうなるんですか!？」

私は思わずシーツから顔を出し突っ込んでしまう。何て事だ。話が全然通じてないじゃないか。

「ファータイマ！ あなたいい加減にしておきなさいよ！」

よかった。ファータイマさんの右隣に位置するデウラテさんが飛び掛かるうとするファータイマさんを押し止めてくれた。

「う……でも、でもさあ！ あんな姿見て思いとどまらせて言うの!？ 無理に決まってるじゃない！」

「何言ってるの！ アレシアちゃん怖がってるじゃない」

デウラテさんがファータイマさんから私を庇うようにシーツ越し

に優しく抱きしめてきた。

「ああっ！ その手があつたかつ！ 親切心にかこつける作戦だなあ！ くそっ、離れるおっ！」

上に覆いかぶさるデウラテさんの腰を掴み、ファーティマさんが引っぺがそうとする。

「ち、違つわよ！ 私はただ、アレシアちゃんを安心させようと思つて……」

「嘘だっ！」

「嘘じゃありません！」

「嘘！」

「だから違います！」

「あー、もう！ 二人共黙りな！ ほら！ デウラテさん、あんたもアレシアちゃんから離れるっ！」

二人の騒々しさにたまり兼ねたらしく、イヤニヤさんが仲裁を買つて出た。二人まとめて強引に私から引っぺがした。そしてしわくちゃになったベッドに転がりながら様子を見ていた私の前に立ち、その豪快で優しそうな太った丸顔にすまなそうな表情を浮かべる。

「アレシアちゃん悪かったねえ。皆あんたに会えたのが嬉しくてつい羽目を外し過ぎちまつたんだよ」

そう言ってくれるのは嬉しいんだけどね。何だか皆の手つきがやましかった気がしたから、つい逃げ出してしまったんだよね。

でも、まあ、皆もイヤニヤさんのように反省した事だろうし、いつまでも意地張ってるのもつまらないし、そろそろ頃合いかな。

「もう、服脱がしたりしませんか？」

ただここだけは譲れない。絶対に。皆の前で全裸になるとか、公開処刑じゃん。あー、想像するだけでも恥ずかしいよ。というか何故服脱がすの？ 私がここにいる情報の発信源は間違いなく医師のファイウルさんだから、怪我がないか確かめたかったのかな。

「……！？ あ、ああ、もうしないよ。だから出ておいで」

イヤニヤさんの他、私を見ている全員が今の質問に動揺をあらわ

にし出す。うん、やはり後ろめたさがあるんだろうね。

「……分かりました」

私はシーツを体からはがし、ベッドに腰掛けた。

すると私の前に先程私の足にしがみついていた女の子がイヤニヤさんの後ろから出て来て、右手を地面と平行に延ばし、体を腰から直角に曲げた。これは地面に頭を付ける土下座より程度が上の謝罪だ。どういう事かというところ、ある魔獣の真似をする事で自らを人間以下だと表現しているから。

「女神様ごめんなさいっ！」

ともかくこの謝罪方法は大袈裟だ。小さな女兒にここまでの覚悟をされると逆に申し訳ない気持ちになって来る。

「え、と。頭を上げて下さい。私はもう気にしてませんから」

女兒が首から上だけを上げ、目が合う。女兒の丸っこい顔が不安に染まっている。

「許してくれるの？」

「はい、私はあなたを許します」

私の言葉を聞いた途端、女兒の碧い目は輝き背中はやきつと延びた。

「ありがとう！ ワタシはね、チャーイってゆーの。女神様よろしく、ねっ！」

この女兒の名前は、チャーイというのか……って、そうじゃない。

「女神様って何です？」

「違うの？」

チャーイちゃんはポカンと私を見つめてくる。

「違いますよ」

私はばっさりと否定した。

「じゃあ、何？」

「何って、私はアレシアですが。というか何で女神様？」

「すごくキレーだから」

「それだけですか？」

「うっん、それだけじゃないよ。声もキレーだし、イー匂いもするし、動きがカワイーし、おめめが紅いし、髪もキレーだし……」

それは容姿だろ。というかベタ褒めし過ぎて胡散臭い位だ。さっきの事はもう怒ってないからそんなおべっか使わないでいいのに。また申し訳ない気持ちになる。

「とにかく、私は神様ではありません。だからアレシアと呼んで貰って構いません」

「でも、いいの？」

「いいんです。寧ろ、神様と呼ばれる方が嫌です」

道端で女神様なんて呼ばれてみる。ものすごい恥をかくぞ。

「あ、アレシア……様？」

「何で様なんて付けるんですか。呼び捨てでお願いします」

「アレシアお姉ちゃんじゃ、ダメ？」

まあ、私の方が年上だもの。呼び捨てには抵抗があるのかもしれない。ただ……お姉ちゃん、か。私は男だったのだからなあ。

「ま、いいですよ」

「ありがとうございます！」

「おっと」

諦めの気持ちと共に了承した私の懷に、チャーイちゃんが飛び込んで来る。私は勢いに押されてベッドに背中から倒れ込んでしまう。

「えへへー」

チャーイちゃんは私の胸元に顔を埋め、ほお擦りを始める。時々くすぐったいような感覚に襲われ、体がその度に震えるのだが、チャーイちゃんの表情がとても嬉しそうなので、何も言う事が出来ない。

「あ、ずるいつー！」

「やめなさい！ あなたが飛び込んだら危なっかしいわ！」

「それどういう意味よ!?」

私が自らの体に戸惑っていると、鐘の音が聞こえ始めた。これは確か、ロミリアのあちこちに設置されている時計台がおよそ三時間毎

に鳴らしている鐘の音だ。この鐘は……九時を知らせているものだろう。

「いけない！ 仕事に遅れたっ！」

「やべっ！ オレもだっ！」

「くそおっ！ 少しも触れられなかったぜ！」

「何だか釈然としないねえ。ワシらは見るばかりかい」

「おばあちゃん！ いいから急いでっ！ アレシアちゃんじゃあね！」

皆が慌ただしく動き出すが、もう間に合わないと思うなあ。我が家には魔力灯が各部屋の天井に吊されてるけど、まだ大半の家庭の照明が植物油を燃やすランプなのでこの世界の人々は日の出と共に活動を始め、日の入りと共に活動を終える。今は冬だから、まあ六時頃に起きて、七時半辺りから仕事に入ってるだろうね。うん、完全に遅刻だ。

「アレシアちゃん、またねっ！」

「はい、また会いましょう」

仕事に就いている皆が嵐のように去っていくと、部屋にはお隣りに住んでいる専業主婦のデウラテさんとイヤニヤさんとその娘さんらしいチャーイちゃんだけが残った。

「何だか、静かになっただわねえ」

「そう、ですね」

「ようやく入れるわ……」

「あ、お母さん」

何だかくたびれた声をしたなと扉の方へ視線を向けると、お母さんとお父さん、それに帰って来たお祖父さんにディーウアが室内に入ってきた。

「あら、マリーさん。どうして今まで入って来なかったの？」

「実の娘が帰って来たんじゃないか、傍にいてやりなよ」

デウラテさんとイヤニヤさんの咎めるような口調の声に、お母さんは黒いオーラを漂わせながら答えた。

「ふふふ。そりゃ入れればそうしたわ。でも皆がアレシアちゃんの部屋に入って行くから仕方無しに待ってたのよ」

「ご、ごめんなさいマリーさん」

「わ、悪かったね」

「女神様、怖いよ」

お母さんの迫力に気圧されたデウラテさんとイヤニヤさんは謝り、チャーイちゃんは私に強く抱き着いてきた。

「でもいいわ。今からたっぷり触れ合いましょう、アレシアちゃん」
そう言うなりお母さんはベッドに座り、私とチャーイちゃんを抱き上げてその膝上に乗せる。

私達は窓から差し込む温かな日差しに囲まれながら、ゆるゆると過ごしたのだった。

七、昼となつて

鐘が大気を震わせ、正午を告げる。

時が流れるのは早いものだ。

私はチャーイちゃんを膝に乗せ、お母さんの膝上に乗せられ、周りを家族や親しい人達に囲まれて他愛のない話をしていたらあつという間に太陽が真上に昇っていた。

「あら、もうお昼なのね。私帰らないと」

しかしそんな時間も終わりのようだ。デウラテさんが帰宅するらしい。

「あたしらもおいとましようか」

イヤニヤさんもか。まあ、お昼ご飯の時間だし、潮時なんだろうね。寂しい気もするが、もう会えない訳じゃない。

「えーっ！ やだやだ！ アレシアお姉ちゃんといるーっ！」

だがチャーイちゃんが駄々をこね出した。私の腰にギュツと手を回し、断固帰らない体勢を取る。

「こら！ わがまま言っんじゃないよ！」

「やだつたらやなの！」

「あの、よかつたら皆さんうちで食べて行きませんか？」

母親と娘が睨み合う険悪な雰囲気はどうにかしゃうとお母さんが気をきかせて皆をお昼ご飯にご招待。私の腰に抱き着いているチャーイちゃんは満面の笑みを浮かべて顔を私のお母さんに向けて。

「いいの！？」

「もちろんよ」

期待に目を輝かすチャーイちゃんに、お母さんも笑顔で返事をする。

「わーい！ やったー！」

ただイヤニヤさんはまだ納得してないみたいだ。お母さんへ控えめに辞退を申し出る。

「でも、迷惑だろう？」

「そんな事ないです。ね、あなた？」

「是非ご一緒して下さい」

「嬉しいけど、私はアーザスにお昼ご飯用意しなくちゃならないから」

「それはあたしも同じさ。ほら、チャーイ。お兄ちゃん達を飢えさせたいのかい！？」

デウラテさんもイヤニヤさんも日常があるのだ。残念だが私とずっとお話してる訳にはいかない。

「うえーん！ お姉ちゃん！」

まだ彼女は小さいからそれが分からないだろうね。チャーイちゃん泣き叫び、私にしがみついて離れない。

「困ったねえ」

どうしたものかと、ため息をこぼすイヤニヤさん。

「もう皆まとめて呼んじゃいましょうよ。私とデウラテさんとイヤニヤさんがそれぞれ料理を持ち寄ってうちにまた集合すればいいでしょう？」

お母さんも思い切った提案をし出したね。もうまとめて全員呼べばいいじゃんときたよ。

「あら、それ面白そう。イヤニヤさんはどうします？」

デウラテさんは好意的。さて、イヤニヤさんはどうだろうか？

「うーん。ま、いいんじゃないかい？」

お、これでチャーイちゃんのがままが通ってしまった。教育上大丈夫かな。泣けば意見が通るって思い込む事がなければいいんだけど。

「じゃ、何を作るか決めましょうか。えーと、食材庫に何があったかしら」

「食材庫の中を見せてくれるかいマリーさん。同じ物作っただらなからね」

「分かったわ、ついてきて」

「あ、私にもお手伝いさせて頂けないでしょうか？」

「ディーウアちゃん、ありがとう。助かるわ」

「チャーイ！ お行儀良くしてるんだよ！」

「はい！」

私がチャーイちゃんの将来を心配しているのを露知らず、お母さん一同はこうして階下へと行ってしまった。部屋にはチャーイちゃんに、お父さんとお祖父さんが残される。部屋の隅にいたお祖父さんだったが、お母さん一同がいなくなったので私の隣に腰掛け、私を見つめる。

「元氣じゃのう、マリーさんは」

「そうですね」

「本当に、よう帰って来てくれた……」

お祖父さんは小さく呟き、私の頭に手を乗せる。見た目はしわだらけだが、とても温かい手だ。ほんわかした気持ちにさせられる。

「えへへへへー。お姉ちゃんあつたかーい」

チャーイちゃんはさつきからずっとくっついたまま。離れる様子はないみたいだ。

まあ、ここまで慕われるのも嫌な気分じゃない。しばらくこうしていようかな。

四人でのんびんだらりと過ごしていた部屋に、いきなり一人の少年が乱暴に扉を開けて入って来た。陽光に暖められた室内の空気が、廊下の冷たい空気と入れ代わる。

「チャーイ、ご飯出来……た、ゾ」

入って来たのは、安価で庶民の服によく用いられるレモン色の生

地で出来た長袖長ズボンに、靴底が木で出来たサンダルを履いた少年。サンダルに収まる足には、暖かそうな靴下を穿いている。年齢は私と同じ七歳程度だろうか。身嗜みにはまだ気を使ってないようで、茶色いくせ毛が所々跳ねているのが印象的だ。

その少年は扉のノブに手をかけたまま、姿勢を崩さずにいた。少年の目は私と私の膝上にいるチャイイちゃんに向けられ、一向に動き出さない。

「どーしたの、ルールお兄ちゃん？」

疑問に思ったチャイイちゃんの呼び掛けにもまるで反応はない。どうすべきかと思い、お父さんとお祖父さんの方を見てみる。

あれ、二人共特に気にしていないみたい。ただお父さんの雰囲気は心なしか悪いような気がするけど、それ以外の変化は見られない。

「ジェイソン、どうする？ あの子も餌食になったようじゃぞ」

「まだ分かりませんよ。ただ驚いているだけではないですか？」

ああ、そういう事か。お祖父さんの言葉の意味は分からなかったがお父さんの発言で合点がいく。あの少年は死んだと思われていた私が存在しているのに驚いている訳だね。

「お兄ちゃん、だいじょーぶ？」

しかし身動きを止めた兄が心配になつたらしいチャイイちゃんは私の膝上から下りて、少年に近付いていく。ついでだし、私もついていこう。ベッドから滑り降り、右手にある木製のがっしりした机に背中をもたれさせているお父さんの横を通り抜けようとした。

すると、何故かお父さんに肩を掴まれた。

「何ですか、お父さん？」

「いや、何でもない」

はっとした表情をしたお父さんはすぐに肩を離す。

「？」

結局何だったのだろうか。でもお父さんが何でもないと云ってるからいいや。

狭い部屋だ。お父さんの脇を通過して十歩もいかずに少年の目の前

に立つチャイイちゃんに追い付いた。

「お兄ちゃん、どーしたの？」

チャイイちゃんがとんとんと少年のお腹をつつく。それに反応した少年は視線を下に向け、チャイイちゃんを見る。

「お兄ちゃん？」

チャイイちゃんの心配げな表情に気付いたらしい。少年は無事だと告げる。

「あ、うん。大丈夫。それより……」

チャイイちゃんと目を合わせる為に俯いていた顔を上げ、私に視線を移す。

「うわあっ！」

えーと……何か、私を見た瞬間のけ反られたんだけど。おまけに転ばせてしまった。

傷付けばいいのか、申し訳なく思えばいいのか、憤ればいいのか。複雑な心境だ。とりあえず、適当に声を掛けてみる。

「あーと……大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫デス」

「良かった」

廊下に尻を付いた少年の足元まで近寄り、立ち上がるのを助けようと思つて手を差し延べる。

「どうぞ」

「アアアアリガトウゴザイマス」

「あいつ……」

「ジェイソン、落ち着けっ」

少年は顔を真っ赤にしながら私の手を取りゆっくりと立ち上がる。思春期かい？ 若いねえ。

「お兄ちゃんずるい！ ワタシもっ」

何がずるいんだか分からないが、右手を少年に、左手をチャイイちゃんに握られて両手がふさがった。

この少年、チャイイちゃんにルールお兄ちゃんと呼ばれてたけど

……どんな人だったっけかな。あーと……ああ、思い出した。私に何かとちよつかいかけて来た男の子といつても一緒にいた子供だ。何をする訳でもなく私を見つめてきて、そのくせ私が視線を合わせようとすると首をあらぬ方向へ曲げてしまう。そんな子だった。

「あなた……ルール君はお昼ご飯が出来たから呼びに来てくれたんですよね？」

「ウン、ソウ」

その時、階段を駆け登る音がした。ルール君が戻って来ないから誰か呼びに来たのかな。私は階段の方へと首を左に曲げる。

「本当にいた……」

「マジかよ……」

現れたのは二人の男の子。一人はデウラテさんの息子さんで、わりあい仲の良かったアーザス君。さらさらの金髪が特徴のかわいらしい男の子である。もう一人は私にいたずらを敢行して来たグループのリーダー、ラインラ君。ルール君の兄でもある彼は細身の弟と違い、若干体がかっちりしている。

「お二人共、久しぶりですね」 何分突然現れたもので、たいした言葉を紡げなかった。無言よりはましだろうと、ありきたりな言葉を再会の言葉とする。

それが気に食わなかったのだろうか。アーザス君が握りしめた左手を自分の胸に当て、目には涙を浮かべながら声を上げる。

「久しぶりじゃないよ！ 死んだって聞いたからボクは……ボクがどんなに悲しんだと思う！？」

そんなに悲しかったのか。申し訳ない気分になり、口から謝罪の言葉が滑り出す。

「すみません」

一方、アーザス君の隣に立つラインラ君のアーザス君を見る目を冷ややかだ。

「おまえ男のくせに泣くとか……おおげさだな」

「君にはボクの気持ちは分からないよ」

呆れるラインラ君に対してアーザ君は涙を指の腹で拭きながら
そっけない態度で接する。そういえば、この二人あんまり仲が良く
なかったな。

「わかりたくもねーよ」

そう言つと私に歩み寄つて来るラインラ君。

「よく生きてたな。すげえ爆発があつたつて聞いたから死んだと思
つたぜ」

「何て事言つんだ君は！」

「いいんですよ、アーザ君」

私の為に怒つてくれるのは嬉しいんだけどね、これでも彼は私を
案じてるつもりらしいよ。

「で、でも……」

「本人がいろいろ言つんだろ？ 外野は黙つてな」

「くっ」

久々だなこの応酬も。私は敢えて自信過剰に答える。彼にはこれ
位スパイスをきかせないと味が薄すぎるだろうから。

「ふふ、私は学園に特待生として招かれたんですよ。あんなの楽勝
でしたね」

「よく言つぜ。二年も帰つてこねえで」

お互いにニヤリと口の端を吊り上げる。彼と付き合つと色々荒つ
ばい目に合うのも覚悟しなきゃならないが、気が置けないから楽に
過ごせるのは嬉しい。

「ん？ 何でおまえオレの弟と妹の手を握つてんだ？」

何でと言われても困る。

「……成り行き、ですかね？」

「意味わかんねー奴だな。つーかですます調とかやめろよ。先生と
話してみるみたいでいらいまする」

「あれ、私にわざわざ弱点を教えてくれたんですか。ありがとう」
ざいます」

「ちっ。おまえもいつまで手握つてんだ」

相変わらず乱暴な奴。ラインラ君は真っ赤になっているルール君の頭に拳骨を振り下ろした。両手がふさがっている私にはどうする事も出来ない。拳骨はルール君の頭頂に直撃する。

「いたつ。何すんだよ兄ちゃん！」

何だかぼんやりしていたが、殴られたショックで正気に戻ったようだ。頭を両手で覆い抗議の声を上げるルール君。目に涙をにじませながら兄を恨みがましく睨み付ける。

「知るか。おまえがいつまで経っても戻らないのがわりいんだ」

ルール君とラインラ君が言い争い始めたのに乗じてアーザス君が近付いて来て、私の手を握る。

「さ、アレシアちゃん。こんな奴放っておいて下に行こう」

「そーだよ、お兄ちゃん達なんかほっておいちゃおー！」

チャーイちゃん、あんな兄を見捨てるのかい？

しかしその兄は妹の裏切りを聞き逃さなかったようだ。

「妹のくせになまいきだぞ！」

「べーだ！」

この兄があつてこの妹あり。兄の脅しに屈さず、舌を出して挑発する。

「このー！」

「アレシアちゃん危ないっ！」

あつ、馬鹿。妹に殴り掛かる奴があるか。チャーイちゃんを引っぱり私の懐に潜り込ませ、私自身を盾とする。

「はあ……女子供に暴力を振るって楽しいですか？」

私に殴り掛かっても返り討ちになるだけだった事を思い出したのだろうか。ラインラ君は振り上げた拳を所在なさ気に下ろした。

「ラインラっ！アレシアちゃんに当たったらどうするんだ！」

顔を蒼白にしてラインラ君に詰め寄るアーザス君。

「うるせー！誰だろうが関係あるか！」

今度は私の前に立ち塞がったアーザス君へラインラ君の右拳が放たれる。アーザス君に避ける気配はない。ああもつ。暴力で何でも

物事を解決出来ると思っっているのか。

まあ、彼は殴り慣れてるから逆に怪我を負わせる事はないんだけど一応止めに入るかな。

「そこまで！」

私が動こうとしたその時、お祖父さんの耳をつんざくような大声が響いて全員の体が硬直する。

気が付けば私のすぐ隣に険しい表情をしたお祖父さんが立ち、ラインラ君の振り上げた拳を掴んでいた。

「あ……え？」

拳を掴まれたラインラ君は呆然と拳を見、それからお祖父さんの顔に視線を移した。

「さ、皆。お昼ご飯を食べに行こうじゃないか」

何が何だかよく分かっていない皆にお祖父さんは険しい顔を一転してほころばせ、陽気にそう言い放つ。

邪気のないお祖父さんの笑みに、緊張した場の雰囲気はすっかり流れてしまい、何だか釈然としない気分になりながら一行は階下へ降りて行った。

八、皆でお昼ご飯

皆と一緒に階段を下り、廊下を通過して食堂に足を踏み入れる。

食堂ではイヤニヤさんとデウラテさんが料理の配膳をしている所だった。木で出来た食卓には真っ白いテーブルクロスが掛けられ、並べられた料理の合間には花瓶が置かれて色取り取りの花が飾られている。窓から差し込む明るい太陽の光も合わさり、食堂は随分と晴れやかになっていた。

「あんた達遅かったねえ。一体何をしてたんだい？」

イヤニヤさんが大きな銀白色の四角いお鍋から陶器で出来た円形の平皿に、雪魚と言われる、冬季にしか捕れないアジみたいな青魚を丸ごと焼いた物を盛り付けながら、声を掛けて来る。

「久しぶりの再会だったもので、少々話し込んでしまったんです」

「……そうかい。良かったねえ」

私の返事を聞き、微笑を浮かべるイヤニヤさん。

「はい」

そこにラインラ君が近くにあつた椅子を引つ張り出し、背もたれにあごだけに乗せた格好で座りながら会話に割り込んで来た。

「なあ、オレ達はどこに座ればいいんだよ母さん。どこでもいいのか？」

「ラインラ。みっともないからよしな」

顔をしかめて注意するイヤニヤさんだが、ラインラ君は姿勢を正そうとしない。

「腹減ったんだよ。もう動けねー」

「ラインラっ！」

イヤニヤさんは辛抱出来ず、ラインラ君を怒鳴る。

「へいへーい」

あ、一応言う事聞くんだ。ラインラ君は気のない返事をしてから、椅子に背を預けた。

「全く、始めからそうすりゃいいんだよ」

イヤニヤさんはそう呟き、また魚を取り分ける作業に戻った。

席、ねえ。お父さんとお祖父さんはいつもの場所に着席しているようだし、私も定位置に着こうかな。私はいつもの場所、廊下から食事室へ入ると食卓で左右に食事室が分断されるのだが、その左側の奥から二番目の席に座った。ちなみに椅子は左右共に五脚ずつあり、ラインラ君は廊下から入ってすぐ右側の椅子に座った。

「アレシアちゃん。あの、さ。隣に座ってもいいかな？」

するとアーザ君がもじもじしながら近付いて来た。私の隣の席を所望らしい。

「ダメーっ！ お姉ちゃんの隣はワタシ！」

しかしアーザ君の後ろにいたチャーイちゃんから猛烈な抗議の声が上がる。

「チャーイちゃん、落ち着いて。アレシアちゃんの隣は右と左と二つあるから大丈夫だよ」

「そっか」

チャーイちゃんはすぐに納得した。

「それで、どうかなアレシアちゃん」

視線を不自然にあらこちへ向けながら私に話し掛けてくるアーザス君。私は黙って立ち上がり、一つ右の席に移動した。

「あ、アレシアちゃん？」

そんな不安げな目で見ないでくれ。

「私の左隣りの席はお母さんの席だったんですよ」

「それじゃあ……」

意味を理解したアーザ君が顔をほころばず。

「ええ、アーザス君もチャーイちゃんも、もし座りたければご自由にどうぞ」

「ありがとう！」

「えへへへー、お姉ちゃんとお隣りー」

そんな事をしてしていると、食事室に扉一枚隔てる台所から、銅製の底の深い寸胴鍋を抱えたディーウアがやって来るのが見えた。肢体に密着している灰色のライダースーツの上に、フリルの着いたレモン色のエプロンを着用した姿はちぐはぐな気がしてならない。

「皆さん、気を付けて下さいまし」

ディーウアは鍋をお祖父さんのすぐ隣に安置する。その後ろからスープ用のお皿を持ってお母さんがやって来た。

「後はスープだけみたいね」

「マリーさん、私手伝うわ」

「ありがとう」

ディーウアがお玉でスープを盛り付け、お母さんからデウラテさん、デウラテさんからイヤニヤさんの手を渡つていき、スープは全員の元に行き渡った。あ、お手伝い位すれば良かったかもしれない。まあ、次から気を付けよう。

スープの配膳が終わると、お母さんはアーザス君を挟んで私の左側に、ディーウアはチャイイちゃんを挟んで私の右側に着席した。

「では、食べましょうか」

食卓の短辺に座り、全員を見渡せる位置に座るお父さんのこの言葉を合図に、一斉に皆食べ始めた。

私はまず手始めに雪魚の丸焼きから手を付ける。僅かな焦げ目の付いた皮をフォークで破り、中の身を見してみる。白くて脂もたつぷりのおいしそうな見た目だ。

よし、じゃ……骨の排除作業に移ろうか。

まずは背骨を視認しなくては。片側の肉を細かい骨が混じらないよう細心の注意を払いながらお皿の隅に寄せる。そして背骨を鮮明に視認出来るようにし、慎重に尻尾を掴んで骨と肉の剥離作業に入る。慎重に、慎重に……くっ、まだ骨と肉がくっついてた。これを一気に引っ張ってはならない。そんな事をしようものなら、背骨

に付随している小さな骨達の剥離が困難となってしまう。びーけあふる、なのだ。右手で尻尾を掴んだまま、左手でフォークを取る。こういう時、お箸があればと思うが贅沢は言ってられない。骨と肉のくっついちゃっている部分をフォークでこつり、こつりと慎重に叩いていく。よし、剥離成功。背骨排除作業に戻ります。フォークを置き、左手は雪魚の頭へ。一回深呼吸をして、背骨を剥がし始める。あと少し、よし、えいっ。

任務成功。背骨と肉は完全に別れましたっ。

「……えーと。何ですか？」

背骨排除作業の成功に達成感を覚え、何となくおでこを腕で拭おうとしたら、皆がこつちを見ているのに気付いた。

「お姉ちゃんすごいね……」

チャーイちゃんは目を輝かして私の雪魚をじっと見つめている。

「そうですか？」

つい私は懐疑的になってしまふ。というのも何ていうかだね、チャーイちゃん以外からは生暖かい視線で見られてるんだ。例えるなら、ひまわりの種を一生懸命頬袋に溜め込んでいるハムスターに向けられそうな視線だろうか。うーん、我ながら上手くない例えだ。

「ち、チャーイちゃん。骨取ってもいいですか？」

「やったー！ お姉ちゃんありがとう！」

向けられる視線に、何だかいたたまれない気持ちになった私は、チャーイちゃんの未だ手付かずの雪魚と私の雪魚を交換し再度骨取り作業に入った。

よし、この調子、この調子……ふ、もうその手には乗らないぞっ、終わりだ、えいっ。骨、排除完了。やっぱりこれ、楽しいな。でも流石にお腹が空いて限界だ。食べちゃおう。

私はほぐした雪魚の身をフォークに突き刺し、口へと運ぶ。うん、美味しい。雪魚に染み込んでる甘酸っぱい調味料が雪魚の脂とよく合ってるね。

何口か雪魚を食べた後、次に私はデウラテさん持参の野菜サラダ

にフォークを延ばす。まだ生野菜は危ないご時世、野菜は調理して食べるのが基本。このサラダも全て茹で野菜が使用されている。青いカブ（らしき野菜）に、紫のニンジン（に似ている根っこ）、赤いトマト……これは日本でも同じか。ともかく、三種類の茹で野菜には透明な液体が掛けられてるようだ。パクリ。ん……ぽん酢っぽい。醤油もないのにこの味を出すとは、デウラテさん恐るべし。ていうか、懐かしい。私は左隣りのアーザス君をちらりと見遣る。こやつ……前々からこの疑似ぽん酢を食していたのであろうか。何て、羨ましいんだ！

雪魚の骨を気にせずばりばりと頬張るアーザス君が私の視線に気付く。

「どうかした？ アレシアちゃん」

「いいえ。何でもありません」

私はアーザス君から目を背け、お母さんの作ったスープを飲む。

ん？ あれ、お母さん……これ、朝のスープを水増ししたのでしょ。具に味は染みてて美味しいのは確かだからいいけど、人を集めた食事で手抜きをするとは、何という度胸なんだ。

「アレシアちゃん、手が止まってるよ？」

「ふえ？」

おっと、スプーン口に突っ込んだままだった。アーザス君に指摘され、慌てて引き抜く。

「何だかさつきから気になるなあ。本当に何でもないの？」

いぶかしがるアーザス君の方に顔を向ける。するとアーザス君の背後にお母さんがいるのだが、今お母さんの顔が私に向けられていた。その顔はにこやかに微笑んではいるが、スープの件は話さないでね、と目だけが笑わずに語ってるのが分かる。

「ハイ。何でもありませんヨ」

「本当にかい？」

「いや、その、久しぶりに美味しい料理が食べれて感動してるのですよ」

「そう言われると嬉しいねえ」

対面の席右側に座っているイヤニヤさんから機嫌の良さそうな声が届く。

「お世辞に決まってるだろ母さん」

イヤニヤさんの右側に座るラインラ君は、黙々と料理を口に運びながらしれっとそう言った。

「お世辞じゃないです。本当にどれも美味しいと思ってます」

私はラインラ君の台詞を打ち消そうと少々強い口調で声を出した。

「私もイヤニヤさんとマリーさんの料理、好きよ。アーザスもそうでしょ？」

イヤニヤさんの左隣りに座るデウラテさんも話に乗って来た。

「お母さん。ボクも美味しいと思うよ」

私とアーザス君を証拠にして、イヤニヤさんを納得させようとするデウラテさん。

「ね、イヤニヤさん。本当にこの焼き魚は美味しいわ」

「そうかい？ そんなに手の込んだ料理じゃないんだがねえ」

謙遜するイヤニヤさんだけど、頬が緩んでいる。

こんな感じでお昼ご飯は始終和やかな雰囲気が進んでいったのだ。

九、去る人達

お昼ご飯を食べ終わった一同、それぞれが思い思いに時間を潰している。

お母さん達は食事室で会話に花を咲かせていた。

「そろそろ家事しないとまずいわ……」

「そうね」

「仕方ない、帰るかねえ」

さつきからその繰り返し。お母さん達、そろそろ動かないといけないんじゃないだろうか。

一方私達子供組は食事室の隣の居間に移っていた。居間にある対になった四人掛けソファにアーザス君とチャーイちゃんと私、ラインラ君とルール君に分かれて座り、話をしている。

「なあ、アレシア。ちよつとオレに付いて来いよ」

対面に座るラインラ君がニヤニヤしながら話し掛けて来る。

「何処にですか？」

私は眠っているチャーイちゃんの頭を膝に乗せながら、話を聞く。「外だよ」

そうだな、久々にこの辺りを見て回るのも楽しそうだ。お母さんに一言残してから行くか。

「いいですね。お母さん、ちよつと外行って来ますね」

少し声を張り上げて、食事室にいるお母さんに言葉を伝える。

「え？ 外って何処に行くの？」

私はラインラ君に視線を向けるが、ニヤニヤしたまま答えてくれない。

「ラインラ君と一緒になので心配ないですよ」

「でも、今日位家でのんびりしない？」

お母さんの表情は見ていて凄く胸が締め付けられる程必死だった。まだ、私が目に届く範囲にいないと不安なのだろうか。

ラインラ君とお母さんを天秤に架ける。ラインラ君はお空の彼方へ飛んで行った。

「ごめんなさいラインラ君。また今度にしてくれませんか？」

「ちっ、もういい。ルール、行くぞ」

ラインラ君は舌打ちをすると、足を早めて居間から出て行った。

「またね！ アレシアさんっ！」

ルール君の別れの挨拶の声に、イヤニヤさんが何事かと居間へ視線を向ける。

「ちよつとラインラとルール、何処行くんだい!？」

イヤニヤさんは慌てて立ち上がり、食事室から居間にせかせかと早歩きで入って来たが、ラインラ君とルール君の方が一足早かった。

「遊ぶ約束があるんだよ、行ってきまーすっ！」

「母ちゃん行って来るっ！」

玄関の扉が閉まる音がして、ラインラ君とルール君は去った。

「全くあの子達は……仕方ない、あたしも帰るよ。チャーイ、来なさい……て寝ているのかい」

「ぐっすりですよ」

「ま、かえって騒がないから楽だよ」

こっちの部屋に来たイヤニヤさんは、チャーイちゃんを見てホッとしていた。

イヤニヤさんは眠っているチャーイちゃんを軽々と持ち上げ、抱っこした。

「イヤニヤさん、帰っちゃうの？」

「そうだね」

「うーん、じゃあ私も帰ろうかしら」

お母さんとデウラテさんも居間にやって来た。イヤニヤさんが玄関に歩き出したので、アーザス君もソファから立ち上がり、皆で後

に続く。

「デウラテさん、マリーさん。昼食会楽しかったよ。アレシアちゃん、アーザス君も元気でね。じゃあ、さようならだ」

イヤニヤさんはチャーイちゃんを抱き抱え、玄関の扉をくぐった。私達はその背中に別れの挨拶を送る。

「さようなら」

「うん、またねイヤニヤさん」

「さようなら……ふう、私も帰るわ」

デウラテさんも玄関を抜け、外へと出た。冬の終わりの涼しい風がデウラテさんの三つ編みに結び上げた金髪を揺らす。

「あら、本当に？」

「うん、お洗濯も沢山あるし、お掃除も、まだ。やる事だらけだもん、帰る」

デウラテさんに至極名残惜しそうな表情を浮かべて、別れの挨拶をするお母さん。

「そう。じゃ、またね」

「うん、また明日。ほら、アーザスも来なさい」

「ボクなら一人で帰れるよ？」

デウラテさんの手招きにこう答えるアーザス君。しかし一人で帰れるかは問題じゃなかった。

「宿題、帰ったらすぐ済ませる約束でしょ？」

「……そうだったね、お母さん」

アーザス君は少し俯き、デウラテさんのいる石畳の道路へ足を踏み出す。

「さようなら、マリーさん、アレシアちゃん」

「また会おうね、アレシアちゃん。マリーさんご馳走でした」

「また明日ね」

「さようなら」

私とお母さんも道路へ出て、二人を見送る。デウラテさんとアーザス君が、隣の彼らの家に入るまで手を振ったり声を掛けたりした。

彼らが家に戻ったのを確認して、足を自分達の家へ向けたが、お母さんが立ち止まる。

「どうかしましたか、お母さん」

「……鍋、イヤニヤさんもデウラテさんも忘れてっちゃった」

あらら。もう二人共帰ってしまった。

「洗ってから返せばいいんじゃないですかね？ その方が喜ぶますよ、きつと」

「そうね、そうしましょう」

「あ、皿洗いは手伝います」

「何？ 突然どうしちゃったの？」

「いいじゃないですか。手伝いたい気分なんです」

「そう？ じゃあ一緒にやりましょうか」

お母さんは微笑みながら了承してくれる。喜んでくれたのなら幸いなのだが。

「はい」

私達は我が家に戻った。

「よく出来たわね。偉いわ」

皿洗いも終わり、居間のソファに座ってくつろぐ私とお母さん。

私はお母さんに抱きしめられ、頬擦りされている。多分褒められているんだろうけど、心がむず痒い。

私が恥ずかしさにむずむずしていると、玄関が激しく叩かれる音がした。

「もしかして、お鍋かしら？」

どンドン、どンドンどん。

「にしては、焦ってるような気がします」

「ちよっと見てくるわ」

「私も行きます」

二人で玄関まで歩いて行き、扉を開ける。

「すみません！ 参謀次長殿はご在宅でしょうか!?」

扉の前には、黒い詰め襟の軍服に身を包んだ童顔の男がいた。綺麗に七三に分けられた髪に、真ん丸の目が余計彼を幼く見させる。

「ジェイソンならおりますけど……どうかされたんですか?」

男は私を見つめて固まっていた。

「あの、アレシアが何か?」

慌てて姿勢を直立不動にした男は吃りながら弁明する。

「あ、い、いえ！ 私はご息女に何か誤解をしていたようです。か、可愛いご息女ですね。」

私の目線に合わせてしゃがんだ男は取り繕うように私を褒め出した。私は社交辞令として曖昧に微笑んどく。

男は顔を真っ赤にして動きを止めた。おーい、どーしたんだー?

「一体何の騒ぎだ?」

お父さんを先頭に、お祖父さんとディーウアが廊下最奥にあるお父さんの書斎から顔を見せる。

「ジェイソン、軍の方がお見えよ。」

お父さんは眉をひそめて男を睨む。

「スタンドウハル……君は私の娘に用があるのか?」

おとーさーん、魔力、魔力漏れ出てるって。スタンドウハルさんは威圧感たっぷりな魔力に体をビクリと震わせ、物凄い早さで立ち上がった。

「ち、違います！ 決してやましい思いは持っておりません!」

おい、告白してるぞ。私は思わず二、三歩後退する。

「それは、私の娘に何の魅力もないという意味か?」

「そうなの、スタンドウハルさん?」

不機嫌の度合いを増したお父さんに、目の座った笑顔を浮かべ出すお母さん。

はい? 私の両親はどうしたんだ? 怒りの矛先が間違っていないか? というか、そんなに怒る程の事か?

お父さんは体外に放出した魔力をゆつくりと一点に集中させ、お母さんは何やらぼそぼそと詠唱を始める。

うわ、本気なのか。私は両親を信じてはいるが、万が一を考えてディーウアに目配せしておく。

「そそそそんな事ないです……大変愛くるしいお子様だと思います」

もはや腰が引けまくっているスタンドウハルさん。冷や汗をダラダラと流し、顔を青くしながら弁明を続ける。

「本当か？」

お父さんが眼光鋭くスタンドウハルさんに尋ねる。

「勿論です！ 今すぐにも抱きしめたい位ですよ！」

あーあーあー。もうこの人駄目だな。あんなに不機嫌な両親にこんな事言うなんて。ディーウア、私スタンドウハルさんの命を助ける気になれないよ。

「そうか」

「そうよねえ」

ええ？ 何故今のスタンドウハルさんの言葉で怒りを納める？

何はともあれ助かったスタンドウハルさんはホッと息を撫で下ろしている。

だが次の瞬間、スタンドウハルさんは恐怖に顔を引きつらせた。

「だがもし実行すれば殺す」

「でももしそんな事したら、黒焦げにするわよ？」

お父さんは魔力を集中させた右人差し指でスタンドウハルさんを指差し、お母さんは既に何らかの魔法の発動を待機させている。この魔力量だと最低でも中級魔法クラス……放たれば確実に我が家は崩壊するだろう。

「……はい。勿論で御座いますです」

お母さんお父さんの恐喝と呼ぶしかない行動に、スタンドウハルさんは体を子犬のように震わせながらしきりに首を縦に振っていた。

「……それで、何故自宅に訪ねて来た？」

魔力を掻き消したお父さんが用件を聞くと、スタンドウハルさんが早口に切り出す。

「今朝から参謀次長殿がおられなくなつた為に業務が滞っております！ お戻り下さい！」

「あなた、無断で抜け出して来たの？」

お母さんは隣に立つお父さんの顔を窺い見る。罪悪感があるらしく、お父さんは顔を合わせない。

「……ああ」

お母さんの問いを肯定したお父さん。そのお父さんにお母さんは笑顔でこう言った。

「ふーん。良かった」

「良かった？」

お父さんにとってこの返答は意外な言葉だつたのだろう。お父さんを見つめて微笑んでいるお母さんを見つめ返す。

「だって、仕事より家族を優先してくれたのよね」

「そう、なのかもしれない」

お父さんにしな垂れかかって来るお母さんをお父さんは抱き寄せた。固い表情だつたお父さんの口には微かな笑みが浮かび、お母さんの華奢な肢体に腕を回す。そして二人は顔を徐々に近付けて行き……。

「ウオツホン！」

お祖父さんの咳ばらいで辺りに目が行くようになった両親は、そそくさと体を離れた。

「スタンドウハル、身支度をしてくる。先に馬車に戻っててくれ」
無表情になつたお父さんは何事もなかったの如く命令を下す。

「り、了解しました！ 御者からはいつもの場所に停車させてあるとの事です」

お父さんが首を僅かに縦に振ると、スタンドウハルさんは逃げるようにして開いたままの扉から出て行つた。

「アレシア、もう行かないとならないようだ」

お父さんに抱き上げられた私は、お父さんと額と額を付き合わした。

「行ってらっしゃい、お父さん。無理はしないで下さいね」

年齢にそぐわない発言だったかもしれない。お父さんは微笑した。

「ありがとう、アレシア」

私を抱いたまま、お母さんに近寄るお父さん。

「マリー、そういう訳だからもう行くよ」

「そっか。お仕事頑張ってるね」

寂しげな表情を浮かべるお母さんに、お父さんはゆっくりと近付き何食わぬ顔で口付けした。

うぐ、間近で見せ付けやがって。こっちまで恥ずかしいだろ。

「では、行って来る」

驚いて口を押さえているお母さんに、顔を真っ赤にしたディーウア、ニヤリと笑うお祖父さん、最後に至近距离であんな物を見せられてお父さんの顔を直視出来ない私を置いて、お父さんは仕事に向かったのだった。

十、日も暮れて

青空が陰^{かげ}り、紺色に近付いて来た頃。太陽が沈むという事はイコール仕事が終わる時間帯でもある。

嬉しい事に、店じまいした近所の人達が帰りのついでとして立ち寄ってくれた。そしてお祝いと称しては色々と物を頂いた。

例を挙げれば、「うへへ……またアレシアちゃんの頭を撫でられるとはなあ」「何色目使ってた馬鹿っ！」という魚屋さん夫婦からは、体長一メートルもある真つ黒なトビードウーという魚を頂き、「アレシアちゃんだ……」「これも神の思し召しねっ！ 神は言っている！ 彼女を抱けと！」と叫ぶ新興宗教家達からは聖なる水とか言う物を小さな瓶に詰めて貰い、「はっはっはっはっ！ これをやるう！」「すみませんすみません、ウチの旦那が役立たずですみません」と嘆く金満家夫婦からは旦那さんの黄金の全身像四十口セル（約六十センチ）笑顔バージョンを頂いた。他にも何十人もの人がお昼を過ぎた辺りから今までに訪れて来てくれた。私は、自分が意外に人とのつながりを持っていた事に驚かされた。

それだけの人が訪れ、大なり小なり贈り物を置いていったのだから、居間にはちよつとした贈り物の山が出来ている。

「凄い量ですね……」

「そうじゃなあ」

私はお祖父さんと協力してこの山を取り崩し始めた。大抵の品物は、倉庫に眠っている使いそうで使わないような物だ。タオルや万年筆、コップなど、そんな品々。ただ中には役に立ちそうな物も含まれている。金物屋さんを営むソブルエさんからは上等なナイフを頂き、鞆屋さんのデビジさんからはオリーブ色のメッセンジャーバ

ツグを頂いた。特に、このメッセンジャーバッグはただのバッグじゃない。バッグの内部空間が広げられていて、見た目より遙かに沢山の物を収容する事が出来る。名前は名付けるのが面倒臭かったのかそのまま空間拡張バッグと呼ばれている。

それらの品々を要らない物は倉庫へ、要る物は自室へ分類していく。ただ私は物を大切にしている性分なもので、居間が片付いた代わりに自室が物で埋まってしまった。

「これ、アレシア。ただ移動させただけじゃないか」

お祖父さんに苦笑されたが、貰い物って扱いに困る。無下には扱えないよ。俯く私の肩に手を添え、お祖父さんは優しく語り掛ける。
来る。

「ゆっくり考えていこう、アレシア。時間はたっぷりあるんじゃないかな」

「……はい」

今度は自室にある品々の整頓に私達は手をつけた。

一時間程経過し、片付けが終わる。片付けというか、部屋のスペースに押し込んだだけの気もするが、まあ、終わりは終わりさ。私はお祖父さんの膝上に乗せられながら居間でのんびりとくつろぐ。薄暗い室内を暖炉の火がほのかに照らす。静かな空間にゆらゆらと揺れる明かりは幻想的に見えた。

「ご飯出来たわよー」

隣の食事室からお母さんの声が届く。

「では、行くかの」

「そうですね」

私はお祖父さんと食事室に入る。

「豪勢じゃな」

お祖父さんが感嘆の声を上げたのも無理はない。食卓の上にはトピードゥーの兜焼きがドドンと場所を占め、その周りにトピードゥーの胴体部分を使った料理が所狭しと並べられている。トピードゥーって魔獣に分類されてるけど、信管さえ取り除けば爆発はしない

のでその身は美味しく食べられる。というか、中々捕獲される事のない高級魚だ。

お母さんがニッコリ笑う。

「生だったから、鮮度が命ですもの。今日中に食べてしまいましたよ」

トピードゥーは我が家の糧となった。美味しかった。以上、終わり。

「という事で、おやすみなさい！」

私は食事室から逃げる。

「駄目よ。今日体洗ってないでしょう」

しかし満面の笑みを浮かべたお母さんに後ろから抱き上げられてしまった。

「一緒に入りましょうね！」

嫌だ嫌だ嫌だ。何でこの歳になって母親とシャワー浴びなきゃならないんだ。私は逃げ出したい一心でじたばたじたばた。はーなーせー。

「そ、そんなに……私と入りたくないの？」

う……私があんまりじたばたしたから、お母さんを傷付けてしまったみたい。私の馬鹿。もう家族を心配させちゃ駄目じゃないか。急いで言い繕う。

「そ、そういう意味じゃないんです。何というか、恥ずかしいというか……」

「ふふっ！ なら何の問題もないわねっ！ さ、行きましょう！」

意気揚々と歩くお母さんに抱っこされながら到着したのはお風呂場。といっても浴槽はなく、固定式のシャワーノズルからお湯が流れ出るだけだ。もし浴槽に浸かりたいなら、大浴場に行かねばなるまい。ここまで来たらおしまいだ。覚悟を決めるか……。

「アレシアちよっと待っててね。着替えを持ってくるわ」

そう言ってお母さんは廊下に出て行った。

チャンス！ 先に入ってるなるべく一緒に入る時間を削ってしまお

う。まだまだ若々しいお母さんと狭いお風呂場に一緒にいたら頭がどうかしてしまふ。廊下とお風呂場の間に設けられた脱衣所で急いで服を脱ぎ、水色のタイルで覆われたお風呂場に足を踏み入れる。足元のタイルはひんやり冷たい。空気も冷え冷えとしている、早くお湯で温まろう。給水栓に手を延ばし軽く捻る。するとシャワーノズルから水がほとばしり出た。さ、寒い！ 凍え死んじゃう！ 何でお湯じゃないのっ！？

落ち着け……落ち着くんた。きつとだんだん水が温かくなるに違いない。

体を震わせながら、しばし待つ。全然温まらない。いや、我慢だ。きつともう少しさ。だって昔はお湯が出てたんだ。出ない訳がない。

おかしいな、まだなの？ もう、一分は経過したよ？ 給湯機の調子が悪いのかな？ うー、早くして。風邪引いてしまふ。

あう……駄目だ、もう数分は経ったのに。無理だ、堪えられない。寒いよ。ポンコツ給湯機、早く何とかして。どうかせめて水を温くして下さい。いや、もう温くなくてもいいから。二、三度水温を上げて……駄目、か。

ああもう、こうなりや魔法で破壊の限りを尽くしてしまおうか？ ほーら、魔力がほとばしってるぞー、早くしないと壊されるかもよー？ 私は指向性の高い魔力をシャワーノズルに向け、しばらく睨み合う。……はあ、何かやってて自分に憐憫を覚えた。もう諦めてこの冷水に打たれとこう。気分的にも冷水に打たれたい。目をつむり、ただぼつねんと冷水に打たれ続ける。

「アレシア？ あらこれ、水じゃない！」

その時お母さんの叫び声と共に、暖かい温水が降り注ぐ。

あー、生き返るー。

「もう、何やってたの！ 風邪引いちゃうでしょー！」

いきなりお母さんに叱られる。そうは言うが、仕方ないじゃないか。給湯機が動かなかったんだ。と、つむっていた目を開いてお母さんに抗議すると、一糸纏わぬお母さんの姿が真正面で視界に入る。くっ、目のやりどころに困るじゃないか！ あー、もう。昔も今も見えて恥ずかしいのは何でなんだ。いい加減慣れさせてくれ、心臓に悪い。

「アレシア忘れちゃったの？ お湯を出すには脱衣所のスイッチを押さないといけないのよ」

「え？」

そうだったけ？ あー……確かにそんな記憶があるなあ。道理でいくら待ってもお湯が出ない訳だ。

「すっかり忘れてた……」

「こんな調子じゃ、体の洗い方も覚えてるかも疑問ね……」

私の呟きに、お母さんは嬉しそうな口調でそう言った。

「そうね、私が洗ってあげるわっ」

「あ、大丈夫です。私、一人で出来ます」

ニコニコしながらにじり寄り寄るお母さんに何故か脅威を覚えて後ろに下がるが、大人が五人も立てばぎゅうぎゅうになる程度の広さしかないお風呂場だ。すぐに正面から抱きしめられた。うああ、お母さん三十路なのに肌のハリツヤが良いですね、とても柔らかく気持ちいい……って、私は何を考えてるんだっ！

「ふふふ。まずは髪から洗いましょうね」

ふう、助かった。私の髪は腰の辺りまで伸びてるから、お母さんは私の背後に回ってくれた。今の内に心を落ち着けよう。

植物油から作られた石鹸を泡立て、頭皮をワシヤワシヤされる。

うあー、気持ちいい……。

「アレシア何処か痒いところあるー？」

「ないです」

続いて長く伸びた髪を後ろで何やかんやされ、髪を洗い終えた。

「うふえへへ。じゃあ次はお体キレーにしましょーねー」

それは勘弁してくれ。羞恥で死ぬ。どうにか回避しないと。だらしなく頬を緩めるお母さんに時間稼ぎを試みる。

「あ、あ！ 私もお母さんの髪洗ってあげますよ！」

「あら、本当？」

「はい！」

「じゃ、お願いアレシア」

「任せて下さい」

お母さんは木製の桶っぱい椅子に座ったので、私は自分と同じ白銀の長髪を洗い始める。よし、なるべく時間を稼ぐぞ……くっ、これって意外に力のいる作業だね。魔力で肉体を【身体強化】してやり切ったが、ちょっと魔力に頼り過ぎかもしれないなあ。そうだ、これから私はどう生きて行こう。魔王は自爆しちゃったし、しばらくはのんびり出来るけどいずれは身の振り方を決めないとなあ。就職するか、結婚……結婚、か。性別変わってるんだが、アレに私はいやいやいや。まだ早いつて！ まだ入れるの入れられるの心配する必要はないっ！

「ありがとう、じゃ今度は私が洗うわね！」

「え？」

あ、しまった。もうやり切ってしまった。もう、私の馬鹿！ アレでナニだの考えてたから……うむう、途端に下半身に意識が集中して来た。まじまじと見つめてみるが、何かが変わる訳でもない。そこにはやっぱり、雌雄の内の後者に相当する器官はなかった。

「うふふふ。ああもう！！ さすが私の我が子ね！」

「っ！？」

とかまたくだらない事を考えてたらいきなりお母さんに私の上半身を石鹸で泡立てられた布切れで優しく擦り始められた。

何がさすがなのか分からないが、くすぐりたいよ。体が意思とは無関係に震えようとする。だが今のふやけた笑みを浮かべている興奮したお母さんに気付かれたら、状況が悪化する気がしてならない。私は堪える事にした。しかし懸命に努力して隠そうとしたが、荒く

なった息遣いだけは隠しおおせなかった。僅かな吐息が漏れる。

「……………んっ……………ふぁ」

「…!？」

どうしたんだろう？ お母さんは急に私に背中を向けた。

「ぐ……………うっう、アレシア……………私、これ以上、は……………さ、先に出てるわね……………」

「でもお母さん、まだ体洗ってないじゃないですか」

「ごめんなさいアレシア！ 私にはもう無理なのっ！」

そう言い残してお母さんはお風呂場の引き戸をぴしゃりと閉めて出て行ってしまった。

な、何だったんだ……………？

十一、寝る時間

いきなりお母さんに出て行かれ、私はしばらく呆然としていた。私、何かしてしまっただろうか。ちらりと見たお母さんの表情は、何かを必死に堪えていたように見えた。

まさかとは思いつけど、久しぶりにあった私を我が子として受け入れられなかったのかな。一年以上離れ離れだったんだもの、人の気持ちはなんてどう変化するか……そんな事考えたくない。でも、もしこの考えが正しかったら？ この先待ってるのはぎこちない家族ごっこ？ 嫌だ、考えたくない。心になつとりと沈着する不安をどうにかしたくて、私は温水を頭から浴び続けた。

指がふやけるまでシャワーを浴びた私は、お風呂場から髪をタオルで拭きながら居間に入った。天井に取り付けられた魔力灯が室内を柔らかいオレンジ色の光りで照らしている。ソファではお祖父さんとディーウアが座り、その対面のソファにはお母さんが座っておしゃべりをしているようだ。私を視界の真正面に捉えたお祖父さんは声を掛けて来る。

「さっぱりしたかねアレシア」

「そうですね、さっぱりしました」

体はね。頭の中ではどうしてお母さんが慌てて出て行ったのかで一杯だよ。

「ディーウアさん、あなたも体を洗い流されてはどうかかな？」

ディーウアに体を洗うよう奨めるお祖父さん。ディーウアって、

汗かいたりするの？ デイーウアは入る必要あるのだろうかと思うのだが。

「良いので御座いますか？」

「勿論ですとも。マリーさん、デイーウアさんに衣服を貸してやってくれないかね」

「分かりました。デイーウアちゃん、着いていらつしやい」

「真にありがとうございます。私、感謝のしつぱなしで御座います」
嬉しそくに微笑むデイーウアを連れて私の横を通り過ぎるお母さん。軽く私の頭を撫でてから廊下に出て行った。触れた手から大きな愛情を感じ、私は戸惑う。さつき何でお風呂場から急に飛び出したんだ？ どちらが勘違いなの？ それとも、お風呂場での一件には別の、より妥当な解釈があるのかもしれない。

「アレシア、そんな所に立ってないで座りなさい」

「はい」

私が立ちつぱなしなのに気付いたお祖父さんに促され、その隣に腰掛ける。

「何かあったのかね？ 元気がないようじゃな」

「うわ、お祖父さん鋭い。何故分かるんだ？」

「いや、私は別に……」

ただ、正直にこの不安を打ち明けたらダイレクトにもうお前は他人にしか見えないとか言われるのは勘弁願いたい。という訳で、打ち明けない。臭い物には蓋をしとこう。後でじっくりお母さんを観測して、真実を明らかにしてやる。

「隠さなくていい。愛する孫にそんな顔をされては僕も辛いんじゃないよ。話してごらん」

そんな顔？ 私は表情を隠していた積もりだったんだけど、お祖父さんにはまるわかりのようだ。なら、少し位しゃべっても大丈夫かな？

「……たいした事じゃないんですけど、お母さんが突然お風呂から出て行ったのでどうしたのかなーって」

お母さんが私を嫌う可能性は、朝からの反応を見た限りではほぼありえないと思う。でも人間の心中を計る事は出来ないのだ。万が一を恐れた私は回りくどい言い方で自分が傷付かないようにしておいた。

「ああ、お母さんもアレシアに再会して興奮したんじゃないかなあ。のぼせて立ちくらみを起こしたと言ってたよ」

「へ？」

何だ、そんな事だったのか。良かった……。

「どうかしたかいアレシア？」

「あ、いや、お母さんは大丈夫だったんですか？」

「うん、ちよつと休んだら良くなったよ」

「そうですか」

不安が解消され、安堵で口元に笑みが自然に浮かんでしまう。

「あら、私がどうかした？」

そこに、ディーウアの面倒を見たお母さんが戻って来た。

「マリーさんの体調をアレシアが心配してるんじゃないよ」

「心配かけてごめんなさいアレシア、ちよつとはしゃぎ過ぎちゃったわ」

そう言ってお母さんは私をソファから抱き上げた。

「無事なら、いいんです」

先程まで色々とバッドエンドばかり想像していたせいか、抱き上げられた私は反射的に自分からお母さんに抱き着いていた。

「アレシア。大好きよっ！」

それに嬉々として抱き着き返して来るお母さん。ただ耳元でそんな事言わなくても……体が熱くなるのが分かる。顔見られたら多分赤くなってるんだろうな。

でも、悪くないと思ってしまう私はマザコンなのだろうか。

しばらくするとディーウアも帰って来て、話に花が咲いていく。

それぞれが思い思いに語り合い、聞き合って、あっという間に時間は流れていった。

すっかり夜も遅くなり、小さな私の肉体があくびを出して眠いと訴え出す。すると誰が言うともなしに寝る事になった。全員で二階に上がる。階段を上ってすぐ左に曲がり最初に見える扉がお母さんとお父さんの寝室だ。

「おやすみ、マリーさん」

「おやすみなさいませ、お母様」

「おやすみなさい、お母さん」

私達はお母さんにおやすみの挨拶をして歩みを進め……ようとしたら、私だけお母さんに引き入れられた。

「アレシア。今日は一緒に寝ましょうねー」

寝室は窓から差し込む月明かりで、薄明るい。私はお母さんに抱き着かれながらベッドに横になる。

ふああ、眠い眠い。目をつむると、途端に意識が眠りの世界に引き込まれていく。

ん。私の額に誰かが触れている。お母さんだな。

「アレシアあ、もう寝ちゃったの？」

お母さんの不満げな声が耳に届く。寝ちや駄目なのだろうか。

「かくにーん」

私が返事をしようとしたその時、お母さんは私の脇腹をくすぐり始めた。うああ、体がもによもによる。私は目を開き、眼差しに抗議の意を込めてお母さんを見つめた。

「何するん、ですか？」

「なーんだ、起きてるじゃない」

悪戯つ子な目になったお母さん。さらに技巧を凝らして、くすぐりを続けていく。

「あははははっ、や、やめ、はははっ、えへへ、えへへへっ！」

ちよ、息出来ない。息出来ないって！

「あーもう、可愛いわね！」

「えへへへ！ によほほほ！ にはははははーっ！」

ほ、本当に辛いんだけど……。

「ああんもつと！ もつと笑顔を見せてえ！」

「ふへえ……」

うあ……も、無理。急に体から力が抜けてしまった。ははは、どうやら呼吸困難で倒れてしまったようだ。

「あ、アレシアっ。だ、大丈夫？」

息を整え、心配させてしまったお母さんに何とか返事をする。

「大丈夫、大丈夫です。ただ、も、やめて下さい」

「ごめんね、アレシア」

腕を自由に動かしてくすぐれるよう、私から体を離していたがまた抱きしめて来た。

「大丈夫ですから。安心して下さい」

それにしても、ちょっと私の体弱すぎないだろうか。くすぐられただけで、体から力が抜けてしまうなんて。

「もう、寝ましようか」

これで悪戯にも懲りたのだろう。お母さんは目をつむった。

「そうですね」

だが、私を抱き枕みたいにギューとしないで欲しいな。寝苦しいんだけど。

著休め一品目：ジェイソンのその後

ロミリア共和国の首都、ロミリアには七つの緩やかな丘があり、七つの丘毎に建てられる建築物の大まかな傾向があった。丘の内の一つ、パラティアの丘には政府が保有する建築物が多く、ジェイソンが勤めている軍務省もまたパラティアの丘に建てられている。

そのパラティアの丘の道を一台の馬車が走っていた。脊が高く足の細い二頭の馬に引かれる馬車は鉄製の車体を黒く塗られ、前後左右に開けられた窓枠にはガラスが嵌められ中から赤いカーテンが引かれている。クリーム色の石畳みの道は四頭立ての馬車が余裕を持ってすれ違えるだけの広さがあり、左右の端には歩道もある。そして、道の左右には見上げんばかりの高さの鉄柵が延々と続いており、通る者にどうにも閉塞感を与えているようだった。

緩い坂道をしばらく馬車が走ると、軍務省の文字が青銅に描かれた立派な標札が張り付けられている門が見えて来た。

御者が門の前で馬車を止めると、革鎧に身を包んだ兵士二人が門の隣にある煉瓦造りの小さな小屋から出て来て馬車の側面に近付き、扉を叩く。ジェイソンはそれに応じて馬車の扉を開いた。そのジェイソンを小屋に開けられた小さな穴から、ひそかに弓兵が狙う。誤射を避ける為、弦に矢はつがえないが万が一の事を考えての措置だ。

「登庁許可証をお見せ下さい」

兵士は高官であるジェイソンに一瞬気圧されたが、直ぐさま気を取り直し任務を果たそうとする。

ジェイソンは魔法陣の描かれた五センチ四方の紙を取り出し、兵士に渡す。反対側ではスタンドウハルも別の兵士に同じ紙を渡している。二人の兵士は小走りに小屋へ戻っていった。

小屋の内部は六人が一度に着席出来るテーブルと六脚の椅子があるだけの質素なもので、椅子に二人の男が座り、弓兵は小さく穿たれた穴からジェイソン達を監視している。二つある窓には共に鉄製のシャッターが内側から下ろされ、弓兵の為に開けられたいくつかの穴から差し込む僅かな陽光だけがこの部屋の光源だ。

「お願いします」

兵士二人は紙をロープを羽織った魔法師の前に置く。魔法師は紙を一瞥すると、うなづいた。

魔法師によって本物だと判断された紙を携え、兵士達はジェイソンとスタンドウハルの元へと戻り紙を返却した。

こうしてようやく門は開かれ、軍務省の玄関前に馬車は止まる事となった。

軍務省は白い漆喰^{しっくい}で表面を塗り固められた煉瓦造り六階建ての、立方体の形をした建造物である。玄関前の入口の左右には兵士が一つずつ直立不動で立っていて、馬車から下りるジェイソンとスタンドウハルに敬礼をした。

軍務省内部に入ったジェイソンとスタンドウハルの目にまず入るのが、大階段だ。大理石で製作され、十人の大人が手を繋いでも大丈夫な程横幅の広い大階段は、一階から二階ではなく三階に繋がっている。これは軍務省に賊が侵入した場合、簡単に地理を把握させない為の構造……との建前だが、設計ミスというのがもっぱらの噂だ。ともかく、そのテロ対策とやらのせいで軍務省は初めて訪れる人間には迷路のように感じるかもしれない。

ジェイソンはその大階段の横の通路を通り抜け、複雑な通路を何分もかけて歩いた後、ようやく自らの仕事場所に到着する。参謀次

長の立場であるジェイソンは現在兵站面での最高責任者だ。中々上等な部屋が割り当てられている。それはエレベーターのない時代、下の階の方が家賃が高かった事と照らし合わせても明らかだ。観音開きの扉を開け、スタンドウハルと共に三十畳はある参謀次長室に入る。室内には入ってすぐの所に来客用のソファと脚の低いテーブルがあり、それらを通り過ぎるとジェイソンの為に用意された机が部屋の中央付近に設置され、さらに奥に向かうと秘書のスタンドウハルの机が窓と向き合うように置かれていて、スタンドウハルの机は左右に書類や書籍の詰まった棚に挟まれている。さらに入り口側から見てジェイソンの机のすぐ左手には木製の扉があり、隣室で業務に邁進している部下達の仕事部屋に繋がっており、右手にある扉を開ければ仮眠室まで用意されている。

最後に、ジェイソンとスタンドウハルの机やその周辺には、今まで外出していたツケとして大量の書類が散乱していた。机の上には三十センチの厚みはある書類山が築かれ、床には深さ五センチの書類海が床を覆い隠している。

スタンドウハルはその惨状を見るなり、あぁと叫んで書類の海に飛び込み、整理をし出す。ジェイソンも内心苦々しく思いながらスタンドウハルの手伝いに入った。

日が地平線の下へ沈み、空がすっかり暗くなった頃。ジェイソンが天井に吊された魔力灯の明かりを頼りに書類仕事に邁進していると扉を誰かがノックする。

「入れ」

ジェイソンが許可した事で、金髪を七三に撫でつけた切れ目の黒い軍服を着た男が闊歩して入って来た。

「ジェイソン殿、少しよろしいかな？」

男は口元に冷笑を浮かべ、ジェイソンを見る目には軽蔑の色を漂

わせている。

「情報部部长……何用です？」

ジェイソンは表情をいかほど変えなかったが、隣に立っていたスタンドウハルは耳をほのかに赤くして顔を俯かせた。

「今朝方自宅に翔けるようにして戻っていったと聞き及んだのでね。業務に支障をきたさせてまで何故そのような軽挙妄動をしたのか伺いたい」

男の声には優越感が漂っており、聞く者を一様に不快感を覚えさせる何かがあった。

「私用だ」

「私用？ 私用如きで職務を疎かにしたと？ いやはや、第三階級出身であるだけの事はありませんな」

男は舌なめずりをするようにジェイソンに侮辱を浴びせ掛ける。

「さつ、参謀次長殿はっ！ ご息女の安否を確認されていたのでありますっ！」

スタンドウハルは男の態度に我慢ならなくなり、やむを得ない事情があったとジェイソンを庇う。

「……何？ 彼女は死亡したはず……」

スタンドウハルの言葉に男は切れ目を僅かに見開き、口調を乱す。「生きていました。現在自宅にあります」

男の狼狽を見て内心にんまりしながら、スタンドウハルはきつぱり言い切った。

「と……とにかく、例えご息女が今に死亡しようがどうでもいい。参謀次長ならば公私を弁えて貰いたいですな」

「ジェレイコス殿！ それはあんまりです！」

男はスタンドウハルの声を無視し、足早に去っていった。

「何なんでしょうかあの態度。第一階級出身なんて肩書は今時たいした価値ないのに！」

「スタンドウハル。気にしても仕方がない。仕事を続けるんだ」

怒りの収まらないスタンドウハルはジェイソンに向けて愚痴をこ

ぼすが、簡単にスルーされてしまった。罵られた当の本人にそつぽを向かれては、スタンドウハルもこの件に関しては黙るしかない。だが、話題をアレシアに切り替えて会話を続けようとする。延々と続く書類仕事から逃避したいのだ。

「はい……あ、そういえばご息女は大統領のご息女と親しかったのでは？」

ジェレイコスの来訪に眉一つ動かさなかったジェイソンが、万年筆を持つ右手が一瞬止めた。

「それがどうした？」

「報告した方が宜しいのではないのでしょうか？ ご息女も喜ばれると思いますよ」

「……そうだな、後で私から伝えておこう。さ、仕事を続けるぞ」

「はい……」

二人はまた退屈な書類仕事に戻っていった。

著休め二品目：ジェレイコスその後

ジェイソンの部屋を出たジェレイコスは軍務省地下にある自らの仕事部屋に向かう。本来軍務省に限らず政府機関の勤務時間は朝日が昇ると共に始まり、日の暮れと共に終わるのだが、ペロポネアと戦端を開いたあの日からロミアア軍が戦時体制を解いた事はなく、多忙な日々が続いている。大規模対人戦はペロポネアとの停戦により幕を閉じたが、停戦後は狂暴化した魔獣の対処に追われ、軍属に休む暇はない。未だ各国の調査機関は何故魔獣が狂暴化した原因すら特定出来ていないのだ。何かに反応した事は明らかなのだが……。

日は当に暮れ、光源は足元に設置された僅かばかりの赤色に光を発する魔力灯のみにも関わらず、ジェレイコスは複雑に入り組んだ通路を躊躇^{ためら}う事なく突き進んで行く。

やがて彼は行き止まりで立ち止り、口を開いた。

「五、四、二、八」

彼が述べた数字の羅列に反応し、ジェレイコスの目の前の壁が横にスライドして奥へと繋がる通路が現れる。壁の向こう側の通路の天井に等間隔に吊るされた照明の白い光が暗がり慣れたジェレイコスの網膜を焼く。ジェレイコスは目を幾度か瞬^瞬かせ、目を光に慣れさせるとまたしても何本にも分かれているへ再度歩みを進めた。装飾品など全くなく無機質極まりない白で統一された迷路のような通路を数分も歩くと、ジェレイコスは行き止まりに突き当たった。しかし先ほどとは異なり、左側に鉄格子で囲まれた窓がある。

「許可証をお見せ下さい」

その鉄格子の向こう側から若い男の声が聞こえ、ジェレイコスは声に従い懐から取り出したクレジットカードのような物を鉄格子の

向こう側にいる男に手渡す。男はカードをリーダー（読み取り機）にかざす。

「ありがとうございます。ジエレイコス部長」

男はカードをジエレイコスに返却した。カードが認証された事によって情報部室への道道を阻む壁が横にスライドして下へと向かう階段が出現した。この階段を下りればようやく情報部室に到着だ。

情報部室は地下に存在するというのに人員五十人以上が同時に作業可能な大きな部屋を与えられている。しかし情報を収集するのには泥臭い手間が必要なため、部屋に留まっている者はそう多くはない。

部屋に快適性が全く考慮されていないのも人気のない一因かもしれない。木板にただ脚を取り付けたに過ぎない安い造りの机が無規則にあちこちに四、五脚毎に固まって配置され、壁際には書物や書類をギュウギュウに押し込まれた背の高い本棚がこれまた雑に並んでいるだけなのである。照明と壁は閉鎖感を薄めようと白色が多用されているが、逆に寒々とした印象を与えてしまっていた。その部屋の中で作業をこなしている者の一人、金髪を短く刈り上げた平均的な日本人男性より若干身長の高めの目が青い中年男性がジエレイコスを険しい表情で見つめていた。

「エリソン、どうかしましたか？」

エリソンの机に広げられている書類や走り書きに目を通していた同僚が視線に気が付き声を掛ける。

「大した事じゃない。ジエレイコスのジエイソンへの粘着に呆れていただけさ」

「そうですか。それよりエリソン、ここを見てくれませんか？」

同僚の指差した箇所を目を移すエリソン。

「何だ？」

「エリソン、あなたはまさか部長を疑っているんですか？」

思わず顔を同僚へ向けるエリソン。

「ジャレド。何を言うんだ突然」

「あなたが俺に調べるように言ってきた情報に俺の個人的捜査結果

を加えて言ってるんです。あなたは間違いなく部長が怪しいと思っ
ている」

ジャレドは自信満々にこう言い放ったが、エリソンに動揺の色は
見られない。むしろジャレドに呆れたような表情を向ける。

「……そんな訳ないだろう。まだお前にこの仕事は早かったようだ
な」

「誤魔化さないで下さいエリソン。俺はあなたの力になりたいんで
す」

「ジャレド。いい加減にするんだ」

「エリソン。俺はいつまでもあんたに手取り足取り支えて貰わない
とならないような新人じゃない。あなたが協力しなくとも俺は独自
に動きますよ」

「ふざけるんじゃない！手を引くんだジャレド！」

部屋の出口に向かうジャレドを追おうとしたエリソンだったが、
声を張り上げた事でジェレイコスの目についてしまった。

「エリソン、どうかしたかね？」

「いえ」

「あまり叫ばないでもらいたいね。耳障りだよ」

「申し訳ありません」

露骨に眉をしかめてみせたジェレイコスは、エリソンの謝罪を聞
くとそのまま隣接する部長室へ歩みを進めていった。

「ちっ。あの馬鹿……」

その際にジャレドの姿をエリソンは見失ってしまった。

十二、起床

「アレシア、私もアレシアの事好きよ。好きというか大好きとかああもう言葉には表せないっ！でもね、私は朝ご飯作らなきゃいけないの。だから早く起きなきゃいけないの。だけどアレシアが私ともっと一緒に寝たいなら……」

私を抱き枕として利用し、耳元でぶつぶつと呟くお母さんの声で私は起こされた。まだ部屋全体が暗い青色に染められている中、耳元でそういう事されたので私の心は一瞬ドキッとさせられたよ。

「お母さん？」

お母さんの発言の内容は、私を利用してサボタージュしようとしてるという事でいいのだろうか。あなたは何をしているの？というか、もしかして昨日の夜から抱き着いたままかい。

「あ、アレシア。起こしちゃった？」

お母さんは体をもぞもぞとベッドの上で動かし、私と顔を合わせる。申し訳なさそうな口調で言うけど、いつまでも耳元で語りかけられてたら普通起きちゃうだろうさ。私は首を縦に振る。

「おはようございます、お母さん」

「おはよう、アレシア」

お母さんは少しの間私に微笑みかけた後、私に頬擦りをしながら体をベッドから起こした。私とお母さんからシーツがずり落ちるが、お母さんの温もりが私を暖めてくれる。

「まだ眠いなら、寝てもいいのよ」

ベッドから下りたお母さんは私を抱っこしたまま魅力的な提案をしてくる。だが、私にはやる事があるのだ。

「いや、起きます」

「そう？　じゃあ一緒に起きましょうか」

「はい」

私をベッドに下ろしたお母さんは衣類棚に近付き、戸を横に引いた。中には数十着の衣服が掛かっている。着替えるのだろうか。ただ、何か、お母さんの服にしては小さい気がする。さらにはやたらとフリルが付いていたり、鮮やかな原色が使われてたり、早い話が私の好みではない服が多い。極め付けは意味ありげなお母さんの笑みだ。ウフフフフ……と怪しい笑い声を上げてたり。うん、すっごく嫌な予感がする。さっさとこの場から逃げよう。

サンダルを履いてベッドから下りた私は忍び足で部屋の出口に歩いて行く。そして

「私、皆を起こして来ますね！」

と言い残して部屋を抜け出した。

背後から聞こえるお母さんの嘆き声を泣く泣く無視して小走りに廊下を進み、ディーウアの眠っているであろう客室に入る。案の定、ベッドではディーウアが行儀良く仰向けに眠っていた。

私はディーウアの枕元に近付き、シーツを剥ぎ取って肩を揺すり始める。

「起きて下さいディーウア」

「……御主人様？」

お、存外早いお目覚めだね。目をパチリと開き、私を見つめるディーウアに相談を持ち掛ける。

「そうです、私です。お願いしたい事があるんです」

「何でしょうか？」

ディーウアは肌寒い気温をものともせず、はだけたシーツから抜け出しベッドに腰掛ける。生地の薄いナイトガウンを着ている為、目線がもろに胸元に来てしまった私は少し動揺してしまった。ここまで精密にしなくてもいいだろうに。

「サイトの事なんです」

おかげで考えていた前置きは吹っ飛んで、いきなり本題を口に出

していた。

まあ、それはいい。本題はサイトの事なのだから。昨日は家族と幸せ一杯に過ごしていたので考えが及ばなかったが、そろそろあいつを捜さないと可哀相だ。私と同じく精神に何かをされたサイト。私の場合は多大な魔力が何かの動きを阻んでいた為大事には至らなかったが、サイトは……彼を最後に見た時、とても苦しそうだった。「サイトを最後に見たのは確かディーウアだったはず。何か、覚えていないか？」

「申し訳御座いません。私はあの時背後から急襲されたので、リーダーにすらデータは残っていないので御座います」

そりゃディーウアも万能じゃないんだろうけどさ。何かないのか。少しでも手掛かりがあると助かるんだが。

「戦闘機のリーダーは背後から来る敵を探知出来ないのか？」

「はい、その通りで御座います」

「そつか。なら仕方ないな」

となると手掛かりは、魔族の国に乗り込むでもしないと手に入らないな。他にも何も告げずに別れたイエラウ様やプルチエさん達ともどうにかして連絡を取りたいし、サハリアお……お姉ちゃんやフアルサリアさんの安否も知りたい。サハリアお姉ちゃん達はロミリア共和国内部の人間だから後でお父さんに頼めば教えてくれるとして、エルフであるイエラウ様達とは独自に連絡手段を考えなくては。「御主人。御主人は私を超深部攻撃機として【物質創造】して下さいましたね」

「そうだけど？」

「お忘れで御座いますか？ 私に戦闘支援としての【物質創造】の一環として、人工衛星創造能力を付加されたでは御座いませんか」

私の思考を遮ってディーウアが何やら興味深い話をして来た。

「何？」

ただ、それは事実なの？ 全然記憶にない。

「本当か？」

私の懐疑的な視線にムツとするディーウア。

「勿論で御座います！」

きっぱりと言いつ放つ。ふーん、そこまで言うなら信じようじゃないか。

「でも、人工衛星と言ったって色々ある。具体的には何が出来る？」

「GPS衛星、通信衛星、画像偵察衛星、電子情報収集衛星、早期警戒衛星、地球観測衛星の中から三百機程度なら自在に配備可能で御座います」

「おお、すごい」

通信衛星があれば一度あつちに行つてイエラウ様に機材を渡せば会話が可能だし、地球観測衛星があれば地図が作れる。そしてもし三百機の配備が可能なら、もしこの星が地球と同規模なら、GPSは誤差数センチ以内には収まる精度で位置特定が可能になり、通信は世界中何処でも可能になり、画像偵察は数分に一回は新しい情報が手に入り、電子情報は………いらないか、早期警戒………弾道ミサイルがこの世界にあるなら必要だな。うわあ、夢の広がる話じゃないか。後々搜索に入るとしても、有力なデバイスになりそうだね。ただ、搜索に出たらお母さん悲しむだろうな、時期は慎重に見極めないと私には【物質創造】の力があるんだから、家にいながらもそれなりの事は出来るし。

「ディーウア、そういう事なら人工衛星設置して貰えないか」

「御主人様の為ならば喜んでやらせて頂きましょう」

やる気に満ちたディーウアの目はキラキラと輝いている。頼りがないあるね。

「設置にどれだけの期間が必要かな」

「一週間頂ければ、アメリカ合衆国にも劣らない衛星網をお見せ出来るかと思われませう」

アメリカ合衆国？ ああ、米国ね。うーん、地球の知識が若干薄れてる。一度紙に書き出した方がいいかもしれない。

「ではディーウア。頼む」

「お任せ下さいませ、御主人様。ただ私には人工衛星を管制する能力は御座いませので、そこは御主人様、お願い致します」

管制能力か……L級司令船を【物質創造】すれば、出来るな。

「んー、まあ、うん。分かった」

私は了承しておいた。

十三、朝のパン又屋さん

いろんな意味で聞かれるとまずい話を終えた私は、ディーウアのいる客室を出てお祖父さんの寝室に足を踏み入れてみる。

お祖父さんの寝室は昨夜お母さんと寝た部屋の一つ部屋を隔てた所にあり、ディーウアのいた客室からは出てすぐ右と近い。軽くノックをしてから室内に入ったが、既にベッドはもぬけの殻だ。昔からお祖父さんは早起きだったからね、多分一階の居間にいるのだろう。

私がお祖父さんの部屋から廊下へ出ると、ベランダに通じる彩色ガラス戸越しに朝日が照らして来るのが見えた。ようやく太陽が昇って来たみたい。彩色ガラスを通った陽光は橙、緑、赤色の光線となって廊下に降り注ぐ。その光に魅せられた私の足は、自然とベランダへと向かっていた。

彩色ガラス戸の施錠具である木製つまみを引いて、ガラス戸の前に押し出す。冷たい風がそよぐ中、ベランダに降り立った私に巨大な都市、首都ロミリアの姿が目の前一杯に広がる。

我が家のあるチェリアの丘からはパラティアの丘がよく見え、パラティアの丘には白い建物が太陽光を反射しながら林立している。あの何処かにお父さんがいるのか……昨日出掛けてからまだ帰って来ていないようだけど、体は大丈夫なのかな。

丘と丘の間には様々な市場や低所得者向けのインストラと呼ばれるアパートメントが雑多に場所を占めている。既に人々は活動を始めているんだね。指先でつまめそうな人が道という道をわらわらと動いてるよ。

私、帰った来た。ロミリアに帰って来たんだなあ。

私はしばらく都市を眺めていたが、薄っぺらいワンピース一枚で長くいるにはまだ外はちよつと冷たかった。冷えた体がフルフルと震え出す。家の中に戻り、暖炉のある居間に行く事にしよう。

居間に入るとお祖父さんが暖かそうなゆったりとした茶色いガウンを纏って、窓際に置かれたロッキングチェアに座りポカポカと日差しを浴びていた。

「おはようございます、お祖父さん」

私が挨拶をすると、お祖父さんは笑顔を浮かべながら首を私の立っている左側に向ける。

「おはよう、アレシア。体調は変わりないかね？」

「見ての通り、健康そのものですよ」

「そうかい、それは良かった。ああ、ちよつと来なさい」

そう言つと、お祖父さんは自分の膝をぽんぽんと叩く。乗れという事かな。ただ先客がいるけどいいのかな。私がそこに乗ると新聞がくしゃくしゃになつちゃうよ。ん？ 広がる……魔獣被害だつて？

お祖父さんの膝上に乗せられている新聞から覗き見える、樂觀視出来そうもない記事のタイトル。何々、“およそ一年前から活発化した魔獣の行動は依然として続き、特にゲルマフウリオ州では山間部の住民に多数の死傷者を出している。政府としても軍団やギルドに討伐させてはいるが、焼け石に水であるのが現状だ。というのも魔獣被害の増加した一年前から突如出現したフルーキシと呼ばれる魔獣の”、あ。

「アレシアは心配しなくともいい。ジェイソンが退治してくれとる」私の怪訝な視線に気付いたお祖父さんは立ち上がって私の頭を優しく撫で、その足で新聞片手に居間から出て行ってしまった。子供には知られたくない話題だったのかな。うーん、先が気になる。

ま、いいや。とりあえず顔でも洗ってさっぱりするか。新聞は後でこっそり読んじゃおう。

居間から廊下に出て、少し左に歩くとお風呂場の隣に洗面所があ

る。そこで顔を洗い塩を使った歯磨きを済ませた私は、唐突に昔私
が家にいた頃の習慣を思い出した。そうだ、パンヌを取りに行こう。
我が家では、というより大体の家庭ではパンヌを自宅では焼かず、
ロミリアにはあちこちにあるパンヌ屋さんから毎朝買っている。数
多あるパンヌ屋さんの中の内モファラスさんの経営するパンヌ屋さ
んと我が家は昔から親しくしており、三食分のパンヌを毎日焼いて
貰っているのだ。以前の私は、今のように顔を洗ったらそのまま家
の裏まで歩いてパンヌを受け取りに行っていた。小さな親孝行にも
なるし、モファラスさんにも久しぶりに会ってみたい。さて、食事
室から籠を取ってから行こうと。

私は食事室に入ると、昨夜と同じく食卓中央に籠が置いてある。
近付いて行って手を伸ばしたが、あと数センチといった所で届かな
い。ならばと椅子を踏み台にして、再度チャレンジ。今度は余裕を
持つて掴む事が出来た。準備万端、いざ、モファラスさんの元へ。

籠の左右に取り付けられた取っ手を持ち、食事室から廊下に出て
裏庭へと歩みを進める。裏庭に繋がる扉を開くと、石畳の敷き詰め
られたちよつとした空間が目に入った。そしてこの空間と道とを分
けている、大人の腰辺りの高さしかない木の柵を通り過ぎるとパン
ヌ屋さんはすぐ目の前だ。

以前と変わらぬ、懐かしい煉瓦造り平屋建ての店は、ニヨキリと
生やしている二本の角みたいな細長い煙突からもくもくと白い煙を
上げている。店の前に立っているだけで漂ってくる、焼きたてのパ
ンヌ特有の美味しそうな匂いも昔のまんま。だけどモファラスさん
はどうだろうか、ディーウアは元気だと言っではいたけれど。

「アレシアちゃん！ おはよう」

モファラスさんに会うのが久しぶりなもんで店に入るのを躊躇っ
ていると、私のように籠を持ったアーザス君がやって来た。爽やか
な朝に相応しい爽やかな笑顔。

「アーザス君、おはようございます。アーザス君もパンヌを取りに
？」

「そうなんだ。それより嬉しいな、こうしてアレシアちゃんと一緒に歩けるなんて」

そんな事で喜べるならいくらでも歩こうかい？

「私も嬉しいです。さ、入りましょう」

二人で入れれば気が楽だ。

「!？ …… そそそそそーダネ」

開店中と書かれた板が立て掛けられているのを見て、私は何だか様子のおかしいアーザス君と共にモファラスさんのパン又屋さんに入店した。鈴をカランカランと鳴らしながら私が扉を開けると、すぐ右手にはお会計台があり、そこには淡い黄色のエプロンに同色の三角巾を頭に巻いた長身の女性が口を半開きにして立っていた。私とアーザス君を見ているようにも思える。彼女は何者だろう？ やや時間を隔てて、彼女は首を軽く振って再度私達を見つめ直してから声を掛けてきた。

「いらつしゃいませ……お使い？」

ぼそぼそと聞き取りずらい声で話す人だ。接客に向いていない気がする。

「はい。バルカ家の名で契約してるんですけど」

おかしいな。モファラスさんのむつとりとした顔に出迎えられるかと思ったら、陰気な女性がコの字形のお会計台の中に立っている。どうなっているのだろう。

「……」

そして何故だか知らないがお会計台から出て来て、無言のまま私のすぐ目の前まで近寄り、頭を撫でてくる。……まだ撫でられる。まだまだ撫でられる。まだまだ撫でられる。まだまだ撫でられる。長いね。というか、私はどうリアクションすればいいの？ まあ、気持ち良いし、もう少し位いいかな。

「……何しとるんだ」

そんな事やってたらモファラスさんが焼きたてのパンヌの乗っている鉄板を持って現れた。私の頭を撫でていた女性はモファラスさ

んが現れた途端両手をワタワタさせてお会計台の中に駆け足で戻っていった。

十四、仕組まれた再会

私の頭を撫でていた女性を睨み付けてお会計台に引っ込ませたモファラスさんは、私には目もくれずに焼き上がったばかりのパンヌを陳列棚に並べ出す。

私の事、覚えていないのだろうか？　ん、まあ、私は所詮何十人もいるお客さんの中の一人に過ぎないのだからね。いくら以前優しくして貰っていたとしても、忘れるのも無理はないのだけれど。はあ、さっさとお使いを済ませよう。

「久しいな、お嬢」

と、私の頭脳が諦めムードに入った時、唐突に背中を向けたままの彼から声を掛けられた。

「覚えててくれたんですか……？」

じわじわと溢れ出る喜びを味わいつつ、そつと確認してみる。

私の言葉に反応してかモファラスさんはくるりと振り返ると、

「あたりめえだ、客の顔は全員ここに入ってる」

人差し指で頭をこつこつとやりながら、仏頂面のまま私に言い切ったのだった。

そして私のすぐ目の前にまで近寄り、持っている籠を取り上げる。

「どれ、ローリー又家の坊主も渡しな」

「ありがとう、モファラスさん」

「ふん」

籠を両手に持ったモファラスさんは、店の奥に消えていった。それを見たアーザス君がクスクスと笑い出す。どうしたんだろう。

「はは、モファラスさんアレシアちゃんに会って照れてるや」

「へえ……」

モファラスさん、照れてたのか。どんな顔するか見たかったな。

あの仏頂面を赤くするのだろうか。

「アレシアちゃん」

モファラスさんの恥じらう顔を想像していると、アーザス君が私の名前を呼ぶ。その声音が若干硬い事に違和感を覚えながらも、私はアーザス君に向かって振り返った。

「はい？」

彼は真剣な表情をしている。どうしたと言うのだろうか。

「アレシアちゃんは今まで何をしてたの？ どうして今まで戻って来なかったの？」

う……嫌なトコ突いて来るな。

「昨日はさ、アレシアちゃんに会えたのが嬉しくて聞けなかったんだけど……寝る前に気になっちゃってね。よかったら話してくれないかな？」

遠慮がちに話してはいるが、アーザス君は私に力強い視線を向けている。まあ、それでもアーザス君をごまかす事なんか何でもない位簡単な事だ。しかし、アーザス君経由で話が何処まで拡散するか分かったもんじゃないし……よし、細かい話は記憶喪失で曖昧にしつつ、どうにか納得させてしまおう。

私の演技力を見せてやる！

「アーザス君は私が事件に巻き込まれた事は知ってますか？」

ここは洪々と話を切り出すんだ。後々それが生きてくる。あ、ちよつと俯くのもいいかも。

「知ってる。ペロポネア帝国が大統領の子供を拉致しようとして、アレシアちゃんも一緒に掠われちゃったんだよね」

ここ！ ここから悲しい顔をする！

「その時の事……あんまり、覚えていないんです。ただ、何か、とっても怖い思いをしたのは覚えてるんですけど……」

声を震わしてみたが、変な感じにならなかっただろうか。

「ご、ごめん！ ボクのがままで嫌な事思い出させちゃったね」

上手くいった！ アーザス君は真に受けた！

「構いませんよ。誰でも今までいなくなつてた人がいきなり現れたら、何をしてたか気になるでしょうから」

「なら、続きを聞いてもいい？」

アーザス君の知りたがり屋さんめ！ ええい、だがここまで来たらやり切るまで！

「いいですよ。それですね、事件にあつてから私はディーウアさんに助けられたんです。ほら、昨日会つた人。覚えてますか？」

「うん、茶髪の女の人でしょ？」

「はい。で、昨日無事送り届けて貰つた訳です」

「へえ……あれ、でもそうなるとうして帰つて来るのに時間がかつたの？ 事件のあつたアンコナーは歩いてもさすがに二年はかからないよ」

「実は事件に巻き添えになつたせい、記憶を一部失つちやつたんです。だから……」

何か演技でも、悲しくなつてきちゃつた。実際、記憶喪失さえなければもっと早く帰れたんだもんね。悔しいなあ、時間を無為に過ごした気分になる。

「……そうか。大変だつたんだね」

「そうですね……」

場がしんみりした雰囲気になつてしまった。それに合わせて私自身の心境も、しんみりして来る。

「でもさ、帰つて来れたからよかつたじゃん！ そうだ！ 今日一緒に遊ぼうよ！」

突然元氣よく大きな声を上げるアーザス君。多分、場を盛り上げようとしているんだろう。

その氣遣いに思わずクスリと笑つてしまう。転生して二十年以上生きてる私が、こんな小さな少年に氣遣かれちゃつてるなんてね。しっかりしろ、私。

「いいですね。じゃ、学校終わつたら私からアーザス君の家に行き

ますよ」

「い……いいよ、アレシアちゃんは待ってて。ボクの方から行くから」

「なら、待ちます。楽しみにしてますよ」

私に返事をしようとしたのか、アーザス君が口を開いた時、入口からカランカランと鈴の音が勢いよく鳴り出す。そのせいでお会計台に立っている女性の「いらっしやいませ」の音がほとんど聞こえない。

「よお、お前らも来てたのか」

入って来たのは髪の毛をつんつんと跳ねさせ、目を半開きにしたラインラ君だ。まだ眠いんだろうね、歩みがのろのろとしている。

「ラインラ君、おはようございます」

「ああ」

「珍しいね、君がお使いなんて」

アーザス君が露骨に眉をしかめてみせる。この二人の仲大丈夫かな。昔からアーザス君が一方的にラインラ君に反感めいた感情を持つてるんだよね。

「まーな。それよかおっちゃんはいないのか？」

まあ、ラインラ君がまともに相手にしてないからそんな問題にはならないけど。

「おう。ほら、持って来たぞ」

ラインラ君の呼び掛けに、店の奥から出て来るモファラスさん。

両手に持っている籠にはほんのり黄色いパンヌが山ほど入っている。

「ありがとうございます」

「モファラスさん、ありがとう」

モファラスさんは私達に籠を渡してくれる。て、あれ？ 私の方にしてはパンヌの量が多くはないか？

私が疑問に思いモファラスさんの顔を見上げると、目線を反らされてしまった。何なんだ？ 余ったから少し分けてくれるのかな。

「あの、モファラスさん……」

そこをアーザス君に肩をチヨンと突かれる。今度は何さ。

「何ですかアーザス君」

「アレシアちゃん、親切は素直に受け取った方がした方も喜ぶんじゃない？」

親切？ あー、もしかしてモフアラスさん、私の帰還を祝福してくれてる訳？ ふーん。へー。ふふつ。

「あ、アレシアちゃん？」

アーザス君に怪訝に思われるのも仕方ない。私今、気持ち悪い顔してるもの。顔がどうしてもにやけちゃう。

「ありがとうございますっ、モフアラスさんっ！」

「……………ああ」

もう、反応鈍いなあ。でもこれも照れ隠しなんだろう。さーてと、大分時間をくってしまった。お母さんが待ちくたびれてるかもしれない。そろそろ我が家に帰ろうか。

「また明日も来ますね！」

「……………ああ」

私は浮ついた心を持って余しながら、帰宅の途に着いた。

裏口から家に入ると、廊下を真っすぐ進んだ先にある玄関でディーウアが来客と応対しているのが見えた。ディーウアの背中が邪魔になって来客の姿は分からない。しかし来客者は、朝早く何しに来たのだろうか。

「あら、見ない顔ですわね。どなたかしら？」

え、待って、この声……………。私はこの声の主を知っている。

「ディーウアと申します。サハリア様」

な、なんだと？ やはり、彼女なのか！

「サハリア…………。サハリアお姉ちゃんですか？」

「そ、その声は…………。アレシアですか？」

来客者がディーウアを押しつけた事で、彼女の姿をはっきりと目の当たりにする。

淡いレモン色の金髪も、長い髪をツインテールに纏めているのも、エメラルドブルーの瞳も、気の強そうな顔立ちも、全部が全部、サハリアお姉ちゃんだ。で、でも、何でここにいるの!?

「あ、ああ。間違いないわ。アレシア、あなたアレシアね!」

フリルの沢山付いた豪華なドレスの裾をつまみながらサハリアお姉ちゃんが駆け寄ってきて私の目の前で立ち止まり、勢いよく私に抱き着こうと両腕を広げて迫ってくる。

「うわっまずい! モファラスさんから貰ったパンヌが潰れてしま
う!」

緊急回避!

「さ……避けられ……」

あ、やば。サハリアお姉ちゃんものすごく衝撃を受けてる。でも仕方ないじゃないか! モファラスさんが丹精込めて作ったパンヌが危険にさらされてたんだもの!

「少し待ってて下さいね!」

私は駆け足で食事室に入りパンヌの盛られた籠を食卓に置く。さあ、早くサハリアお姉ちゃんの元へ戻ろう。

「あら、アレシア。あなたパンヌ取って来てくれたの?」

おっと、お母さんに呼び止められた。

「え、あ、はい」

「ありがとうアレシア!」

そしてギューと抱きしめられた。お使い位でこんなに喜んでくれるなら私も嬉しいよ。でも私、ちよつと急ぎの用事があるんだな! サハリアお姉ちゃんの精神には私が爆撃を仕掛けて結構な打撃を与えてしまっている。早く取り繕わないといけないのだ。

「お、お母さん」

こんな喜んでくれてるお母さんに口出しするのは気が引けるのだが、やむを得ない。さっさと放して貰わないと。

「え、あ、もしかしてお腹空いたの? 分かったわ、すぐ用意するから」

助かった。今行くからねサハリアお姉ちゃん！

私が食事室から顔を出すと、膝立ちの体勢で「避けられた……避けられた……」と呟くサハリアお姉ちゃんの後ろ姿が。ディーウアも扱いに困っているようで、おたおたしながら遠巻きに眺めているだけだ。

何とかしなきゃ。でも、どうやって？　んー、そ、そうだ。私がお姉ちゃんの抱擁を避けたからこんな事になってるんだ。なら、少し恥ずかしいけど……。

私はサハリアお姉ちゃんの背中に抱き着いた。さらに避けた訳じゃない事もアピールしとく。

「会えて嬉しいです、サハリアお姉ちゃん」

こら、ディーウア。笑うな。余計恥ずかしくなるだろ。

「あ……アレシア！　もう放さないわ！」

うわ、サハリアお姉ちゃんがいきなり反転して顔と顔が向き合う体勢になった。それと何故かサハリアお姉ちゃんが駆け出してるんだが、え、ちょ、何処に向かうんだ？

「出して頂戴！」

「畏まりました」

「……は？」

私はあつという間に馬車へ乗せられ、サハリアお姉ちゃんと共に我が家を離れた。

十五、馬車の中にて

無理矢理というか、問答無用で馬車に乗せられてしまった私。呆気に取られている間に、随分家から遠ざかってしまった。いきなり連れ出すなんて、どういっつもりなんだ。

「サハリアお姉ちゃん？」

一応、抗議の意を込めて未だ抱き着くサハリアお姉ちゃんに呼び掛けてみると。

私の背中に回していた両腕を緩め、腰の辺りを両手で持ち上げるように掴まれ、さらに顔と顔をずいと近付けて一言。

「もう一度、お姉ちゃんと呼びなさい」

ものすごくシリアスな表情でこんな事を言われた。

「は？」

「さあ早く！ 呼びなさいな！」

まあ、別にいいけどさ。

「サハリア、お姉ちゃん？」

意味がいまいち分からないが、とりあえず目と目を合わせて言うてみた。

「くう……！」

み、身もだえしてる？ 何故？

いや、そんな事はどうでもいい。

「早く私を家に戻して下さい」

「あら、どうして？」

サハリアお姉ちゃんはキョトンとした表情。自覚がないとは恐ろしい。

「家族が心配します」

それにまだ寝間着から着替えてないし、強引に連れ出されたから左足のサンダルが脱げてしまってる。

「ふふふふ。それなら問題ありませんわ!」

何なんだ、この自信。もしかしてお母さんにあらかじめ話を付けておいたのか。

「何故言い切れるんです?」

「あなたのお母様とは親しくしていますもの。分かって下さるはずですよ」

親しいのはいいけど、私を一言の断りもなく連れ出す理由にはならないんじゃない?」

「知り合いですか?」

あれ。心なしか、サハリアお姉ちゃん表情に影がさした気がする。

「ええ……あなたがいなくなっただけから、度々会ってましたの。二人でああなたの思い出を語り合ったり……」

サハリアお姉ちゃんは私の腰から両手を離し、顔を俯かす。点々と、床の赤い敷物に変色する。

「ごめんなさいな。私のせいで、辛い目に合わせてしまった」

「え?」

顔を上げ、謝罪するサハリアお姉ちゃんの瞳からは涙が溢れていた。え、何いきなり泣いているんだ?

「私と関係を持たなければ、アレシアは平和な日々を過ごせたのでしょくに……私が、私さえ……!」

「違います!」

「アレシア?」

思わず叫んでしまった。でも、本当にお姉ちゃんは悪くないんだ。悪いのは、全て魔族なのだから。あいつらのせいなんかで、お姉ちゃんに悲しんで欲しくない!

「悪いのは、絶対にサハリアお姉ちゃんじゃないですよ! 悪い事をした人間が悪いんです! 拉致されたサハリアお姉ちゃんが悪い

訳ないじゃないですか！」

「だけど、私と一緒にならなければ……」

くそつ、何うじうじ悩んでるんだ。あんたが悲しんでるところも悲しくなるんだよ。

「あーもう！ 私はサハリアお姉ちゃんと仲良くなれた事をものすごく嬉しく思ってます！ これ以上私の事で泣かないで下さい！」

「……二年四ヶ月ですわ」

「はい？」

「アレシアが戻って来るまでにかかった歲月ですわ。私のせいで、アレシアはそれだけの時間を無駄にしてしまったのですわよ！？」

私にはアレシアと親しくする権利なんてないのよっ！」

何が権利だ、親しくするのにいちいち権利が必要な訳ないだろっ！ あんたはそうやって自分は本当に悪くないと、私に言っただけだ！ そしてそれが事実なんだよ！

「無駄なんかじゃありませんでした！ そりゃあ時には辛い事もありましたけど、ディーウアと旅をして楽しかった事もたくさんあったんです！ だからもうグダグダ泣き言を言わないで下さいっ！

私がいいって言ってるんだっ！ もう泣くんじゃないっ！」

「……あれ。サハリアお姉ちゃん、呆気に取られたような顔をして黙っちゃったよ。もしかして、何かやらかしたかな？ 怒鳴ったのはまずかったかな？」

「あの、サハリアお姉ちゃん？」

私が呼び掛けると、サハリアお姉ちゃんは口元を緩め、涙を何処から取り出したハンカチで拭き取り、私を抱きしめた。

「……ありがとう、アレシア。吹っ切れましたわ」

私の耳にサハリアお姉ちゃんの吐息が掛かる。耳元に響く彼女の声は優しく、そして、穏やかだった。

十六、サハリア宅にて

「アレシア、起きなさい。到着しましたわ」

え、あれ。いつの間にか眠っていたみたい。サハリアお姉ちゃんに肩を揺すぶられてる。

「あ、すみません。ついうとうとしちゃって」

肩を揺する手を止めたサハリアお姉ちゃんは、何が嬉しいのか笑顔になる。

「仕方ないですわね。抱っこしてさしあげましょう！」

仕方ないと言う割りに、どうして上機嫌なんだか。

「いや、大丈夫……なんです、けど」

「遠慮しなくていいのですわ！」

遠慮して控えめに拒否したんだがね。完全に無視されてしまい、私は既にサハリアお姉ちゃんの腕の中。いまさら拒否しても面倒なので、おとなしくするか。断じてサハリアお姉ちゃんの体が温かくて心地よいからではない。

二人であらかじめ開いていた馬車の扉から出ると、扉の傍に黒のフロックコートを着た口髭の豊かなお爺さんが立っていたのに気付く。

「お帰りなさいませ、奥様」

お爺さんは深々とお辞儀をした後、私達に、えーと、奥様？ と呼び掛けて来た。どういう事なの……。

「まさか、サハリアお姉ちゃん……」

「察しの通り、私結婚しましたの」

私の頭に唯一浮かんだ考えを肯定するサハリアお姉ちゃん。抱っこされてるから表情は分からないが、耳やうなじの辺りは少し赤く

なってる。お姉ちゃんの今の感情は嬉し恥ずかしい、といったところだろうか。って、おい！

「ほ、本当なんですかっ!？」

何冷静にお姉ちゃんの感情について考察してるんだよっ！ 一大事じゃないか！

「本当ですわよ」

「お、おめでとうございます」

意外とあっさり返答され、私の動揺も収まった。しかし、どんな人と結婚したんだろう。わがままで優しく少し傷付きやすいがすぐ立ち直るお姉ちゃんに相応しい男性とは？

「お相手はいい人ですか？」

「そうですね。軟弱で臆病、そのくせ女たらし。ああもう！ 思い出すだけで腹が立ちますわ！」

「そ、そうですね……」

深入りしない方がいい話題みたいだ。

「それにですわね！」

「奥様、それからアレシア様。ここは寒うございます。お話の続きはお部屋に入られてからではいかがでしょうか？」

話に割り込んで来たのはさっきの口髭お爺さん。

「それもそうですね。アレシア、行きましようか」

プリプリ怒ってた割に案外簡単に矛を納めてくれて助かった。

「そうですね」

お爺さんが歩き始めたのに、サハリアお姉ちゃんが付いていく。だが抱っこされている私には、二人が一体何処へ向かっているのやらさっぱりだ。まあ、お姉ちゃんの足元の歩道に敷いてある石が、赤白緑黄の四色を使ってモザイク模様を形成しているのを見るに、大層豪勢なお屋敷なんだろうな。

少しばかり四色のモザイク模様を眺めながらお姉ちゃんと会話をしていると、不意にお姉ちゃんが足を止める。何だろうと思いい、首をぐるりと回してみた。あ、口髭お爺さんが扉を開けるのを待って

たのか。

ただノッカーがライオンの顔なものには違和感。ライオンってこの世界にもいるのかな。

「どうぞお通り下さい」

「ありがとう、サパヤ」

お姉ちゃんが口髭お爺さんに促され、邸内に足を踏み入れる。白い観音開きの扉の先にはテニスコート並の広間があり、鏡に使えるんじゃないかという位床は磨き上げられ、天井には大きなシャンデリア。さらにシャンデリアの周囲には花畑に囲まれた乙女達の絵が描かれている。

すごい家だなあ、お金持ちって違うなあ。

そしてホールにはメイド服とでも言うのだろうか。白地に黒をアクセントに付け加えた、足首まで隠れるスカートを穿いている二人の女性がお姉ちゃんの出迎えに来ていた。

「お帰りなさいませサハリア様。そのお方はどうされたのですか？」

お医者様を御呼び立てしようか？」

先に口を開いたのは茶髪をお姉ちゃんと同じくツインテールにしている妙齢の女性。目が少したれ目だ。もう一人の見た目は優しいおばさんといった感じ。どちらからも殺意は感じない。て、何を探ってるんだ私。やめやめ……んー、駄目だ。努力はしたけどどうしても意識してしまう。何かメイドさんに警戒心持つちゃう。以前メイドさんに毒盛られたからかなあ。

「奥様お帰りなさいませ。よろしければ、私が代わりに抱きましようか？」

何だか勘違いされてるね。誤解を解くでしょう。よっと。私はサハリアお姉ちゃんから飛び降りた。

「あっ」

驚かしてしまつたらしく、とお姉ちゃんが声が上げる。すまないと頭の中で謝つとく。

「えーと、お初にお目にかかります。アレシアと言う者です。間柄

は友人といった所でしようか。お邪魔します」

うーわあ。何て下手くそな挨拶だ。魔王討伐旅行に出ている間、人とあんまり会話してなかったからコミュニケーション能力が著しく劣化してやがるよ。ええい、もう手遅れだ。お辞儀でごまかせ。

私は我ながら完璧とも言える四十五度のお辞儀を済まし、頭を上げると、これで名誉挽回だ。

「……あれ？」

えーと、何故だろう。場にいる全員が私を見て微笑んでいるんだが。

「アレシア、背伸びして変な敬語になってますわよ」

あ、そう、そういう事ね。挨拶がおかしかったから私、笑われちゃってるんだね。サハリアお姉ちゃん、口元をいまさら手で隠してもばれてるよ。はあ、第一印象が大事なのに見事にとちってしまっただ。

「アレシア様。無理はなさらずとも構いませんわ。アレシア様のお話はサハリア様から散々聞かされてますから、初対面とは思えませんの。どうか普段通りに過ごして下さいな」

たれ目のメイドさんからこう言われ、反省。高そうな物に囲まれて、そうだな、少し対上流階級思考に陥ってたかもしれない。落ちて着よう。

「ま、ま。可愛らしくてよろしいではございませんか。さ、奥様。奥様の部屋に参りましょう」

「そうですわね。アレシア、付いて来なさい」

口髭お爺さんを先頭に、サハリアお姉ちゃんの後を私は歩く。玄関ホールは左奥の階段に向かっているみたい。階段もまたツルツルに磨かれているようだが、滑ったら困るから赤い絨毯が敷かれていた。あれなら片方のサンダルをなくした足に優しいだろうな。ホールの床は冷たいのだ。

「おや、アレシア様。靴はいかがなされました？」

あ、口髭お爺さんが気付いた。

「アレシア寒くないんですの？ 仕方ないですわね、私が……」

「しばし我慢下さい。急いで用意させますので」

「あ……」

何か、お爺さんにおんぶされた。

「私大丈夫ですよ？」

「お客様には快適に過ごしていただくのも私の仕事の一つです。ですからどうか遠慮なさらないで下さい」

こう言われると断れないよ。まあ、お姉ちゃんの部屋で椅子に座るまでの間までの事だし、いいか。

私はお爺さんにおぶわれながら、お姉ちゃんの部屋へと向かう。

それはそうと、お爺さんの後ろを歩くお姉ちゃんから物欲しげな視線を向けられるのは何故なのだろう。

十七、謁見（前書き）

2011/03/25 加筆修正しました。

十七、謁見

私を背負う口髭お爺さんが二階へ向かう階段の最後の一段に足をかけたその時、赤い軍服を着た三人の集団が現れ階段を横一列に並んで塞いだ。全員が全員、ただならぬ雰囲気を漂わしている。

「サハリア様、大統領閣下がお待ちです」

中央に立つ、黒髪を七三分けにした男が、聞いた者の気持ちを底冷えさせる声でサハリアお姉ちゃんに話し掛けてきた。目つきも鋭く、表情のかけらもない。あまり敵にしたいくないタイプの人間だ。

「仕方ありませんわね。早く済まして下さる？」

七三分けの彼に見つめられたお姉ちゃんは少し気圧され気味みたい。それにしても、彼らは何者なのだろうか？

「私にはその質問に返答出来る権限は存在しません。アレシアさん、来てくれますね？」

七三分けの目が、口髭お爺さんの背中の中の私に向けられる。

「私、ですか？」

僅かに首を縦に振った七三が、私の問いに口を開く。

「大統領閣下がご息女が事件に遭われた一件について話し合いたいと申しています。あなたもロミリア共和国の国民なら、協力しなさい」

ああ、そっぴやお姉ちゃんの父親は大統領だった。とすると彼らは大統領の護衛かな？ ま、お姉ちゃんのお父さんなら会ってもいいか。

「分かりました」

「では、私の後についてきて下さい」

私は口髭お爺さんの背中から降りて、既に歩き出している男達の

後を追おうとした。のだが、お姉ちゃんに腕を掴まれた。

「ちよつと待ちなさいな。私も同席しますわ。それともお父様から私を連れてくるなどでも命令されたかしら？」

お姉ちゃん、トゲトゲしい発言ですね。ほら、七三が立ち止まってこつちに振り向いたよ。

ジー……私達は見つめられている。お姉ちゃんは負けじと七三を睨み付ける。

「……いいでしょう。付いて来なさい」

ふいに視線を反らした七さんは、背中越しにお姉ちゃんに譲歩の言葉を返す。勝ったのが嬉しいらしく、お姉ちゃんは私に向かつて不敵な笑みを向けてくる。あー、うんまあ、よかつたね。私が微笑みを返したらものすごい早さで私を抱き上げ、ギューと締め上げられた。何で？

「た、隊長いいんですか？」

何か都合が悪いのだろう。部下っぽい両脇の男の左側がお伺いを立てているのを盗み聞き。

「構わん。では、皆さん私に付いて来て貰いましょう」

隊長とか呼ばれてた七さんはそのまま歩き始め、私達は彼の後を慌てて追い掛けた。

「安心しなさいな。お父様は怖い人じゃないわ」

男達から少し距離を取って歩くお姉ちゃんと口髭お爺さんと私の三人。私の足を心配してか、私が歩こうとした際に無言で私を抱っこしたお姉ちゃんは、さつきから私の顔を見つめながらずっと優しい言葉を掛けてくる。多分、私を安心させようとしてるんだろうね。「その通りでございますよ。ワイヤット様は心根の大変優しい方で、その人徳が今の地位に顕れておられるのでしょうか」

何てつたって、大統領。この国で一番偉い人だから……て、ちよつと待てよ。私の記憶によれば、ワイヤット大統領はペロポネア帝国が起こしたと思われるサハリアお姉ちゃん誘拐事件での世論操作に失敗して辞任に追い込まれていたような気がするのだが。再

任されたのか？ うーん、何が何やらさっぱりだ。

あ、男達が扉の前で立ち止まった。中央の七さんが扉を叩く。

「連れて参りました」

「ありがとうございます。中に入れてくれ」

扉の内側から力強く威厳に溢れる声がかぐくもって聞こえてきた。

こつ、腹の奥底から出る感じの声だ。

「はっ」

七さんは、すすすつと無駄のない動きで観音開きの扉を開いた。

部屋の内部では豪華なソファに深々と座って手を膝の上に組んだ恰幅のいい中年男性と、ソファの後ろに立つ頭の禿げた老年男性、それに七さん達と同じ赤い軍服を着た女性が中年男性の前に立っている。

「アレシアちゃん、来てくれて助かったよ。さあ、中に入りたまえ」

そして中年男性が立ち上がり、私に手招きした。

私を抱きしめたお姉ちゃんは、手招きに応じて室内に足を踏み出す。だが、中年男性は顔をしかめた。

「サハリアは自分の部屋に戻っていなさい」

この物言いに、お姉ちゃんは眉を逆八の字にして反発する。

「嫌ですわ！ 私にも責任がありますもの。何を言われましたってぜーったいに聞きますわよ」

睨み合う二人。どうしよう、親子で喧嘩になったら家庭内がぎすぎすしてしまう。

「全く、仕方ないな」

よかった。苦笑いを浮かべているが、今回は中年男性が譲ってくれた。

「ありがとうございますお父様！」

お父様って事はやはりあの威厳たっぷりな中年男性は大統領のワイヤットな訳ね。確かにあのカリスマオーラなら、生半可な事じゃ国民の支持を離さないだろうな。それでも不支持を国民にたたき付けられたのだから、魔族の情報操作能力の高さが想像される。ま、

今となつては私が壊滅に追いやつたのだから問題はない。

あ、やっぱりお姉ちゃん存在は都合が悪かつたっぽい。後ろに控えてた老年男性が慌てて中年男性の耳元に近寄り口をぱくぱくさせてる。小声なので何を言っているかが分からないが、お姉ちゃん同席を拒否しろとか頼んでるんだらう。

「問題ないだらう」

「君がそう言うのならいいのだが」

しかし大統領には断られたみたい。不満そう、というより、不安げな表情だ。

「さて、自己紹介が遅れたな。私がサハリアの父親のワイヤットだ。職業は大統領をしている」

「私はリマルク。ワイヤットの友人だ」

「大統領閣下の護衛をしております、第五魔法戦士小隊のシルマです」

「アレシア ジェイソン バルカです。よろしく願います」

「ではアレシアさん、大統領の対面のソファにお座りになって下さい。サハリアさんはアレシアさんの隣にお願いします」

リマルクさんの声に従い席に着いた私は、数十分かけてお母さんやアーザス君に話した内容と同じ事を大統領に伝えた。私の虚構にまみれた話に質問一つせず大統領は黙々と話に耳を傾ける。友人のリマルクさんが話の途中で何度も口を挟もうとしたが、全部やめさせてくれた。

「つまり、あの日の事は覚えていないという事かね？」

私が話を打ち切ったところで、流石に堪えきれなくなったリマルクさんが大統領の制止を無視して不機嫌そうに尋ねてきた。でも、私は真実を話す気はない。リマルクさんの質問には首を縦に振る事で返答した。まあ、当たり前だが、納得のいかないリマルクさんの表情は固い。さて、疑問を持たれるのも最もな話だから反論が出る事もあらかじめ予想出来た。だから色々と言いつつも考えているんだけど、この人頭きれそう。ごまかしきれるだらうか。リマルクさん

は口を開いて発言をしようとする。来るぞ……追求の手が、でもここをごまかせば後は楽勝だ。何としても納得させてやる。と、勢い込んでリマルクさんの口撃を待っていたら突然大統領が立ち上がる。「時間を取らせてすまなかった。私はそろそろ仕事に向かうよ。後はサハリア、任せたぞ」

え、帰るの？

「分かりましたわ、お父様。任せて下さいな」

「リマルク、さあ、公務に向かおう」

「……ああ」

こうして大統領とのファーストコンタクトを私は終えた。今回は簡単に引き下がってくれたが、多分私の話をあんまり信用していないっぽい。それなのに一回も問い質される事がなかった。あからさまに疑いを表情に浮かべていたりリマルクさんはもちろん要注意人物だが、案外一番危険なのはワイヤット大統領かもしれない。やれやれ、これからどうなるのだろう。

十八、お茶の時間

大統領一行が去って行き、小中学校の教室程もある部屋には私とお姉ちゃんの二人だけが残るのみとなる。

ふう………思っていたより緊張していたみたいだ。大統領の姿が見えなくなつた途端、肩が軽くなつたような気がしたね。やっぱり、国家の最高権力者ともなると威圧感がすごい。

「アレシア、大丈夫ですか？」

疲れが表情に出ていたのだろうか、ソファの隣に座っているお姉ちゃんが心配そうに私の顔を覗き込む。

「緊張が解けて、ほっとしているだけだから大丈夫です。やっぱり、大統領と面と向かつて話すのは緊張しちゃいました」

「ははは、偉い人と話すのは大変だったよ。」

「疲れているように見えますわ。お茶にしましょう」

お姉ちゃんがそう言うと言つと音一つ立てず扉が開き、口髭お爺さんが銀色のトレイにポットとティーセット一式を載せて入ってきた。

「失礼致します」

そして優雅に私達の前で一礼をした口髭お爺さんは、私達の座るソファの前に設置されている大理石で出来たテーブルへティーセットをそつと置くと、これまた静かにティーカップへと無色の液体を注ぎ込んだ。うわあ、これがプロの執事の技って訳ですね。全く存在が邪魔になっていない。

「ありがとう、ハルク」

あ、この人ハルクさんという名前なのか。

「ありがとうございます、ハルクさん」

「お褒めに預かり光栄でございます」

お茶を入れ終えたハルクさんは優雅に一礼をしてみせると、扉の向こうに消えていった。最後まで、静肅性が高い執事だ。

さて。私は、目の前で湯気を立てているお茶を見つめる。これ、色がないんだが味はあるのだろうか。いや、あれほどまでに洗練された動作をしたハルクさんの入れてくれたお茶だ。きつとおいしいに違いない。それに万一失敗作だとしてもお湯の味がするだけだろうし。私はお高そうな陶器のティーカップを持ち、カップに口を付けた。

何だ、これは……レモンの酸味と納豆の臭みがいつぺんに口の中に広がってきた。正直に言おう、これはまずい。すぐにカップから口を離れた。でもさ、隣でお姉ちゃんがおいしそうに飲んでいるんだよね。以前私が手料理を振舞った時に、お姉ちゃんは喜んでくれた。つまり、私とお姉ちゃんですら味覚はそこまで差異はなかったはず。それなのに、おかしいな。まさか、私の料理を食べるたびにまずいのを我慢していたのかな。不安になってきた。確かめてみよう。

「あの、お姉ちゃん？」

「何かしら？」

「以前、私の手料理を食べた事がありましたよね」

「そんな事もあったわね。アレシアの手料理は本当においしかったわ」

ティーカップを右手に左手の人差し指であごをつつきながら、少し上を向いてこう話すお姉ちゃん。うーん、嘘をついているようには見えない。

「あら、まだそんなに飲んでないみたいね。このお茶とってもおいしいですわよ。もっと飲みなさいな」

くっ……こうなったら仕方ない。私の味覚には合わないと言って、勘弁してもらおう。

「アレシア、まさか、このお茶がまずいなんて思っていないでしょうね？」

私の言おうとしていた事を封じられてしまった。うう、ジト目ではらまれているよ。ええい、高々お茶の一杯や二杯、飲んでやろうじゃないか！

私はティーカップを傾け、一気に飲み干す。うえ……は、吐きたくなってきた。

「ね、おいしいですわよね？」

「は、はい」

今あんまり話しかけないで欲しい。必死に吐き気を耐えているんだ。

「全く！ こんなにおいしいのに、どうしてお父様もクライブもおいしくないなんて言うのかしら！ 信じられせんわ！ ねえ、アレシア」

おい！ あんたの味覚がおかしかったんかい！ 同意を求めるお姉ちゃんには悪いが、これに頷く事は出来ない。そして何故か大統領と未だ会った事すらないクライブさんに親近感を覚えた。

「わ、私もあんまりこのお茶は好きじゃないです……」

「そう？ こんなにおいしいのに……」

寂しそくに呟いたお姉ちゃんはまたお茶を一口すする。

そこへ、ハルクさんが入室してきた。

「お茶菓子でございます」

テーブルに置かれた平皿には、香ばしい甘い匂いを漂わす一口サイズの焼き菓子がこれでもかと山積みになっている。ありがたい、これで口直ししよう。山の頂点に位置していた、まだほかほかと温かい四角いクッキーみたいな焼き菓子をぱつと口に放り込む。

よかった。これはおいしいぞ。さくさくほかほか、いくらでも食べれちゃいそうだ。

「うふふ、アレシアったら、まだまだたくさんあるからそんなにがつつかなくていいのですわよ」

がつついていたのは、お茶の臭気から逃れるためだったんだけどね。本当にあのお茶をおいしいと思うお姉ちゃんの味覚が分からない

い。ああ、今なら大統領と話が合つと思つなあ。

十九、のどかな午後

焼き菓子をつまみながらお姉ちゃんと談笑をしていると、お姉ちゃんが私をまじまじと見つめて口を真一文字に結んだ後、いきなり「アレシア……何だかみすばらしい服を着ているわね」と言ってきた。

失礼な。これは寝間着だからみすばらしくarovうが、質素darovうが構わないんだ。問題は服にあるんじゃない。

「お姉ちゃんが着替える時間をくれたら、もう少しまともな服装もあつたんですけどね」

そう、問題は私に出かける準備をさせてくれなかったお姉ちゃんにある。あ、そう言えばこの白いワンピース姿で大統領と会話を交わしたんだ。さっきは気にもしていなかったが、今思い返すと恥ずかしいな。

「そうだわ！」

今度はお姉ちゃん、唐突にソファから立ち上がって叫ぶ。あれ、嫌な予感がするのは何でだろう？

「私がアレシアに似合う服を用意しましょう！」

「いや、大丈夫です」

目を輝かせて私に視線を合わせるお姉ちゃんに、私は即効で拒絶の返答をたたき付ける。服を買い物しに行った記憶には嫌な思い出しか残っていないんだよね。だからお姉ちゃん、どうか遠慮してくれ。

「遠慮しなくてもいいのですわ！ これは私からの祝い品よ！」

「いや、大丈夫です」

「ハルク！ 今すぐ仕立て屋を呼んで来なさいな！」

「いや、呼ばなくていいですって」

「畏まりました」

「待ってハルク！ 靴屋も呼んで頂戴！」

「いや、だから……」

「畏まりました」

「アレシア、少し待ってなさいね。とびっきりの一品を用意させますわ！」

「……ありがとうございます」

もういいさ。ありがたく服を貰ったところ。

どうしてこうなったんだ？

「大変お似合いですわよアレシア様っ！」

「ああん！ 素敵ですわ！」

いやまあ……私のせいなんだけどさ。

大統領との緊迫感溢れる会談を執り行われ、お姉ちゃんと楽しくお話をしていた豪華な部屋は、今や所狭しと並んだ洋服の数々に大半の面積を占有されてしまっており、その中で私は唯一の着せ替え人形となって服を取っ替え引っ替えされている。

首から下がどうなっているのか、怖くて見れない。というか見たくない。髪にも何か結んだり、載せたりしてる。一体何をされたのか……くっ、私は見ない。絶対に見ないからな！

「クロシアっ！ 次は靴を選びましょう！」

「御意にございまーすっ！」

あーやだやだ、何でこの人達こんなノリノリなの？ 私を着せ替えする事の、何が楽しいんだか。あと、後ろに控えてるメイドさん達も何なんだよ。何で私が振り向く度に数が増えているんだ。仕事をしろ、仕事。

あーあ、やっぱりあの時、断固とした決意で拒否すればよかった

な……。

「クロシア、そこは白がいいんじゃないかしら？」

「いいえ、サハリア様。断然黒でしょう」

「おいおい、こんな事で争うなよ。たかが服装じゃないか。んーしかし、アメリカ大統領選挙で服装によつて当選した人がいたし、たかがと馬鹿にするのはいけないかもしれない。」

「アレシアはどう思いますの！？ ここは白じゃありません！？」

「アレシア様！ 私は黒を推します！」

「やっべ。全然聞いてなかった。何が黒で何が白なんだ？ どうでもいいか。地味目な黒にしとこう。」

「じゃ、黒にします」

「アレシア様もこう言われてますし、黒でよろしいですね？」

「んぬぬ……み、ミーフ！ あなたはどう思いますの！？」

「わ、私ですか？」

「お姉ちゃん、そんなに白がよかったの？ 何を白にするかは分からないが、お姉ちゃんの見解を採ってあげればよかったかな。」

「そうよ！ 白がいいと思いませんか！？」

「私は、そうでございますね。ピンクがいいかなー……」

「ピツ、ピンク！？ あなた正気なの！？ 今のアレシアの服装の何処にピンクを合わせる気なの！？ って違います！ こういう時普通は私と意見を合わせるんじゃないやありません！？」

「そんなつもりだったのかい。こういう時、権力を振るっちゃ駄目だろ。ま、空回ってるけどさ。」

「あ、すみません」

「軽い。謝り方が薄っぺらいな。あんまりお姉ちゃんの怒りに重み感じてないよこのメイド。そういえば、この人だけお姉ちゃんを奥様と呼んでないな。」

「ピンクね……参考までにどう合わせるか教えてくれないかしら？ さ、こっちにきて」

「そして何故か仕立て屋さんが食いついた。」

「えーと、ですね。こちら辺を淡いピンクにしたらいいのではない
かと思つたのですが……」

「ふーん、あら、いいかも」

「ですよねですよね！ サハリア様、どうでしょう？」

いいのか仕立て屋さん。素人の意見で自説引つ込めていいのか。

はっ！ 素人の意見もいい物は素直に認める。これこそが真のプロ
フェッショナルなのか！

「ま……まあまあですわね。それよりも……だ、誰かこの二人より
いい考えを出さない！」

往生際が悪いぞお姉ちゃん。何がいいのかは分からないが、ピン
クがよかつたんでしょ。もうどうでもいいから終わるつよ。もう疲
れたよ。

「では私が……」

「はいはい！ 私にも考えさせて下さいっ！」

「うふふふ、ここは私も参加させていただきます」

って、え？ 何か奥に控えてたメイドさん達にじり寄って、え
？ も、もうやめてええ！ 私もう疲れたんだって！ ちよつと、

はうわっ、そこは触るなっ！ くっ、ううん……だからそこは駄目
だつて！ ていうか、そもそも全然関係ない箇所だろっつ！

「奥様、お食事のご用意が出来ましたがいかがなされますか？」

その時である、ハルクさんが現れたのは。

おお！ 救世主よ！

「あら、もうそんなに時間が経っていたの？」

ハルクさん、来てくれてありがとう。すごい助かった。

「お前達、アレシア様に失礼はなかっただろうね」

私を取り囲むメイドさん達に眉をひそめるハルクさん。ハルクさ
んの表情に、メイドさん達は慌てて散り散りにどこかへ去って行っ
た。よかつた、いなくなってくれた。私はもう、精神的にくたくた
だ。大統領謁見とは疲労の種類は違うんだが、度合いは同程度に辛
い。

「ふふっ！ 見なさいハルク！ どう思います？」

私の両脇に腕を回して持ち上げ、ハルクさんに私を見せびらかすお姉ちゃん。うあー！

「アレシア様、大変美しゅうございますよ」

「アリガトウゴザイマス」

微笑をたたえたハルクさんのお世辞。私は残念だが、素直に受け取れない。あと、疲れた！。横になりたいー。あー、ふあー。

「クロシア、アレシアに服を見繕ってくれたお礼よ。お昼と一緒に食べましょう」

お昼ご飯！ お腹空いた。食べたい。

「アレシア……目がキラキラしてますわよ。ああんもう！ 食べちゃいたいですわー！」

うーん、お姉ちゃんの発言の意味が理解出来ない。私がお昼ご飯をせっついたので、お姉ちゃんが私を食べちゃいたいのとにどんな関係が……ああ、お姉ちゃんもお腹空いたのか。比喻表現って奴だね。でも本当に私を食べないでくれよ。

「……」

「……」

ん？ どうしたの？ お姉ちゃんが仕立て屋さんとハルクさんから生暖かい視線にさらされている。

「じよ……冗談ですわよ？」

お姉ちゃん、冷や汗かいてるけど……何なの一体。さっきの発言におかしい所はあったっけ？

「……き、気持ちは分かりますけど、駄目じゃないでしょうか？」

「……お食事はこの部屋に運ばせましょう。では、私はこれでいやだから、何この空気。」

「本当に、もう帰るんですの？」

「はい」

お昼ご飯を食べ、その後もおしゃべりを続けていたら時間はあっという間に過ぎていき、もう既に空が赤く染まりつつあった。

「泊まればいいのではありません事？」

「すみません。まだお母さんに心配はかけられないんです」

「仕方ないですね。なら私がアレシアと共に行きましょう」

あ、それならいいかも。懐かしい。寮にいた頃は一緒に寝ていたっけか。

「奥様、それはなりません。夜には旦那様が帰宅なされます」

久しぶりにお姉ちゃんと夜を過ごせるかと思っただが、ハルクさんの反対にあう。うーん、駄目か。

「……ハルク。アレシアに馬車を用意してやりなさい」

むくれるお姉ちゃんだが、夫を蔑ろには出来ないらしい。

「了解致しました」

「さあ、アレシア。マリーを驚かしてやりましょう！」

あ、家にまではついてくるのね。

薄暗い星空の下、我が家に戻った私とお姉ちゃんは玄関の扉をノッカーで叩く。するとダダダダと廊下を駆ける音がしたかと思うと、勢いよく扉が開いた。

「アレシア！ 遅かったじゃな……」

どうしたのお母さん。何かこう、体が固まっているよ？

「ふふふふ。マリーさん見なさいな！ 素晴らしいでしょう！？」

私はまたも両脇に腕を滑らせ持ち上げられた。お姉ちゃん、足がブラブラするからこの持ち方やめて欲しいな。

「どどどどどうしたのその服装！？」

ああっ！ そうだ、私はお姉ちゃんに貰った服装に着替えたままだった！ ちらりと視線に入った服装があまりに私には似合いそうもない恥ずかしい代物だったので、忘れてしまいたくてずーっと心持ち上に視線を向けていたら本当に忘れてしまっていた。

「アレシアへ私からのプレゼントですわ！ 元が元とは言え、ここまで行くとはアレシアは最強ですわね！」

最強……？ どういう意味だ？

「本当ねっ！ それより、私に渡しなさいっ！」

うわっ、お母さん。腰を引っ張らないですよ。

「も、もう少し！」

お姉ちゃんも対抗しないでくれ。両脇を持つお姉ちゃんと腰に腕を回して引っ張るお母さんの力が合わさって、痛いんですけど。

「何言ってるの！ サハリアちゃんは今日一日たくさん一緒にいたじゃない！ 私なんか寂しくて寂しくてしょーがなかったんだから！」

「奥様、そろそろお時間が」

「もう！ し、仕方ありませんわね！」

お姉ちゃんが力を緩めてくれたので私はお母さんの腕の中へ。そして何かよく分からんが頬擦りされる。

「あゝんもーっ！ 可愛いわよアレシア！ 可愛い過ぎるうー！」

「アレシア、また来てもいい？」

頬を薄く桃色に染め、目線を僅かに横にそらしながら話し掛けたきたお姉ちゃん。く、可愛いのは私じゃなくてお姉ちゃんだろ。こんな風に言われたら、断れないじゃないか。まあ、もとより断る気はなかったけどさ。私はお母さんに頬擦りされつつ、お姉ちゃんに返事をする。

「是非とも来て下さい。歓迎します」

「そう、ではまた来ますわ」

つんとあごをちょっと上に上げて、さらには緩みそうになる口元を懸命に押さえ付けようとして押さえきれしていないお姉ちゃん。ぐっ！ 反則的に可愛い仕草だ。私のツボにクリティカルヒット！

「は、はい」

落ち着け、落ち着け、かるむだうん、かるむだうん。

「マリーも、さようなら」

「はい、じゃあねサハリアちゃん！ 服、ありがとうね！」

ああっ、私^が心を落ち着けている間にお姉ちゃん、馬車に足を掛けてる！ まだお礼の一つも言っていないのに！

「お姉ちゃん！ 今日^はありがとう！」

声を張り上げたかいあって私の言葉は何とかお姉ちゃんに届き、馬車の中からお姉ちゃんは窓のカーテンを取り払って手を振り返してくれた。

二十、ぐでりぐでり

お姉ちゃんの馬車が視界から消えた辺りで見送りは十分と判断したらしく、お母さんは私を抱きしめたまま我が家へ入って行く。

「ジェイソン！ ジェイソンちよつと来てっ！ 大変なの！ アレシアがつっ！」

うわ、びっくりした。いきなり耳元で大声出さないでよね。というか、私がどうしたと言うんだ。

「何があつた!？」

お母さんがせかしたかいあつて、お父さんはリニアモーターカー位の速さで居間から飛び出し私達のいる廊下に現れる。

「見てよアレシアの格好！ 可愛いでしょーっ！」

すまない、お父さん。こんな事で急がせちゃって。あと、私を他人に見せる時はお姉ちゃんもお母さんも脇を持つんだね。何でだろう？

「そうだな」

あれ、呆れるのかなと想像したんだが。意外にお父さん、じろじろと見つめてくる。

「どうしたんじゃ？ ほお……」

「まああ……お綺麗で御座います……」

さらに、お祖父さんとデイーウアも顔を出してきた。

そんな、皆から見つめられると、恥ずかしい……。頭に血が集まって来ちゃったよ。

ん？ 皆が一斉に私から視線を反らしたぞ？

「こ、ここまでえ！ これ以上は理性が死ぬるわ！」

何かお母さんよく叫ぶなあ。というか、理性が死ぬってどういう

意味だよ。

「そうじゃな。若いもんにはきつかるう」

え、何がきついのか？

「夕食の準備は出来て御座います。食事に致しましょう」

「では、行こうか」

お父さんの掛け声と共に、皆はぞろぞろ食事室へ向かって歩き出した。

えーと……見られてるよね、私。

何だか家族の皆がおかしい。私が帰宅してからずっと、私の事をこそこそと覗き見て来るのだ。夕食の時も、夕食後の今も。

やっぱり、この服装が原因だよなあ。しかしここまで注目される服装とはどういった代物なのだろうか。興味が湧いて来た。見てみよう。

私は首を仰角三十度から俯角八十度に曲げる。

「なっ」

私は即座に仰角四十五度へと戻した。

「どうかした？ アレシア」

「いえ、何でもありません」

何とか平静を保って、お母さんに返事をする。

私は……私は、何て恥ずかしい服装をしているんだ！ 極力恥ずかしくないように描写するとするならば、黒と白を主力として展開しつつ、ピンクを要所に配置。フリルを何重にも重ねて防衛線を構築といった所だろうか。うん、この表現なら全然恥ずかしくなんてな……うわああああ！ 無理！ こんな服装してられるかつ！

「私、着替えて来ますっ！」

今まで普通にこんな格好して歩いていたのか私！ 何たる厚顔無恥！ 穴、もしくは布団があったら潜り込みたい！

「駄目よ！」

「やめて下さいませっ！」

この場から逃げ出そうと椅子から飛び降りた私だったが、左右の席に座っていたお母さんとディーウアに両腕を掴まれてしまった。

「何を考えてるのアレシア！ 着替えるなんてとんでもないわ！」

「その通りで御座いますよ！ 寧ろ毎日その格好でいて頂きたいのが私共の総意で御座います！」

そんな総意認められるかつ！

「これ以上は無理！ 恥ずかしい！」

「恥ずかしい！？ 素晴らしいスパイスじゃない！」

「恥ずかしがられれば恥ずかしがられます程、目の保養で御座います！」

お母さんとディーウアが何言ってるんだか分からない！

「お願いですから行かせて下さい！」

「イ、イかせて欲しいので御座いますか？ 御命令とあらば、喜んで！」

「だっ、駄目よディーウアちゃん！ アレシアは不可侵のまま、綺麗なままできてちょうだい！」

綺麗なまま、か。ごめんねお母さん。もう私は殺人という罪で汚れているんだ。羞恥に熱くなっていった思考回路がお母さんの発言により一気に冷却されていく。

「いい加減にするんだ！」

喧騒に耐え兼ねたのか、やけに険しい表情のお父さんが立ち上がる。

「ご近所さんにも迷惑だろう。さ、今日はそろそろ寝てしまおう」

お父さんの一喝に、お母さんとディーウアはうなだれ私に謝ってくる。

「ごめんね、アレシア。お母さんはしゃぎ過ぎたわ」

「申し訳御座いません御……アレシア様。如何なる罰も甘んじる所存で御座います」

まあ、私は着替えさせてくれるならそれで構わない。二人に気にしていない旨告げた後、駆け足で二階に向かった。というか、もう着替えとかどうでもいいや。自分がお母さんの想像するような清純な存在じゃない事に思わずため息が出てしまった。

でもさっきまであれだけ着替える言ってたんだし、この格好のままではある訳にもいかない。なので自室に入りさあ着替えようとしたら、ぎいーと扉のきしむ音が聞こえてお母さんとディーウアが室内に入ってきた。

「……何か用ですか？」

今はちよつとお母さんに会いたくないんだけどな。悲しくなつてうっかり秘密を全部ぶちまけちゃいそう。

「ねえ、本当に着替え……どうかした、アレシア？」

鋭い。これだから困るんだ。

「いや、別にどうもしてませんよ？」

だがしかし、私はお母さんに心配かけないと決めたんだ。過去がばれる事は絶対にあつてはならない。動揺が顔に出してしまったのは失点だが、とっさにお母さんに背を向けたので見られてはいない。背を向けたのも柵から着替えの服を取ろうとした行為だとすれば、不自然には見えないだろう。というわけで、私はいつも通りのペースで歩き、自然な風を装って柵に手を伸ばす。

「お母さん？」

「何か心配事があつたら、すぐお母さんに言うのよ？ 大丈夫。アレシアは必ずお母さんが守つてあげるからね」

背後からふわりと抱きすくめられ、こんな事を囁かれちゃった。

こんな事されたら私は……私はこんな事を言ってくれる家族を大切な家族を傷つけない。お母さんしてみれば私に相談して欲しいのだろうが、今のお母さんの言葉は私の揺らいだ決意を固めるのに役立つ。抱擁から抜け出してから、背後のお母さんに少しの弱音と隠蔽の決意を述べる。

「ありがとう、お母さん。でも大丈夫。私なら平気です。ちよつと

一人になつたら不安になつちやつただけですから」

その後何事もなかつたように足を数歩動かして衣類棚の前に立ち、引き出しを開いて服を引つ張り出す。就寝時に着るのだからこたわりはない。いつもの白いワンピースだ。

ふう、覚悟を決めよう。アレが視界に入らないように目をつむりながらアレを脱ぎ、ベッドの下にスロー・イン。悲鳴が聞こえたのは気の迷いに違いない。次に引き出しに収納されていた衣服の一番上に配置されていた白いワンピースを手探りで奪取しすぐさま着用。これで完璧だ。

「駄目じゃない。サハリアちゃんからの頂き物を粗末に扱つたら」
目を開くとお母さんはベッドの下に体を潜り込ませお姉ちゃんからの贈り物を取り出そうとしている。

「すみません」

ただ私も限界だつたんだ。察して欲しい。

「もう！ そんな辛気臭い顔しないの！ お母さん一緒に寝てあげるから！」

いや、それどんな繋がりがあるのかな？

「いいですよ」

「遠慮なんてしない！ ほらっ、行くわよ！」

お母さんつたら、強引だな。でもまあ、いいか。温かいし。

二十一、三日目の朝の訪れ

「アレシア、おはよう」

私の睡眠は、耳元から聞こえるお母さんの優しい声により破られた。

「ん……おはようございます、お母さん」

「あら？ 起こしちゃった？」

「はい」

頬をゆつくりと撫でて来るお母さん。くすぐったいけれど、案外気持ちいい。

「まだ寝ててもいいのよ」

「いえ、モファラスさんに会う予定があるので助かりました」

「別に無理しなくてもいいわ、アレシア」

「やりたいんですよ。駄目ですか？」

「……ありがとう、アレシア。それじゃあお願いね」

「はい」

私は軽く身支度を整えてから、裏口を通りモファラスさんのパン又屋さんに向かった。うーあ、日光が眩しいなあ。今日もお昼頃は暖かくなりそう。

カランカランと鐘を鳴らして入店する。

「いらっしやいませ。アレシアちゃんだったかしら？」

お出迎えは、昨日知り合いになったちよつと陰気な女性。陰気なだけじゃなく、ちよつと優しげな雰囲気もあるから多分いい人なんだろうね。

「はい、今日も昨日と同じくバルカ家のお使いとして来ました」

「おう！ 今日来たかお嬢」

「おー。やっぱりモファラスさん元気だ。こつでなくちゃ朝って感じがしないよ。」

「おはようございます、モファラスさん」

「こつして朝の日課を済ませ、朝食をお母さんとおじいさん、それにディーウアと一緒に取っていると、お母さんが私に話し掛けて来た。」

「そついえばアレシア、アーザス君と何か約束でもしてた？」

「突然アーザス君の話題を振られる。」

「えーと、どうでしたっけ。でも何でいきなりアーザス君が出て来たんですか？」

「すっかり忘れてたんだけどね。昨日アーザス君がアレシアに会いに訪ねて来たの。だから、遊ぶ約束してたのかと思つてたんだけど」

「ん、あれ。そついわれるとしたような気がするな。確か……昨日モファラスさんのパン又屋さんでアーザス君から私に会いに来て貰うとか約束してたかも分からない。」

「アレシアその顔もしかして」

「はい、すつぽかしちゃいました」

「仕方ないわ。サハリアちゃんつたら強引なんだもの」

「まあそつなんですけどね」

「お姉ちゃんが大部分悪いんだけど、私も完全に忘れちゃつてたかなあ。その気になれば、お姉ちゃんの事だから私の都合もある程度は考慮してくれただろうし。責任が私にないとは言えない。そうだな、まだこの時間帯ならアーザス君も登校してないだろうし、ちよつと会いに行くか。」

「私、ちよつと出て来ます！」

「思い立つたが吉日。即行動だ。」

「待ちなさいアレシア！ 何処に行くの？」

「と意気込み食事室の椅子から飛び降りたはいいものの、お母さんに腕を掴まれてしまった。」

「アーザス君の所です」

「駄目よアレシア。まだ着替えてもいないじゃない。女の子なんだからそこら辺はちゃんとしないとね」

うげ。めんどくさいな。

「そんな顔しない。もう、元が元だからちゃんとそういうのには気を付けて欲しいわ。さあ、着替えに行くわよ」

そのまま私はお母さんに引つ張られるがままにされ、気が付けば昨日の衣装を身に纏っていた。

「え？ お母さん？」

どうしてこうなった。

「やっぱりいいわねこの服！ ぴったりだわ！」

いやいやいやいや。ありえないから。絶対これドン引きされちゃうから。

「さあアレシア行ってらっしゃい！ 頑張りなさいよ！」

何か微笑まれてそのまま外に出されてしまつて。さあ、私はどうしよう。このまま会いに行けばいいのか？ いや無理だ。次の日からしばらくまともに目を合わせられなくなる。うん、着替えてから出直……え、ちょっと、お母さん、何で鍵掛けちゃってるの？ この装備で行けど？ 嫌なんだけれども。本当に勘弁して欲しいんだけど。

「アレシア。そろそろアーザス君が家の前を通る頃よ！ 頑張つて！」

何を頑張るんだ！？ 精神的苦痛と戦えという事なのか！？

「あれ？ アレシアちゃ……ん？」

あ。見られた。なんとというジャストタイミング。お母さん、あなたはエスパーだったのかい？

「お、おはようございますアーザス君」

心中の動揺を押し隠して、あたかも何事もないかのように挨拶してみる。

「……」

啞然としているアーザス君。口を閉じる余裕もないみたい。そり

や、気持ちは理解出来る。そうだよ。久し振りに帰って来たと思っただらこの奇行だものね。掛ける言葉もないんだろうね。精神的におかしいって思っちゃうのも仕方ないよね。

だがちよつと待つて欲しい。アーザス君。確かに私の今の格好はとも見れた代物じゃないかもしれない。そこは認めよう、うん。というかさ、たとえこのフリルひらひらな服の似合うような人だつてさ、そこらの道端にいたら奇異の目線で見られると思うんだよ。やっぱりこういう服は場所を考えて着ないと駄目だと思う。つまり何が言いたいのかと言うとだね、この服を着たのは私自身の意思じゃないのだから、だからもうそんな目で見ないでくれなくて助かるのだがという事なんだ。

「あのですね、アーザス君。これは決して私の意思で着ている訳じゃないんですよ？　そこは理解して貰えますか？」

これからの付き合いを考え、ちゃんと釈明する事としよう。変な目で見られると、色々と困る。

「て、アーザス君？」

いくらなんでも固まり過ぎじゃないか、と思って手を握り、揺さぶってみる。あれ……この人、反応しないぞ！　どついう事なんだおい……こいつ、死……んではないないが気絶していやがるぞ！

「お母さん！　大変です！　アーザス君が気絶してます！」

私の声に、窓から覗き見していたお母さん、お祖父さん、ディーウアの三人が慌てて家から飛び出して来る。というか、見てたのか……。

「彼には刺激が強すぎたみたいね。迂闊だったわ」

「最近の若いもんは軟弱じゃのう」

「アレシアちゃんの美貌なら、こうなるのも不思議では御座いませんでしたよ」

「そうね」

「そうかもしれないな」

好き勝手に何を言ってるんだこいつら。まあいい。とにかくアー

ザス君をなんとかしなきゃ。

私達は気絶したアーザス君を居間に運び込み、ソファに寝かせた。「どうしますお母さん？」

いきなり気絶する位なもの。アーザス君、体調が悪かったんだろ。うなあ。生死に問題がなければいいんだけど。

「そうね、まずはアーザス君のお母さんに一言言っておくべきでしょうね。私、ちょっと行ってくるわ」

「ちょっと待って下さい！ お医者さんをお呼びのが先ではないでしょうか？」

「それはいいわ。原因は分かりきっているもの」

「え？」

「アレシアもそろそろ自覚して欲しいわ。成長していく毎に磨きがかかっているんだから」

いや、全く理解出来ないんだが……どう考えてもアーザス君が気絶した理由に私はないだろ。ん？ いや、え？ もしかして、私の格好にひどい拒絶感でも覚えたのか？ それを遠回しにお母さんは忠告してくれたのか？ 理不尽だ。お母さんがこの服させたんじゃないか。

「アレシア。何処に行く積りじゃ？」

「着替えてきます」

それにしても、なんだか嘔み合っていない感じがするんだよなあ。気のせいかな？

「二十二、それはわざとやっているのか？」

さて、アーザ君のお母さんが来る前に着替えてしまおうと考えていた私だったが、予想外の速さで二人が戻って来たから階段に足を乗せようとした所で背後の玄関の扉が開く音を聞いた。そしてお母さんに私の行動を咎められる。

「アレシア、アーザ君はどうしたの？　ちゃんと見てないと駄目でしょう？」

えー。原因が分かりきっているから、大丈夫なんじゃなかったの？

「すみません。ただ、この服は着替えておくべきだと思ったので」「何言ってるの！　今日はずっとその服着てなさい！」

それは断固として拒否させて貰う。

「でもお母さん、この服昨日も着たばかりですし、こういう服は大事に取っておいた方がいいと思います。滅多な事じゃ手に入らない貴重品なんですよ？　こんなに頻繁に着ていたらすぐに擦り切れちゃうかもしれません」

「……しょうがないわね。じゃあ今日に焼き付けるから、そこでちよつとじつとしてなさい」

「はあ……。分かりました」

よく分からないなあ。お母さんにとってこの服を着た私は気持ち悪く映っていないのかな。我が子ならばどんな姿でも可愛いのかな。気になるなあ。聞いてみようかなあ。でも……ええい、別に容姿が少し位悪かったってなんだっていうんだ。このまま頭にしこりを残しておきたくない。さっさと聞いてすっきりしよう。とはいえ、私

の個人的な意見としては自分の顔はそこそこ綺麗な顔しているとは思っただけだ。

「お母さん。この服、似合ってますかね？」

少し不安だったのだが、思い切って質問してみた。

「そりゃあもう！ 似合い過ぎよ！ その服はアレシアの為に作られているんだから当然かもしれないけどね。サハリアちゃんはい仕事したわ！」

ああ、考えてみれば似合うように作られたのだから似合うのが当然な訳か。でもこれで、アーザス君が気絶した理由に私は含まれないって事になるよね。良かった良かった。

「それより、お母さん。デウラテさんの様子がさっきからおかしくありませんか？」

「え？」

何かさっきから全く動いてないように見えるのは気のせいか？

「もう！ アレシア自重しなさい！」

「はい？」

何で私？

「それよりデウラテさんをどうしますか？」

「そうねえ……。しばらく横になってればじきに気づくから、ソファに寝かせておきましょう。後、アレシアは今すぐ着替えてきなさい。これ以上の被害は出したくないわ」

「でも、やっぱりお医者さんに診断して貰った方がいいんじゃないですか？」

私の服装に原因がないなら、いや、何かお母さんに叱られたし、また真相はどうなのか怪しくなってしまったが、ないのなら、二人の人間が倒れるのはおかしい。

「大丈夫よ」

「どうして断言出来るんです？ もしかして、お母さんは事の真相を知っているんですか？」

「お母さんはまだアレシアが気付いていないのにびっくりよ」

そんな事言われても、分からない物は分からないんだ。この服装に原因がある可能性は推察出来るけれど。

「すみません、どうしても分からないんです。教えてくれませんか」

「そうねえ。口で言うより鏡を見た方が早いと思うわ」

「ありがとうございます！」

いてもたってもいられなくなった私は、洗面所へ駆ける。

一体鏡には……何が映し出されるといふんだ……！？

廊下を奥に進み、洗面所に入ると早速鏡を覗き込んで見る。

そこに映し出されたのは当たり前だが、私の姿だ。えーと……ここから何が分かるというの？ ふむ、冷静に分析してみよう。まず、洗面所は日本にあるのと同じような蛇口から水の出る洗面台と、顔を映す目的で設置された鏡とで成り立っている。洗面所の設置された部屋には窓から陽光が差し込んでいて、視界は良好だ。また、私の身長がそこまで高くないので洗面所では木箱を踏み台として使用している。そうする事で、鏡に私の体は胸の辺りまで映る。そこに映しだされた私が普段と異なっている点は、服装を除けばないような気がするのだが、まあ一応まとめてみるか。何か分かるかもしれない。

肌は白く、地球での北欧系に類似していて、髪はお母さん譲りの白銀色。目は紅色だが別に太陽に弱い訳でもない。鏡に映っている範囲内での服装は黒を基調にしたドレスみたいな服だが、その手の知識が薄いので詳しく種類を上げる事は出来ない。

ふう、全然分からん。変わった点なんてないじゃないか。

もういいや。お母さんに答えを聞こう。そっちの方が手っ取り早い。

おそらく居間にいるだろうと中に入ると、お母さんはソファに寝かせたアーザス君とデウラテさんの看病をディーウアと一緒にしていた。

「お母さん、全然分かりませんでした」

「……まあそうよね。分かるならとうの昔に気付く筈なものね」

何、その諦めきつた表情。私には理解出来ないともいうのか。
「そんなに難しい事なんですか？ 私も頑張りますから言っておさ
いよ」

「分かったわ。この二人が倒れた原因はね、アレシアが綺麗過ぎる
からよ」

面白くない冗談だ。

「で、真実は何ですか？」

「……ディーウアちゃん、どうしたらいいのかしら？」

「申し訳御座いませぬ。どうしようもありません」

何で私に理解力がないかのような雰囲気になっっているんだ？ 人の美貌程度でこんな現象が発生する訳ないだろうに。からかわれているのか、それとも実はこの二人にも真相は分からないんだけど、答えがないのは怖いから私を理由にしているのか？ って無理のあり過ぎな妄想だな。あつ！ もしかしてこれが大人にならないと分からない事って奴か！ いやいや、私も身体上はともかく精神は二十歳過ぎてるから。という事は、肉体が大人にならないといけない……？ ん？ あれ？ 何か訳分からなくなってきたぞ。結局、アーザス君とデウラテさんの倒れた原因は何？ そして何故私には教えてくれないの？

「お願いします。本当の事を言っておささいよ。頭がこんがらがってきちゃいます」

「アレシア、ホント、お願いだから鏡をよーく見て来なさい。私は嘘を付いてないわ」

く……絶対と言わないという事だね。仕方ない、後でディーウアに主人命令で真実を吐かせてやる。フッフッフ、素直に吐けよディーウア。でないとおちよつとだけ苦しい目に会うかもだよ？

「分かりました。二人が倒れた理由は私が綺麗過ぎるせいだったんですネー！！」

後で待つてるディーウア。

「よかったわ……ようやく、本当によーーうやくアレシアに納

得して貰えたみたい。これもディーウアちゃんのおかげよ。ありがとうね」

「……お褒め頂き有難う御座います。それより何だか寒気がしませんか？」

「いいえ、そんな事はないけど。もしかしてディーウアちゃん疲れてるんじゃないかしら？ お手伝いばかりじゃ、体が持たないわ。さ、そこに座りなさい」

「申し訳御座いません」

「いいのよ、気にしないで。それよりアレシア着替えて来なさい」

「はい」

どづいつ風の吹き回しか知らないが、ありがたい。さっさと着替えてこよう。

二十三、アーザス君を追い掛けて（前書き）

2011/7/29 加筆しました。

二十三、アーザ君を追い掛けて

着替えを済ませた私が階下に下りるとアーザ君とデウラテさんの二人が目覚ましていた。

「あら、着替えちゃったのね」

「仕方ないわよ。まさかあれだけの被害が出るなんて思わなかったんだもの」

まだ言つてら。まあいいや、私はアーザ君に謝らないと。

大人の会話を始め出したお母さん達の横をすり抜け、ソファに座るアーザ君の前に立つ。

「アーザ君、昨日は約束をすっぱかしてしまつてすみませんでした」

あれ、何だかぼんやりしているな。

「アーザ君？」

返事がない。肩に手を掛け揺すぶってみる。

「アーザ君、大丈夫ですか？」

あ、私と目が合った。

「ああああああアレシアちゃん!？」

ちよつと、いきなり立たないでくれ。急だからびっくりしたじゃないか。

「ええ、そうですよ？」

「どどどどどどどうしてここに!？」

しかし、慌て過ぎだろ。どうしたんだアーザ君。

「ここ、私の家ですよ？ いて当然じゃないですか？」

「え、えええ？ ど、どうなってるの!？」

結構な混乱具合だが、アーザ君大丈夫かな？

「覚えていませんか？ アーザ君、あなたは道ばたで急に倒れたんですよ。それでうちに運び込まれたんです」

「え……！？」

やっとアーザス君落ち着いて来たみたい。良かった。

「そ、そうだ。アレシアちゃんを……あ、あの時に服装じゃないんだね」

おっとその話題は鬼門だ！

「あの、あれは私の意思で着たんじゃありませんからね！」

「ふ、ふーん。そっか」

あ、ちよつと引かれてる？ やっぱあの服装はないよな……。はあ……。

「あ、正気に戻ったみたいねアーザス。大丈夫？」

「うん、お母さん……あ！ ボク、学校行かなきゃ！」

「そうね……。でも、もう間に合わないんじゃない？」

「そうだけど、少し位顔出した方がいいもん！ 行ってきます！」

「いってらっしゃいアーザス！」

アーザス君はあつという間にこの部屋から駆け出ってしまった。何というか、真面目だな、アーザス君は。私なら面倒で休んじやいそいなものなだけだ。

「偉いわねアーザス君。私だったら休んじやうわ」

あ、お母さんも同じ事言ってる。

「ふふ、そっかしら？」

デウラテさん、アーザス君を褒められて嬉しそうだ。

「アレシアもアーザス君となら安心ね」

「あら本当！？」

さつきお母さんから掛けられた言葉より、こんな言葉の方が嬉しいのか？ さつきからよく分からない事が多いな。美貌が人を気絶させる無殺傷兵器だという荒唐無稽な話で話題を逸らしたり、私とアーザス君の生涯親友発言にデウラテさんが歓喜したり。

て、おいおい。アーザス君にちゃんとまだ謝っていないぞ。わざわざ私の美貌（笑）で気絶させてまで呼び止めたのに、本来の目的を遂げない訳に行くものか。

「お母さんまだアーザス君に謝ってなかったので追い掛けて来ますね！」

「ちよつと！ アレシア!？」

なあと、まだそんなに時間も経ってないし、アーザス君の通う学校の場所は把握している。間に合うでしょう。

私は家を飛び出し閑静な住宅街の中を駆ける。材質は知らないが今履いている茶色い革靴で敷き詰められた石畳を蹴るのはちよつときつい。元々走り回る為の靴じゃないしね。それにしても、静かな住宅街をたたたと足音鳴らして走っているせいも、妙に出会った人々から見られてるな。

我が家のあるチェリアの丘を駆け下り続け五分が過ぎようとした頃、ようやく学校が見えてきた。内部に列柱のアーケードを持ち、建物の背が高く、奥行き幅広い設計で建築された一階建煉瓦製の学校は私達の住む地区の人々の集会場にもなっているが、午前中は教育の場として使われているのだ。古代ローマのバシリカに似ているといえは似ていない事もない。

その学校の授業も太陽がだいぶ高く昇っているし、もうそろそろ終わるんじゃないだろうか。まあいい、私が魔法を使ってノンストップでここまで走り抜けて来たんだ。アーザス君はまだ到着してないに違いない。少し待ってればアーザス君の方から来てくれるだろう。その間、学校の中でも覗いてみようかな。

観音開きの扉をそつと開いて僅かな隙間を作り、内部の様子を見てみる。

「……で、あるからして四分の二は二分の一と同じなのです」

「こらこらこらこら。足し算引き算より先に掛け算をしなきゃ！
ね、分かった？」

学校の中からは先生の声だけが聞こえる。私語とかはないんだ。いや、ただ目立たないようにしているだけか。もそもそ生徒達が動いているのが私の位置からはよく分かる。内部は七つまとまりに分けられ、それぞれで異なる授業をしているみたいだ。私の近くで授

業をしている二十人程の集団は、四人掛けの長机の上に蠟ろうを流し込んだ板を乗せて、その蠟を鉄棒でガリガリ削って筆算とかをしているみたい。まだ紙は貴重だから、そんなホイホイ使える物じゃないんだろうね。

「あれ？」

七つのまとまりの内、一番奥の集団の中にアーザス君がいるぞ。

私の走行速度は通行人に不審に思われない位に抑えていたとはいえ、ほぼフルスピードで走って来たんだけどな。どういう事だろう。アーザス君がフルスピードで走ったら五分も走り続けられないだろうし、かと言ってペースを落として家から学校まで走って来たのなら追いつく筈なんだが。

「せんせーっ！ だれかが入口から覗いてるー！」

しまった。私に気付いた女の子が学校中に響き渡る大きな声で叫ぶから一斉に視線が私に集まってしまった。

一番近くで授業をしていた面長の中年女性が私につかつかと歩み寄って来た。着用している薄黄色のローブが床に付きそうだけど、よく踏んづけずに歩けるな。

「あなたはどなた？ 見た所、学校に通っている年頃のようにけど、どうしたのかな？」

中年女性は私のすぐ目の前に来て、膝を折り曲げて私に視線を合わせて話し掛けて来る。

「この学校に友達がいるんです。だからちよつと確認しようと思っ
て覗いたんですが……ご迷惑でしたね、すみません」

「あらあらいいのよ。そんなにかしこまらなくて」

「ありがとうございます」

でも、私はいつも丁寧語で会話しているからね。お気遣いは無用だ。

「そうね、外は寒いでしょう？ お友達の授業が終わるまで中で座
つていなさい」

「いや、大丈夫ですよ？」

「いいから、さ、さ、こっちに來なさい」

「おお、急に手を引つ張らないで欲しいね。まあ、そんな意固地を張る必要もないし、ここはお言葉に甘えよう。今日の天気は日差しは暖かいのだけど、絶えず冷たい微風が吹いて来るから外で待つのは嫌だったし。」

「女性教師に腕を引きずられ私は七、八歳位の子供達が二十八人いるまとまりの所へ連れ込まれた。あ、顔見知りが一人居るぞ。ルー君じゃないか。」

「席に空きがないわね」

「何だか嬉しそうに呟いているのは、何故だろう。」

「先生！ここ、ここが空いています！」

「こっちも空いてるよっ！」

「成る程、先生の呟きに反応して生徒達が自発的に四人掛けの長椅子を詰めて私を座らせようとしている。この先生、分かってやったのか。自分の生徒が優しいというのは自慢になるんだろうね。」

「……」

「ん？何で嬉しくなさそうなんだ？」

「生徒達の声を見殺して教壇に移動する先生と私。」

「みなさん、ちょっとだけこの子を預かる事になりました。仲良く出来るかな？」

先生の問いかけに、「はい」と生徒達の大きな返事が返って来る。

「先ずお名前から自己紹介して貰えるかしら？」

「……はあ。いいですよ」

「何これ。私は何で転校生みたいな状況に追い込まれてるんだ。」

「皆さん初めまして。私はアレシアバルカです。少しの間だけです。がよろしくお願ひします」

「まあ、こんな感じでいいよね。」

「今日は授業はここまでとします。先生はアレシアちゃんのお世話をするので皆さんは帰ってもいいわよ」

「やー。わたしもアレシアちゃんのお世話するー」

「ずるいせんせー！」

いや皆落ち着けよ。帰っていいんだからさっさと遊びに行くなりしろよ。何で皆して私の方に近寄って来ているんだよ？ ちよっ、待って。待ってくれえ！ 一斉に私を押さないで！ つ、潰れる！ 圧殺されちゃう！ 痛っ！ も、もう駄目だ……後で疑いを持たれたって構うものか！ 強引に脱出してや、あれ？

「何をしとるんだお前は？」

「ラインラ君……」

君が助けてくれたのか。私を呆れた表情で見つめてくるのは少々気に障るが、この際不問にしよう。

「ありがとうございます。助かりました」

「うるせえ、ルールがどうしてもつったからだかな。勘違いするなよ！？」

照れるなよ、ラインラ君。子供らしくていいとは思っけど。

「お兄ちゃん！ とにかくここからですよ！」

ルール君の焦った声を聞き辺りを見回してみると、周囲の人々からの困惑や羨望、好奇の混じった視線が私達に突き刺さる。

「ん？ ああそうだな」

私達は周囲の人々の混乱が収まる前に学校を抜け出した。

二十四、友人達の放課後にて

学校から何事も無く出て行った私達三人は取り敢えずそれぞれの自宅への道を歩いていった。と言つても、私の家までは同じ道を通るだけだ。

「しかし、子供って恐ろしいですね。夢中となる対象物にがつつり食らいついて来るんですから。まあ、幼年者のお世話を皆がやりたがるのは悪い事じゃないんでしょうけど」

そう考えてみると、私のお世話をしようと率先して群がって来た彼らは素晴らしい精神の持ち主だったのかもしれないなあ。まあ私にしてみれば群がって来る彼らの方が幼年者なんだけどね。

「何言つてんだ？ お前も子供だろ」

ラインラ君にすかさずツッコまれてしまった。

「いや、そうなんですけど」

私はただの子供とは些か違つのですよ。色んな意味で。

「あ」

私、またすべき事をしていないじゃないか。

「どうした？」

「アーザス君ってまだ学校ですかね？」

「あいつに用があつたのか」

「そうですね、それなのにあんな事になつてしまつて……」

困つたもんだ。

「あんな事になつたのはお前のせいだろ」

「う……」

言い返す言葉がない。うん。確かにそうではあるんだけど。でも

さ、どうしてああなるんだかなあ。

「アーザスになんの用があったんだよ」

「いやそれが、昨日ちよつと会う約束をしていたんですがすっぱかしちゃったんです。だから謝らなきゃいけないのです」

「それでわざわざ学校に押しかけてきたのかよ？」

ラインラ君に私がしようとしていた事を復唱されてみたが、ここまでする必要のないな。学校が終わってからアーザス君の家に訪問すればいいだけだったね。とんだ無駄骨だ。しかも、そんな事で学校に迷惑をかけてしまったし。後日謝りに行くべきかもしれない。て、謝罪対象がどんどん増えていつてるよ。

「ははは……」

乾いた笑いが喉を震わす。

「ばっかじゃねえの」

「ごもつとも。本当にその通りだ。」

「で、これからどうすんだ？」

「そうですね……アーザス君の家に行つて待たして貰いますかね」

「そうか」

「その後、何かあるか？」

「いえ、特になかったと思います」

「ならアーザスに謝つた後、オレんちに来い」

「え？ どうしてですか？」

「うっせい！ 一緒に遊んでやるつつつてんだよ！ お前どーせアーザス以外友達いねーだろ！」

何だこの状況は？ ラインラ君ってこんな子だったっけか。以前はイタズラは頻繁に仕掛けては来るものの、遊びになんて誘つて来る事は無かつたのに。

私を気遣うようになるとは、ラインラ君も成長してるんだな。年長者としては微笑ましい限りだよ。

「そういう事ならありがたく行かせて貰いますよ」

「……なんだよ。ニヤニヤしゃがって」

「いやいや。何でもありません」

あらから十数分後。ラインラ君達とは別れ、私は自宅のすぐ隣にあるアーザス君の家の前に立っている。煉瓦むき出しの我が家とは異なり漆喰で白く塗り固められた白い壁が美しい。汚れやすいだろうに、よくこの白さを維持しているもんだ。壁に合わせたのか白く塗装された木製の扉をどンドン、と二回叩いて訪問を知らせる。

「あら、アレシアちゃん。どうしたの？」

ちよつと時間を置いて、デウラテさんが扉を開けて出てきた。

「アーザス君帰って来てますか？」

「ごめんなさいね。あの子まだ帰っていないの」

「そうですか」

まだ学校なのかな？

「もつお昼ご飯の時間でしょう。食べてからまたいらっしやい。マリーさん心配してたわよ」

「分かりました。ありがとうございます」

デウラテさんの言葉に従って我が家に戻る事にしよう。アーザス君の家は自宅の隣なので三十秒もかからずに玄関に入る事が出来た。「ただいま帰りました」

私の帰宅の挨拶と同時に、いきなり台所の扉が威勢よく開け放たれお母さんが飛び出して来る。

「遅いじゃない！ 何をしてたの！？」

うお、凄い剣幕。

「すみません。アーザス君と上手く鉢合わせにならなかったもので」

「心配したでしょう！」

「すみません」

床を踏み鳴らしながら近付いてきたお母さんは前触れもなしに私をギユウと抱き締め上げる。

私もまさかこんな時間がかかるとは思わなかった。お母さんもちよつとアーザス君とお話しして帰って来るとばかり思っていたのだ

ろつから、何かあつたかと心労をかけちゃったんだろう。馬鹿だな、私は。こんなちよつとした事でお母さんに負担をかけてしまった。本当に愚かだよ、ちゃんと気を付けなくてはいけない。

「もう、一生涯このままдейようかしら」

「……え？」

今とんでもない発言を聞いてしまったが、本気か？

「ジョーダンよ、冗談。さ、お昼ご飯にしましょう」

だよねえ、真剣な表情で言つてそれらしく見せたただだよね。その慌てたような表情も驚かす為の演技なんだよね。……だよ、ね？

さて、お昼ご飯を済ませた私はちゃんと行き先を告げた後、最初にアーザ君の家に向かつた。扉をノックして来訪を告げると、すぐに扉が開いてアーザ君が出迎えてくれた。

「アレシアちゃん！ 待つてたよ！」

「こんにちは、アーザ君。少しだけいいですか？」

「もちろん！ とにかく中に入ってよ！」

それにしてもアーザ君は機嫌が良いようだ。何か嬉しい事でもあつたのかな。

「いえ、次の予定もあるのでここで」

「そつか。それで何の用かな？」

うん？ 少しテンションが下がつたようだが、私は何かしてしまつたか？ まあいい、先ずはやるべき事を済ませよう。

「昨日の事です。約束していたのにすみませんでした」

ようやく目的が達せられた。というか、何か、謝る事が目的になつちやてたな。

「そんなのいいよ。全然気にしてない」

「そうですか。良かったです」

これでもうアーザ君には用が無いのだけれど、これだけでお別れというのもアーザ君に悪い気がする。

「そつだ。実はラインラ君の所に行くんですが、予定が空いている

のならアーザス君も来ませんか？」

「ふ〜ん……」

あれ、ちよつとした親切心からの発言だったんだけど、お節介だつたかな。

「アーザス君？」

「うん。ボクも行くよ。お母さん！ アレシアちゃんと遊びに行つて来るね！」

「行つてらっしゃい！」

私はアーザス君と隣り合つてラインラ君の家へと歩いて行く。徒歩でも三分以内に着ける位の距離だ。しかし、私達を除いて人がほとんど歩いてないなあ。

「ねえアレシアちゃん。ちよつと聞いてもいいかな」

隣を歩くアーザス君が話し掛けて来る。

「何ですか？ 構いませんよ」

「あのお、ラインラの所に何をしに行くの？」

「何でしょうね。ただ来いとしか言われていないんですよ」

「そうなんだ。じゃあ、彼はアレシアちゃんをどうして呼んだのかは分かる？」

「分かりません。でも、そう悪い事にはならないとは思いますが」

ラインラ君は意地悪な性格はしているけど、陰湿な性格はしてないからね。それに大雑把な性格だし、変な小細工はして来ないでしょう。ガキ大将っぽい感じと言えばいいのかもしれない。

「そうだといんだけどね」

アーザス君は何が心配なのかな。私と話している時は笑顔なんですけど、時々考え込むように下を向いたりする。少し警戒し過ぎだと思ふ。大体再開する前のラインラ君のレベルなんて私のスカート捲ろうとしたり、私が外を歩いている時に通せんぼしたりとか、もう日本の小学生でもやるか分からない程度の低いものでしかなかったよ。それに比べれば……。

「遅かつたじゃねえか！」

おや、到着したか。ラインラ君の住む地域は私達の住む地域より丘の下辺りに存在している新興住宅地だ。元々小さな賃貸住宅に住んでいたようだが、私のお父さんと仲が良かった事もあって近所に引っ越しして来たと聞いている。そういう事もあってラインラ君の家は築五年も経っていないんじゃないだろうか。とにかく新築なのだ。建築には最新の流行が取り入れられて、三階建てのラインラ君の家は大きな窓と青い壁が特徴になっている。

その家の前はフットサル場位の広さがある庭になっていて、その広い庭からラインラ君は私達に声を掛けてきたのだ。

「すみません」

「フーか、何でアーザスまでいるんだよ」

「悪いかい？」

アーザス君、けんか腰はやめなよ。確かにラインラ君の物言いはがさつで無神経だけどさ。

「いや、その、駄目でしたか？」

「まー、いてもいいけど邪魔はすんなよ」

「そう、ありがとう。ラインラ」

何だこの緊迫した雰囲気。来て早々帰りたくなって来た。これから大丈夫か？

二十五、童心

私とアーザス君、それにラインラ君の三人が気まずい雰囲気の中
綱渡りのような会話をしていると、ラインラ君の弟のルール君が玄
関から姿を現した。

「遅せえぞルール」

ラインラ君の声は心なしか嬉しそうだ。私が嬉しいからそう感じ
るのかも知れない。とにかく、ルール君の登場で変わった空気をさ
つきまでのようにならないようにしないと。

「ごめん兄ちゃん」

「さてと、じゃあ行くか」

てっきりこの場で何かすると思ってたが違うのか。

「何処に向かうんですか？」

私の質問に、ニヤリと笑うラインラ君。

「いいトコだ。ついて来い」

ラインラ君が歩きだしたので、それに合わせて私達も付いて行く。
ラインラ君が意気揚々と前を歩き、その横には楽しげに笑うルール
君。その少し後ろをアーザス君と一緒に私が歩く。

「何処に向かうんでしょうね」

「ボクには分からないよ。変な場所じゃないといいんだけど」

相変わらずアーザス君は不機嫌そうだ。あんまり外で遊ぶのが好
きじゃなかったっけ？ そんな事は無かったと思うけれど、幾分情
報が古いからなあ。もしかしたら、嫌いになってたりするだろうか。

「アーザス君は外で遊ぶのって好きですか？」

「好きだよ」

あれ、好きなんだ。

「じゃあもう少し楽しんだらどうです？ ラインラ君の用意するお楽しみに期待してみましようよ」

あいつの事だから、きつとびっくりさせてくれるぞ。

「うん……」

どうにも気の乗らない返事だな。

「おい！ 早く来いよ！」

おっと。ラインラ君達と随分離れてしまった。

「ほら！ 行きましよう！」

私はアーザ君の手を握り彼を引っ張る。

「あ、う、うん！ そうだねっ！」

私達はラインラ君の元へ駆け出す。まあそんな距離が離れていた訳でも無いからすぐに追いついた。しかしアーザ君運動不足なんじゃないか？ 五十メートルも走ってないのに、顔が真っ赤だぞ。

「何やってんだ！ はぐれたらどうすんだよ！」

私達に対してお怒りの様子のラインラ君。

「すみません。さ、もう大丈夫ですから先を進みましょう」

ラインラ君はこっちを睨み付けたまま動こうとしない。

「？ どうしたんですか？」

私が問いかけるとラインラ君は舌打ちをして

「後ろにいたらまた遅れるかもしれないだろうが！ アレシアはオレの横だ！」

と怒鳴って私の腕を強引に引っ張った。危ないので私はアーザ君の手を離れた。

「痛いじゃないですか」

「うっせい！ さ、行くぞ！」

「仕方ないですね。アーザ君、行きましよう」

「うん。そうだね」

どうしたのアーザ君。笑顔なのに威圧感が漂ってくるよ。

「アーザ君、どうかしました？」

「ん？ どうして？」

ちょっとこの子怖い。どうするよ。

「い、いや何にも無いのなら構いません」

よく分らんが、しばらく触れないで置こう。

こうして私達は止まっていた足を前に進めた。ラインラ君の態度が軟化していて友好ムードになると思いきや、性格温厚だった筈のアーザ君の頑なな態度によってあんまり居心地の良くない環境である。私としては別にそれでも一向に構わないっちゃ構わないのだが、どうしてこの二人の仲はこうも悪いのだろうか。改善出来ない類の対立なのかねえ。

「アレシアちゃんと一緒に外を歩くのも、久し振りだね」

機嫌が直ったのか、アーザ君が話し掛けて来た。

「そうですね」

「オレは二度目だけだな」

ラインラ君も参加して来た。

「ふーん、そうなんだ」

おい、ラインラ君が会話に参加したらたちまち機嫌を害しやがったぞこいつ。笑顔が何故か黒く見えるな。

「アーザ君はそろそろ機嫌を直してくれませんか？ こうして大勢で外を歩いているんです。もつと楽しみましようよ」

私にとって、こういうのって久し振りなんだから、楽しくありたいんだ。

「ごめん、そんなつもりじゃなかったんだ」

途端に罰の悪そうな顔をするアーザ君。

「ですから！ 一緒に楽しもうと言っているんです！ しょげた顔しないで下さい」

「分かった。じゃあ思い切り楽しもうと思う」

いい心掛けだ。だが何故私の手を握る？

「あの？」

「駄目かな？」

「一向に構いませんが、こんなん楽しいですか？」

「ボクはこれで楽しいよ」

さつきまでとは違うきれいな笑顔を浮かべるアーザス君。

「ならいいんですが」

何が何だか分からない。

こんな具合で新興住宅街の出来たばかりの新しい街並みの中、新しく敷かれた石畳の広い道路を進んでいたのだが、先頭に立つルー君が住宅と住宅の間の細い脇道に入り込む。覗き込んで見ると脇道は日の光も満足に差し込んでおらず薄暗い。ここからは表の道を外れるらしい。

「本当にここを通るのかい？」

「ああ」

アーザス君が嫌そうな表情でラインラ君に問いかけるが、ラインラ君の方は意に介していないようで投げ槍な返事を返す。

脇道に入り込んだ後もアーザス君と私が今まで通った事の無い入り組んだ路地を進み続けておよそ五分。唐突に道が開けたかと思うと、木々の生い茂る雑木林に私達は立っていた。

「こんな所があつたんだ」

アーザス君も驚いているようだ。

「私も知りませんでした」

そういえば、上空を飛翔していた時この丘の一部に緑があつたな。陸路でどうやって行けるか検討も付かなかったが、よもやラインラ君が道を知っていたとは。

「おい、まだ着いてないぞ」

私達は緑の芽吹き始めたばかりの木々や灌木を避けつつ、雑木林の中へ足を踏み入れていく。しばらく進むと開けた土地に出た。広さはそうだな……縦百メートル、横八十メートル位かな？ 結構な広さだ。

「おっラインラ。遅かったじゃ……」

「そうだよ、今まで何して……」

そこにはかつてラインラ君と共に私にイタズラを敢行した二人の少年の姿があった。茶髪が完全に逆立っている生意気そうなのと、ここらでは珍しい黒髪の気弱そうな少年だ。身長は伸びているけれど、全体的な特徴はちつとも変っていない。ラインラ君とは現在でも親しき仲にあるようだ。

「ガーンにドウス。こいつ、覚えてるか？」

ラインラ君が私の腕の上に突き出して、プラプラと振る。

「おおおおお覚えてるのなんのってもんじゃあないよラインラ！ アレシアいつ帰って来たのさ！」

ドウス君の方が凄じ剣幕で叫び出す。落ち着けよ、どもってるぞ。

「つい二日前に帰って来ましたね」

「そそそそそつつすか！ ありがとうございます！」

何に對してのありがとうございますなんだろう。

「それよりラインラ！ なぐにアレシアに触ってくれてんだあ！

アーザス！ お前もだっ！」

一方のガーン君はラインラ君目掛けて突っ込み、私の腕を掴むラインラ君の手を振り払った後即座にアーザス君に突撃して腕を引き離す。

「いてえじゃねえか！」

「何をするんだ！」

二人はこの奇行に抗議の声を上げる。

「知るか！ くそっ！ 何て羨ま……けしからん！ ちょっとここに来なさい！」

「お、おい」

ガーン君に連れ去られてしまったラインラ君。少し離れた所で三人で円陣組んで、彼らは一体何をしているのだろう。

「ルール君。説明してくれませんか？」

状況がいまいち理解出来ないのだが。

「う、うん！ ここはボク達の秘密の遊び場なんだ！」

「へええ。そうなんですか。凄いですね」

この大都市にこんな場所が未だに残ってたんだからなあ。

「へへへ〜」

ルール君は秘密を自慢出来たのが嬉しそうだ。

「アーザス君。秘密の遊び場ですって。面白そうな展開じゃありませんか？」

「そう？」

あーあ。せつかく機嫌が直ったのにガーン君の行動のせいでアーザス君のテンションが下がっちゃったよ。

「おいお前ら。これからナチュルやんぞ。こつち来い」
円陣を解いたラインラ君が私達に呼び掛けて来る。

「うん」

ルール君は真つ先にラインラ君達の方へ駆けて行った。

「やるの？ アレシアちゃん？」

「久し振りの事せずからね。楽しそうですし」

「そつか……うん。じゃ、ボクも参加しよう」

私達もラインラ君達に合流すべく歩いて行った。

「じゃあ誰がナチュルになるか決めようか」

「いつせーの！」

全員がそれぞれグーやパー、チヨキを出す。グーは肉弾戦を意味し、パーは魔法、チヨキは剣を現す。グーはチヨキに弱いグーはチヨキに負ける。しかしグーはパーに勝つ。じゃんけんみたいなものだが、勝ち負けの基準が異なる。

「私の負けですね」

「ちゃんと十回回るんだぞ？」

「分かってます」

ナチュルは鬼ごっこに似た遊びで、じゃんけんをして負けた者がナチュルとなつてその他の者を捕まえる。ナチュル役のは十回立つたまま回転してからその他の者を追い掛けなくてはならなくて、ナチュル役の者に足をタッチされたら捕まつたと判定される。捕まつた者はその場に仰向けになる。これを繰り返してナチュル役が全

員捕まえたからお終いなのだが、捕まった者もタッチされていない方の足で動き回る事は可能でそのハンドの下、ナヂユル役にどこでもいいからタッチすると全員復帰となる。しかし、片足歩行時にナヂユル役に捕まったらその場でずーっと仰向け待機となるが、この場合でも誰かがナヂユル役をタッチしたら復帰出来る。とまあ、こんな遊びだ。逃げる範囲は時によって変わるが今回は無制限っぽい。

私は早々に回転し終えると、方々に逃げ去った者の内誰を狙うか見定める。足場は枯草が生えている程度だし、辺りは木々に囲まれている。木々の中に隠れるせこい手さえ使われなければ索敵は無問題。後はいかにして追いこむかだ。

さあ、やってやるうじやないか。

著休め三品目：ゲルマフウリオ州前篇

太陽が天頂から沈み始め、雲が空を覆い始めた昼下がりのある小さな村落。枝が雪に包まれた広葉樹が林立する中、円を描くように木が切り倒され、その円の中に煉瓦造りの家が十数軒程軒を連ねている。人口八十人もいない、小さな村だ。

その小さな村落に茶色い革鎧を着込み、頭には鈍い銀色に輝く金屬製のヘルメットを被った、百人にもなるうかという集団がいた。彼らは槍や剣、弓などを携えており、集団の中央に銀色の鷲が描かれた旗がたなびいている。その集団の中心にいる黒い詰め襟の軍服を着た若い男が、支柱四本に革を上から張っただけの簡易なテントに身を寄せ、革鎧を着た男からの報告を聞いていた。

「これで、住民は完全に避難しました」

「了解した。これよりバルグ州境までの撤退を開始する」

以前より魔獣被害の急激な増加や新種の魔獣が現れるなど、ロミア軍は魔獣脅威の増加に懸念を示してはいた。正規部隊での処理能力に限界が生じた為、予備部隊を戦力化までして対応に努めていたのだ。

だがしかし、それは急遽として発生したため当該区域は成す術もなく蹂躪されていった。警戒監視に当たっていた少数の部隊（といっても二千兵規模はあった）は敵にあつという間に飲み込まれてしまい、主力部隊に敵の存在が認知されたのは既に軍民合わせて数十万の死傷者を出した後の事であった。当該地域を担当するロミア北方軍は区域内に五万近い戦力を保有していたが、その半数が敵の侵攻の速さに組織として交戦する前に殲滅されてしまった。

現在第九歩兵軍団は甚大な魔獣被害を被ったゲルマフウリオ州の住民を退避させる為、軍の掌握出来た極僅かな範囲内における撤退の最後尾を守る役目を担っていた。その第九歩兵軍団に所属する第三小隊は、一応この周辺の住民全員が避難出来ているか確認をしていたのだが、その確認作業も終了し、小隊長であるこの若い男は撤退の命令を下そうとしている所なのだ。

しかし、テントに息を切らせて入って来た灰色のローブに身を包んだ男の報告により事態は一変する。

「現在我々の北々東より魔獣の群れが接近中！ 会敵まであと十分以内！」

ローブに身を包んだ男の報告と共に、敵の接近を告げる太鼓の音が辺りに鳴り響く。

「敵の数は！？」

顔をさつと赤くした小隊長は灰色のローブの男へがなりたてる。

「不明です！」

「くそっ！ 伝令っ！ 第一中隊に会敵する旨伝達っ！ 部隊には北々東へ戦力を集中させると伝えろっ！」

「はっ！」

小隊長の命令に、小隊付きの伝令が二人駆けて行く。

「カルっ！ 付いて来い！ 現場で指揮をする！」

小隊長は馬を休ませている場所へと歩き始める。

小隊長にうなづきを返したカルと呼ばれた灰色のローブの男は、雪の中を歩く小隊長の横に並ぶ。

「この森林地帯だ。魔法部隊はどこまで戦える？」

「敵目標は森林を高速で動いています。索敵魔法に頼った遠距離攻撃は魔力の消費にしかならないでしょう」

この索敵魔法と連結させての魔法の集中砲火がロミア軍の得意とする戦力の効率活用的一端であり、小隊単位にまでこの単純であるが有力な戦法の行える軍隊は大陸上にはロミアだけだ。

「それは弓兵にも言えるな。魔獣相手に接近戦か……厳しい戦いに

なりそうだ。よし、伝令。歩兵と歩兵の間に魔法師と弓兵を等間隔で十箇所に分散配置。お互いを援護出来るようにしると伝える」

後ろに続く伝令の一人が肉体を魔力で強化して駆け出す。小隊長とカルの二人と、後に続く伝令は仮設の厩に着くなり馬に跨がって馬を走らせた。

数十秒も馬を走らせると、円の形をしている村落の北々東に陣形を整えている小隊の歩兵、弓兵、魔法師の一群と命令を叫んでいる革鎧を着た老年の男の元に到着した。

第三小隊は小隊長の指示に従い、以下のように展開していた。

成人男性二人分の長さはある長槍と兵士と同じ大きさの楕円形の盾を装備した歩兵部隊六十八人を数メートル感覚で四つに分け、その四つに分散した歩兵部隊の間に二人一組の弓兵が三組入り、さらに車輪が付いた連射式弩一基が弓兵二人に操作されて、陣形の左翼最前線に陣取る。魔法部隊九人は陣形の後方に纏めて配置されて、陣形は即座に円陣を組めるように右端と左端の歩兵部隊は中央二つの部隊より十メートル程後方にいた。最後に弓兵一組が狙撃用に自由に動くよう言いわたされ、辺りをせわしく見回している。

つまり、第三小隊は村落が形成している円に沿う形で弓なり形の陣形を森林から百メートル程後退した場所に、横幅約五十メートル、縦幅約五メートルの広さで展開した形となる。

「副隊長！ オレは魔法師も分散しろと言ったぞ」

「小隊長お忘れですか、魔法師は集中運用した方が効率良く敵を倒します」

一般に小隊長は新米の士官であるが為に、実際の指揮は実戦経験のある古参の下士官に任せられた方が良い結果をもたらすとロミア軍では考えられている。第三小隊の小隊長はこの経験則に従う事にしたようだ。

「……そうか、ならいい」

小隊員達は息を凝らし、魔獣を待ち受ける。それは徐々に近付い

ていき……突如として、木々の間からトカゲのような頭を持ち、その頭の下部から多数の触手を延ばしている体長二メートル程の醜悪な化け物、十八匹のフルーキシが姿を現した。

「弓兵、射撃開始！」

小隊長の張り上げた声に、八人の弓兵が陣魔法が施された矢を放った。と同時に、連射式弩からも矢が発射される。

放たれた矢九本の内、七本が五匹のフルーキシに突き刺さり爆発する。矢には着弾時に、爆発する魔法陣が描かれていたのだ。金属製の矢じりが爆発して幾つもの金属片に分離。フルーキシの体内で金属片が暴れ回り、スタスタにする。

触手や頭部を吹き飛ばされた五匹のフルーキシ。しかし無傷の十三匹は弓兵達が矢筒から矢を補充している間に宙を浮いて時速二十キロ弱　　自転车程の早さ　　で迫り来る。

そんな中、連射式弩は構わず次弾を発射した。この連射式弩は矢を現代の突撃銃のように箱型弾倉に装填し引き金を引く毎に一本の矢が発射される仕組みとなっており、矢を射出する弦が二十本予め引かれているので連続二十回の射撃が可能な代物だ。射撃手が引き金を引き、撃ち終わり次第装填手が弓に五キロもする弾倉を装填する。弦も二十回撃ち終わったら弦のパーツを丸ごと取り外して交換可能なように設計されており、撃ち終わった弦を高速で引く為の機材も配備されているし、通常一小隊には弦の交換パーツが十個支給されるので、弾切れは早々起こしはしない。この方式で連射式弩は、弓兵と比べて数倍の連続発射が可能なのである。これだけでは持ち運びの不便性というデメリットに対するメリットが少ないとされたが他にも弓兵より射程も長し、射撃手は狙いを定める事だけ考えればいいので命中精度も高い、何より弓兵より大きな矢が放てる。これらは弓兵向けに陣魔法を付加した短射程の矢を多数配備するより、弓兵には斉射時に少数だけ陣魔法付加弓を与え、高威力長射程の弓兵には放てない大きな弓に陣魔法を付加した物を優先して与える方針に口ミリア軍を進めた。製造コストが高い陣魔法付加弓を

より強力に運用する為の措置であった。しかし、二つの車輪が付いただけの連射式弩はペロポネア戦時の主戦場であった森林地帯や山岳地帯、砂漠地帯での運用が著しく制限され、さらに連射式弩が破壊された場合高威力の陣魔法付加弓がほぼ封じられてしまうせいで役に立ったとは言いがたい。ともあれ、平原での会戦では中々活躍してくれたのでこんなキワモノ兵器が一部に限り使われている。ちなみにペロポネア軍も魔法の使えない兵士への火力増強の為に野球ボール位の大きさの皮袋に金属片を詰め込んで、放り投げて地面に落ちたら魔法で爆発して金属片をまき散らす代物を投入したのだが、むしろちよつとした振動ですぐ爆発してしまうので兵士達にはロミリア軍よりも怖れられたりしたとか。残念ながら、投石器や火砲の類の役割は魔法がなくなっている。

蛇足もそこまでにして、弓兵が二回目の射撃をするまでに連射式弩は四回の射撃を終えていた。

フルーキシの中で歩兵部隊の槍林に到達出来たのは僅か一匹。その歩兵部隊に肉薄したフルーキシは十本ある触手の内、先端が鋭い二本で突き刺そうとしてくる。だがそれと同時に三人の歩兵も槍の前に突き出す。二本の触手は盾の表面に直撃したが表面の鉄板を僅かに凹ませたに過ぎず、一方突き出された二本の槍はフルーキシの頭をそれぞれ貫いた。フルーキシの灰褐色の肉体から、緑色の体液が槍の穂先にネチャリと付着する。頭を潰されたフルーキシは、地面に落下し事切れた。

「カル。これで終わりか？」

「おかしいですね……索敵魔法ではもつといた気もしたのですが」
その時、伝令の一人が叫んだ。

「小隊長殿！ 後ろです！」

その言葉に背後を見ると、村落の家々の隙間から二十匹以上のフルーキシが見える。

「っ！ 魔法攻撃、開始せよっ！ 家ごと焼き払うんだ！」

「小隊長！ 前方からおおよそ三十の群れです！」

「円陣組め！ 伝令！ 中隊にフルーキシ五十以上に包囲された
伝達！ 急げっ！」
「はっ！」

伝令が走り出したのと同時に、魔法部隊が数十発の火球を村落の
家屋十数軒に着弾させた。

その火力に満足し、小隊長が前方に視線を移すと森林からワラワラ
と数百以上湧き出て来るフルーキシの群れに歩兵達が蹂躪されてい
るのを目の当たりにした。

小隊長は、フルーキシが自分に向かって触手を振り上げた瞬間を
見たのを最後に、永久の眠りについた。

第三小隊が壊滅したのと時を同じくして、その上級部隊である第
一中隊にもフルーキシの魔の手が振るわれていた。第一中隊は隸下
にある第三小隊の到着を待って、見晴らしの良い街道沿いの雪原に
駐屯し、円陣を組んでいた。だが、そこを三百六十度フルーキシに
包囲されてしまった。第一中隊五百十二人に対して、フルーキシの
数は三百を数える。激戦となったが槍を三百六十度全面に向け、さ
ながら針鼠のような体勢を取った第一中隊は、弓兵五十人が一斉に
放つ爆発矢や魔法師四十二人の大規模面制圧火力の支援もあり、何
とか乗り切った。

しかし行軍中であつたならば、たちまち壊滅していただろう。第
一中隊は運が良かったのだ。後に、第一中隊は上級部隊である第九
歩兵軍団に合流する為に移動した所を襲われたと伝令を寄越し、消
息を絶つ。

日が沈み、闇が大地を覆い隠そうとする中、人気のない都市の中

中央部に一棟だけ照明の付いた建築物があった。その建築物はゲルマフウリオ州とゲルマスペリオ州の州境から十キロ程の場所に位置するゲルマフウリオ州内の人口三万の町の庁舎で、煉瓦造り三階建ての立派な建物だ。そしてこの建築物の一階に、第九歩兵軍団の軍団本部が居を構えていた。

その第九歩兵軍団の軍団本部は喧騒の最中であつた。軍団本部にいる百六十七人の軍人達は各部隊から届く情報整理や、各部隊への指示、作戦の立案、物資の補給などの対応に追われるのだが、それぞれが他人の出す声より大きく声を出して自分の発言を通そうとしてさらに発言が聞こえにくくなる悪循環が発生していた。普段ならばこの悪循環を止める立場にいる上官達も、隷下部隊から届く数々の報告に顔を青くするばかりで役に立たない。軍団のトップである軍団長もまた、軍団に一つしかない魔力話機にしがみついて北方軍司令部と声を張り上げている。

「もう既に六個中隊と連絡が途絶えて、ここを守っている残りの四個中隊もフルーキシ数百に襲われてんだよっ！ 増援がないと撤退すら出来ん！」

軍団長である髭面の中年男性が黒の軍服に身を包み、黒い箱から延びる受話器に怒鳴るように話し掛ける。

『近隣にいる第十二軍団、第六軍団も襲われているのは同じだ』

一方、安全圏にいる司令部の男はいたって冷静だ。その冷静さに、軍団長は苛立ちを募らす。

「ふざけんな！ こっちは六個中隊三千二十一名が行方不明なんだぞっ！」

『とにかく。今第二十七歩兵軍団と第二十八歩兵軍団が北上している。これが州境に到着するまでは応援に回せる部隊はない。何とか近隣の部隊と協力してくれ。辛抱しろ、辛いのは何処も変わらないんだ』

「くそつたれ！ おい、通信手！ 第六軍団のハーヴリーに繋げ！」
軍団長は悪態をつくると受話器を置き、それを確認して通信手は魔

力話機の横に付いたダイヤルを操作する。調節を終えた通信手は受話器を軍団長に手渡した。

「ハーヴリー！ お前の第六軍団を応援に寄越してくれ！」

「フツイ。悪いが私の第六軍団は州境防衛の任務で分散しているから無理だ。三時間もすれば第二十七歩兵軍団が来るんだが、待てないか？」

「三時間だつて！？ その頃にはオレはあの世にいるぜ！ 一個位回せないのか？」

「無理だよ。予備すらかき集めてやつとこ持たせてるんだ」

「そうだ！ せめて特殊戦歩兵を百人位寄越せよ。そっちは軍団扱いだからいるんだろ？」

フツイ軍団長はこの時、背後から上がる人の声が恐怖を帯びている事に気付いた。後ろを振り返ると、割れた窓ガラスから一匹のフルーキシが侵入し、窓を背に仕事をしていた一人の男の首から上を口に含んでいる。

「駄目だ！ あいつらがいないとこっちがやられてしまうよ！」

受話器を手放し、フツイ軍団長は思わず腰に手を延ばしたが何もない。そう言えば軍団長になってから武器を持っていなかった事をフツイ軍団長は思い出した。

「おい、聞いているのか？ 特殊戦歩兵は駄目だが、騎兵なら出してもいいぞ」

フルーキシは続々と室内に入り込み、武器を持たない軍人を血祭りに挙げていく。辺りには悲鳴と血溜まりが充満する。

「おい、どうしたんだ？ 様子がおかしいぞ？」

人の声がする黒い箱に一匹のフルーキシが興味を持ち、近づく。グゲルググ……。ハーヴリー軍団長の耳に、聞き慣れた嫌な鳴き声が聞こえた。

「何があった！？ 答える！ おい！ 大丈夫か！？」

フルーキシは耳障りな叫び声に気分を害し、黒い箱へ触手を振り上げた。

著休め四品目：ゲルマフィリオ州後篇

「フツイ！ フツイーっ！！」

普段温厚な軍団帳が突然叫びだした事で、第六軍団本部は一瞬の静寂に包まれる。

「軍団長、第九歩兵軍団に何かあったのですか？」

恐る恐る一人の幕僚が声を掛ける。

「フツイ軍団長との交信中に……あの化け物の声が聞こえて………
…多分、第九は壊滅だ………」

あのペロポネアとの戦いに勇敢な働きを見せたフツイ軍団長率いる第九歩兵軍団の壊滅の知らせに、軍団本部の面々は衝撃を隠せない。動揺する者、憤激の余り歯を噛み締める者、悲しみに涙を流す者、恐怖に崩れ落ちる者……。

「落ち着くんだ皆！ 私達がすっかりしないと部下の命に係わるんだぞ！」

ハーヴリー軍団長の一喝によって一同はそれぞれのやるべき事に取り掛かり始める。敵は強大なのだ。感情に流されていてはすぐに殺されてしまう。

散発的なフルーキシの群れを撃退しつつ、増援を待つこと三時間。そろそろ増援が到着してもいい頃合いだ。

しかしそこで最大の試練にぶち当たる。

どんよりとした雰囲気の中、隷下の第八中隊とエーン国土守備隊の混成部隊から緊急通報が入った事から試練は始まった。

「第八中隊より通報！ 魔獣の群れ八千以上から猛攻を受けている！ 火力支援を要求するっ！」

「了解。魔法中隊に支援を命じる」
「はっ！」

ロミリアの歩兵軍団と軍団には大きな違いがある。それは歩兵軍団が小隊規模の魔法部隊しか保有していないのに対して、軍団には中隊規模での魔法部隊が存在することだ。小隊規模の魔法部隊の主な役目は目視射程圏内にて中隊規模の歩兵部隊の火力支援を主任務とするのだが、魔法中隊は射程数十キロをカバーする長遠距離射程攻撃を主任務に据えている。

この戦法はダキアが純研究目的で開発した重量数百キロもする魔力話機にロミリア軍が着目し、数十キロクラスにまで小型化したことから生まれたロミリアにしか出来ない恐るべきパワーなのである。従来の攻撃用魔法は目視による攻撃しか行えず、距離を取っても精々数キロの範囲内までしか攻撃が出来なかった。遠距離と言うと真つ先に思い浮かぶのが転移魔法ではあるが、転移は極めて高等な魔法で一部の特殊な人間にしか扱えず魔力消費も激しい。大人数で陣を組めば転移も確かに可能だが、前述の魔力消費の激しさは陣を組むのに参加した平均的な魔法師を（距離にもよるが）転移魔法二、三回程度の使用でダウンさせてしまう程だ。

そこで、魔力話機が登場するのである。魔力話機で前線の部隊が火力支援を求め、前方管制官が敵にポインティングを魔法によって施せば、数十キロ離れた場所からでも大規模火力をデリバリー。この戦法をこの世界の砲兵師団とも言える魔法軍団およそ七千兵で行えば、射撃命令から一分以内で一つの街を廃墟に変えるのも容易いだろう。この大陸においてこのような長距離通信能力を全軍単位で採用している軍はロミリアを除いてない。という事はロミリア軍と相対した軍は一方的にロミリアの火力を浴び続けなくてはならないのである。これに対抗可能なのはこの大陸で唯一飛行戦力を保持しているペロポネア軍だけであろう。魔力話機など使わないで、テレパシーなり声を長距離に飛ばせばいいと考えた者もいたがこの世界の魔法は目に見えない物を再現すると、どうしても高等な代物にな

つてしまい、一部の特殊部隊を除けば採用される事はなかった。

第八中隊とエーン国土守備隊は川を挟んで防御陣地を構築し、対岸から迫るフルーキシの大群へ向けて持てる限りの戦力を叩き込む。兵士達は薄く雲掛かった夜の闇の中、足首をすっぽり覆う雪に体力を奪われながらも無数の火球、投げ槍、弓を眼前に迫るフルーキシの大群に投射する。対岸の雪が、大地が、フルーキシの肉片が空中に舞いあがり、ただでさえ良好とはいえない兵士達の視界を悪くする。そして、彼らの猛攻によって出来た仲間の死体の山を乗り越えて、飛び散った血霧、土埃、雪片の中から数千のフルーキシが眼前に現れた。その絶望的なまでの物量差でも彼らは諦めずに火球を放ち、投げ槍を投擲し、矢を射続ける。だが、目視で八千以上、実数にして一万を数えるフルーキシの行進はペースを緩めずじりじりと近寄ってくる。

彼らの火力ではこの進軍を止める事など出来なかった。どだい、度重なる戦闘で戦力は三千を切っていたのだ。ついにフルーキシの先頭集団が渡河を終え、その鋭い触手が一人の兵士の持つ楯を貫き彼の手から奪い取る。彼は身を守る術を奪った。だが彼は空から近づくと強大な力に助けられる事となる。

「全員伏せろっ！」

楯を奪われ目の前に迫るフルーキシに恐怖していた一人の兵士は、上官の声に反応し咄嗟に倒れこんだ。

と、同時に空から殺傷半径三百メートル、致死半径五十メートルを誇るロミリア共和国の面制圧上級魔法【ヴルカーノ】が十二発空からフルーキシに降り注いだ。殺傷半径とはその範囲内にいた場合運の悪い者は死に、運の良い者は怪我を負う範囲を現し、致死半径は範囲内の人間をほぼ確実にあの世へと送る。この攻撃により、縦千二百メートル、横九百メートルの範囲が殺傷半径内に入った。

着弾によって辺りに響き渡った筆舌にし難い爆音が、兵士達の聴力を一時的に麻痺させる。

上官の声に助けられた、楯を失った兵士はつい閉じてしまった目を開くと、そこには目の前のフルーキシが無傷で立っていた。

「うあわあああ！」

彼は未だ持つていた槍で訓練の賜物である高速の突きをお見舞いする。その突きは速さこそあったものの、狙いが全く定まっておらず、フルーキシの触手の一本に刺さってしまった。これではフルーキシを仕留められない。彼の努力は実らなかった。彼は死を覚悟した。

「ん？」

彼が小突いたフルーキシは何の抵抗もせず、あっさりと倒れた。よくみれば、フルーキシは背部をこっそりと抉り取られていた。

先ほどまで、圧倒的な物量で迫って来た怪物達に現在その面影は見られない。彼の目の前に見えるのは、四方に散らばるチリチリと焼けている大小様々な肉片の塊だった。獲物を前に殺到していたフルーキシの大群は魔法部隊放った魔法のキルゾーンの中にまんまと入り込んでいたのだった。

第八中隊とエーン国土守備隊の混成部隊は既に生き残った僅かなフルーキシの掃討に移る事となる。

しかし、彼らが火力支援を受けている間に他部隊にも敵が迫っていた。第六軍団本部の魔力話機に次々と火力支援の要請が届く。

「第四中隊から火力支援要請！ 敵数およそ六千！」

「第二中隊、二千以上の魔獣と会敵！ 火力支援求む！」

「魔獣の群れ五千二百と交戦中！ 第十中隊が火力支援を要請しています！」

「くそっ！ 魔法中隊が第二射を放つまで後何分かかる！？」

「残り五分四十一秒！」

魔法中隊は全力での火力支援を行うと、七分のインターバルを挟まないで第二射が放てないのである。

とりわけ第二中隊の戦況は悪かった。

「絶対にあのクソツタレ共を近づけるんじゃないぞっ！」

小隊長の罵声と共に放たれる二十三本の投げ槍は全面から突っ込んでくるフルーキシの群れ数十に見事命中するも十三体を地に落とすだけで全体の勢いは止められない。

「チクシヨウ！ 白兵戦用意！ テメエら死ぬなよ！」

第二中隊を襲ったフルーキシの大群は数こそ少ないが、第二中隊が陣地をその場しのぎで構築したため、なだらかな丘を背にしていたのだ。この失敗は痛かった。丘が死角となつて後方の様子を把握しきれなかったのだ。それにより後方からフルーキシが浸透してきて奇襲を受け、貴重な魔法部隊は一緒にいた中隊司令部と一緒に術なく全滅。指揮系統の壊滅により第二中隊隷下の各小隊は各個撃破されていった。

この場には一個小隊にすら劣る戦力しか残されていなかった。

否。

もう一人、紫髪の少女がいた。いや、突如現れた。

「……邪魔」

その少女が一言呟くと、フルーキシはあろうことか同士討ちを始めた。数千いたフルーキシは徐々に数を減らしていき、やがて数十の群れにまで減った所を紫髪の少女が魔法で全て焼き払った。

「……あなた達、大丈夫？」

少女の後ろではフルーキシの群れに止めを刺した炎が未だ威勢よく踊っている。

「あ、ああ……」

「……そっか。良かった」

生き残った第二中隊の面々に少女は微笑みかける。その後、辺りをキョロキョロと見回し出す。

「……来ない」

少女の探し物はここには無かった。実の所、探し物はこの時自宅で平穏な時を過ごしているのだが、それを知る術を彼女は持っていなかった。少女は落胆し、しょぼんと下を向く。

ちやうどその時、空から一人の女性が飛び降りて来た。

「何だ。もう片付いたのか」

女性はだらしなく黒い詰襟の軍服を着、腰には剣を穿はいている。

「……ミーシャ。危ないよ？」

少女はミーシャの行動を注意するも、ミーシャはそれを意に介してはいないようだ。

「私を誰だと思っている。魔法戦士だぞ？　こんな魔獣共に後れを取るものか」

「……そう。じゃあ、手伝ってくれる？」

「無論だ。全て斬り払ってくれよう」

二人は空から飛来した二頭の竜に乗って、第二中隊の生き残り達の元から去って行った。

第六軍団本部には陰鬱な空気が流れていた。第二、第七中隊からの応答が途絶え、その他の隷下部隊も戦況は目も覆わんばかり。頼みの綱の魔法中隊も射撃目標の情報が無ければ役立たずだ。

そこに第四中隊からの通信が入る。

『こちら第四中隊だ。我々は竜に救われた』

「……は？　今、何と言った？」

軍団本部の通信手は思わず聞き返す。

「竜だ。竜がいきなり現れて、フルーキシを焼き払った。その後、フルーキシは同士討ちをし始めた。だから……だから、そう、我々は無事だ。助かった』

第四中隊からの通信を皮切りに次々と隷下の中隊から不可解な報告が上げられて来る。

「嘘じゃないんです！ 空から魔法剣士の方と竜が降りて来たんですよ！ え！？ 近衛が来てくれたんじゃないんですか！？」

「こちら第九大隊。大型の白龍と魔法師一名による支援を確認。戦線は持ち直した。ん？ そのような支援はしていないだと？ だが現に……」

その後、二個歩兵軍団の増援が到着した事により、防衛線の構築は完了された。

「疲れましたね」

「そうだね。でも、楽しかったよ」

ラインラ君達とはついさっき別れ、アーザス君と一緒に私は帰路に就いている。久し振りに子供に返って遊ぶのも以外と悪くなかった。動き回ってストレスが大分発散されたかもしれない。たまにはこういうのもいいよね。

「もうすぐ家に着きますね」

太陽ももうだいぶ傾いてる。またお母さんから不穏な呟きを聞かされるかもしれない。

「あつという間だったなあ」

私がああ発言の真意について考えようとしていたら、ふいにアーザス君がぼつりと呟く。

「何がです？」

「ん。遊んでた時間がさ」

「確かに、つい時間を忘れちゃうんですよね」

楽しい事程、時間は短く過ぎちゃうんだよなあ。

「じゃあ、ここまでだね」

私達はアーザス君の家の前に到着した。明るい時分には白い壁が目映えていたが、この時間帯だと紺色に塗りたくられているように見える。

「今日は誘ってくれてありがとう。アレシアちゃん」

日が暮れて表情は見えないけど、もし本心からそう思っているのなら嬉しい。

「こちらこそ、一緒に遊べて楽しかったです」

アーザス君はそのまま私に背を向け離れていったが、家の扉の前

で立ち止って振り返る。

「あ……明日も会えるかな？」

そんなおずおずと尋ねる事もないのに。

「特に予定もないですし、会えるんじゃないでしょうか」

「そっか」

「はい」

アーザ君は再度振り返り、家の戸を叩いて中の人に帰って来た事を知らせる。少しの間を置いて扉は開き、デウラテさんが姿を現した。デウラテさんは手のひらを上にかざして光球を浮かせている。そんなに強くはない光だけど、デウラテさんとアーザ君の周りはぼんやりと明るくなった。

「ただいま、お母さん」

「おかえりなさい、アーザス。アレシアちゃんも遊んでくれてありがとね」

「こちらこそ楽しかったです」

「アレシアちゃん、また明日！」

「さようなら、アーザス君、デウラテさん」

今度は私がアーザス君達に背を向け、我が家への帰り道に就く。

「待ちなさい、アレシアちゃん。アーザス、アレシアちゃんを見送ってあげなさい」

「いいですよ。すぐ近いですし」

ここから私が入るのが見えるのに、そんな手間かけなくてもいいじゃないか。

「なーに言ってるのアレシアちゃん。アレシアちゃんなら三口メルの間に一回は拉致られちゃうわ」

「それはないですよ」

いくらここロミリアの治安が悪いったって、五メートル毎に子供が拉致されてちゃお終いだ。

「さ、行こう。アレシアちゃん」

アーザス君もその気なの？ まさか真に受けちゃったんじゃない

だろうな。ま、いつか。別に害もないし。

「行つてきます、お母さん」

「頑張りなさいアーザス！」

何やら気負いこんでいるけど、私の家とアーザス君の家は隣だからね？

当たり前だが何の支障もなく我が家の前に到着する。が、アーザス君は何を警戒しているのやら、辺りを見回すのに忙^{せわ}しない。

私はアーザス君を気にせず戸を開けると、玄関天井に設置されている魔力灯の橙色の輝きが出迎えてくれた。ああ、やっぱり人工の明かりを見るとホツとする。何でこんな気持ちになるんだろう。帰つて来たと体が実感するのかな。

「アレシアちゃんの家、鍵掛けてないの!？」

アーザス君は心底驚いているが、何でだろう。結構我が家にアーザス君は来てたように思えるけど今まで気付かなかつたのか？

「我が家は私が帰つて来るまでは施錠しないんですよ」

「それなら、アレシアちゃんが帰つて来たらちゃんと鍵掛けるんだよね？」

そんなの当たり前だろう。施錠しないと何があるか分からない。

「勿論です」

「それなら安心だね」

私の事を心配しているのか分からないけれど、ちよつと反応が過敏だと思う。いちいち生死に関わるような驚き方をされたり九死に一生を得たような笑みを浮かべたりされると、こつちもびっくりするんだよね。

「おかえりなさい!」

私達が家に入らず玄関前で鍵談義をしていると、お母さんが食事室から駆け寄つて来た。私の肩を両手で掴み、がっちりホールドして来る。

「ああもう、随分と汚れてるわね」

ナチュルのゲームルール上、土が付いちゃうのは仕方ないとはい

え白い服だと汚れが目立つなあ。お母さんが洗うのだと考えたら申し訳ない気持ちになる。

「すみません」

この服は後で私が洗濯しようかな？ でもお母さんの洗濯テクの高さには敵わないし、余計なお世話になりかねないんだよな。

「いいのよ、謝らなくて。もうすぐご飯できるから、その間にお風呂に入って来なさい」

「分かりました。アーザス君、見送りありがとうございました」
見送りの意味はともあれ、心意気には感謝を示したい。

「アーザス君！？ き、気付かなかったわ！ ごめんなさい！」
気付いてなかったんかい！？

「ボクは気にしてません。アレシアちゃん、また明日」
本当かなあ、さつきまであんなにオーバリアクションしてたのに。アーザス君って意外と敏感なんだね。

「はい、明日も会いましょう」
今度はちゃんと会わないと、彼の心を傷付ける恐れがある。どうせこれからの予定も決まっていけないのだし、この社交辞令のような別れの挨拶も履行しておくべきだろう。

ともあれ、まずは体の汚れを洗い落とすのが先決だ。

私がシャワーを浴び終え食事室に入室すると、私以外は全員が席に着いていた。

「さっぱりしたかね」

お祖父さんが声を掛けてくる。

「はい」

流石に長時間動き回っていたからね。シャワーだけじゃ少し物足りない気分もあるが大分すっきりした。でも、湯船にも浸かりたいと思ってしまうのは日本人だからだろうか？

「外で遊ぶのは楽しかったかい？」

「はい」

「そうかそうか。で、誰と遊んだんじゃね」

「ラインラ君とアーザス君とルール君とガン君とドウス君の五人と遊びました」

「ほうほう、それは良かった」

「何をして遊んだの？」

今度はお祖父さんに代わってお母さんからの質問。

「ナチュルです。これだけをお昼からずっとやり続けてました」

思い返すと、同じ種目延々やってた事になる訳だ。よく私飽きなかったな。

「ナチュルか。懐かしいわねえ」

その時、玄関の扉を叩かれた音が聞こえた。慌てているのかせつかちなのか、激しく連続でドアノックカーを振り下ろしているようだ。夜だというのに迷惑な訪問者。

「様子を見て来る。皆は食事を続けてくれ」

お父さんが立ち上がり、食事室から出て行く。

「こんな時間に何の用かしら」

「さて、何じやるうかのう」

私達が席を立たずにだらだら喋っていたら、何やら緊迫した表情のお父さんが戻って来た。

「すまない、急ぎの用事が出来た」

「何かあったの？」

「……何とも言えないが、当分家に戻れるか分からない。マリー、荷造りを頼めるか？」

「分かったわ」

お父さん位のお偉いさんが夜間に緊急招集を受けるとは、軍務省で何が起きたのだろう？ 魔族のトップは潰したから大した事じゃないと思いたいけど、魔族が暗躍しなくとも人間は争うからな。

「アレシア。心配せんで大丈夫じゃ。アレシアのお父さんは優秀じ

「やからな」

「はい」

お父さんとお母さんのいなくなった食事室は少し物静かになった。それを打ち消そうとしてかお祖父さんが話し掛けてきたが、私はお父さんの事が気になって仕方がなかった。

食事を終えた私は台所で食器をディーウアと一緒に洗っていた。

お母さんはお父さんの見送りに時間を取られたのでまだ食事の最中だ。

「ディーウア」

私はタイル張りのシンクの中の洗い残しの食器類から手を離し、ディーウアに話を切り出す。

「何で御座いましょうか？」

「衛星網の方はどうなっていますか？」

もし完成していなくても一部が使えるんなら、情報収集が出来るんだけど。

「現在の所、衛星網構築の諸条件計算をしている所で御座います。衛星の稼働は後四日待つて頂けませんか？」

「分かりました」

仕方ないか。ここは地球ではないのだから、色々と勝手の違う部分があるんだろう。

「何か御不安が？」

「お父さんの招集の件、どう考えますか？」

「何か不審な点が御座いましたでしょうか？」

ディーウアには疑問に感じる部分がなかったらしい。だが、私だつて具体的に不審な点を示せと言われても答えられない。杞憂に過ぎないと私だつて思う。事務手続きの問題に過ぎない可能性だつてあるんだしね。

「心配のし過ぎで御座いますよ」

なら、いいんだが。どうにも嫌な予感がする。

「偉いわアレシア、ありがとうね。でも、子供はそろそろ寝る時間よ。後はお母さんに任せなさい」

台所に食事を終えたお母さんが入って来た事で、ディーウアとの会話は中断されてしまった。

「もうすぐ終わりますから」

「いいから。お母さんのやる事がなくなっちゃうじゃない」

そこまで言われると断れない。どうせもう三皿しかないんだし、お母さんに任せても負担にはなるまい。

「じゃあ、私は先に寝てます」

私は台所を後にした。

私が目を覚ますと自室のベッドで寝ていた筈なのに、お母さんに抱きすくめられていた。

「あれ？」

周りを見回したが、ここは間違いなく私の部屋。という事はお母さんの方が私の部屋に入り込んで来たのか。窓からはまだ太陽の光が差し込んでいないところを見ると、未だ夜なのだろう。

「……あら。アレシア、起こしちゃった？」

「お母さん？」

吐息に混じるアルコール臭。これは酔っているな。

「駄目でしょうアレシア。自分の部屋で寝ちゃ。ちゃんとお母さんのベッドで寝なさい。アレシアが自分の部屋でなんて寝るから、お母さんアレシアの部屋に来ちゃったじゃない」

「……はあ」

私も寝覚めだから何とも言えないが、多分お母さんは理不尽な事を言っているのではないか。

「さ。お母さんと一緒に戻りましょう」

私はお母さんに抱っこされ、自室から夫婦兼用の寝室へと移送された。もう何かどうでもいいや。お休みなさい。

「あれ……あ、そうか」

私は昨日の夜の間に移動していたんだっけ。寝る時は自室だったのに、起きたらお母さんとお父さんの部屋にいたんで一瞬混乱してしまった。

ベッドから抜け出し部屋を出る。階段の窓から今日の天気を見てみると、空全体が雲に覆われ朝だというのに何処か薄暗かった。雨でも降りそうな雲行きだ。そのまま階段を下りて居間に入ると、新聞を慌てて畳み出すお祖父さんとお母さんの姿を目撃する。何と云うか、あからさまに怪しい。

「何かあったんですか？」

「アレシアには関係の無い事よ」

「なあと、子供にはつまらない大人の問題じゃよ」

これ、告白したようなものだよね。まあいいや、まずはパン又を取りに行こう。

「そうですか。私はパン又屋さんに行つて来ます」

「気を付けてね、アレシア」

「はい」

ふふふ、新聞に載る程度の情報なら大抵の大人なら知ってるって事だよ。パン又屋さんで、ちょちょっと世間話でもすれば今日の話題のニュース位分かってしまうのさ。

情報を得るべくパン又屋さんに入店する私。鈴の音を鳴らし店内に入ると、案の定大人達が立ち話をしている。だが、私の入店と共に皆口がつぐんでしまった。困ったな、どうしよう。まあ先ずはパン又を受け取ろう。店の奥から顔を出して来たモファラスさんの元に近寄り、声を掛ける。

「おはようございます、モファラスさん」

「よう、今日も来たか。ほれ、貸しな」

モファラスさんは籠を持ってすぐに店の奥へと引っ込んでしまっさて、この待ち時間の間に聞き出せるだろうか。

「あらあらまあまあ、アレシアちゃん。お使い？」

仲のいい近所のおばさんから話し掛けてくれた。ありがたい。

「はい」

「偉いわねえ。ウチの子なんて朝はいつもお寝坊さんよ」

「あたしや情けないよ、ウチの馬鹿息子の怠け具合と違ってどうだいこの子は！ 見上げたものじゃないか！」

うーん、会話の輪の中に入る事は出来たけどどうやって新聞の内容について聞き出せるかな？ はったりでもかましてみるか？

「そう言えば、今日の新聞見ましたか？」

という事で、餌を投下。

「ああ……」

「そりゃ、見たさ」

食いついてはくれたのだが、新聞の話題になって一気に空気が重くなったな。よっぽど酷い事が書かれていたのだろう。問題はその中身が何なのかだ。

「まさか、ゲルマフィリオ州が魔獣にやられて死傷者数百万名も出るとはね。ふん、軍は一体何をやっていったんだか。」

何だつて!?

「ちよつと、おばあちゃん！ 子供に聞かせる内容じゃないでしょう！」

「何さ、この位そこらを歩けば自然と耳に入るよ。黙ってた方が子供に毒だよ」

おつと、動揺が目に見える形で表れてしまったかもしれない。新聞の内容を漏らしたホーエル家のお婆さんが叱られてしまった。

「アレシアちゃん。気にしなくても大丈夫だからね！ 軍にいるアレシアちゃんのお父さんが魔獣なんて全部やつつけちゃうからね！」

「そうさ！ ロミリアの軍は世界最強！ 魔獣なんかぼっこぼこだよ！ だから安心しな！」

そして、周りの大人達から続々と入るフォロ。これに応えない訳にもいかず、曖昧に微笑んでおく。そしたら何故か周りの大人達の中から固まったり、顔を赤く染めだす者が現れる。何なんだ。

「お嬢も大変だな。ほら」

「ありがとうございます、モファラスさん。では、また明日」

「ああ」

そこに上手い事モファラスさんが現れてくれたので、パン又屋さんからは早々に逃げ出した。

朝食を終えた私は自室に籠もり、ゲルマフィリオ州方面に無人機を展開する方法を考えていた。

未だ衛星網の構築が成されていない以上、私自身が出張る訳にも行かないし、現地の情報を知るには無人機を【物質創造】して送り込まないとならない訳だが、その操作には片眼鏡装着式統合多目的指揮統制及び情報表示装置（VER1.0）《Monocle m

Unnted joint multi-purpose Com
mand control and information d
isplay version1.0》、略してモノクルが必要な
のだ。衛星網が完成していてもこれは変わらないのだが最大の違
いは命令の伝達方法だ。

衛星網が構築されていれば、モノクルを付けた私から衛星を中継
して無人機に命令を下せるのだが、衛星網がない場合直接私と無人
機が結ばれる。まあどちらにしろ命令は下せるのだが、無人機が超
遠距離を飛翔している為私は強力な魔力を使用しなくてはならない
すると、お母さんやお祖父さん、何よりお父さんに見つかってしま
う。我が家は魔法の扱いの上手い人間ばかりで困ったもんだ。

となるとプログラムに沿った飛行をさせて行きと帰りの僅かな時
間のみモノクルを【物質創造】させなければならないのだが、それ
だとちゃんと情報を持って帰って来れるか不安なのである程度の数
を飛ばさなくてはならない。確かゲルマフィリオ州の広さがおよそ
二十五万平方キロメートルで、ロミアからの距離が一番遠い場所
で二千キロはあるから、燃料事情を考慮しないとしてもなるべく早
く帰って来て貰うには……州境付近を軽く調べてすぐ帰って来るの
に一機、深く調査するのに一機、その他に二機あればいいか。それ
で最短四時間二十分は待たなくてはならないのか。遅いな。でも仕
方ないか、高速で飛翔する偵察機なんかないもの。

さて、と。私は自室の窓を開け、空を見上げる。都合のいい事に
曇り空だ。これならロミア市民に見られる心配もないぞ。我が家
には魔力の扱いに長けた人がいるので、気付かれないようこっそり
モノクルを【物質創造】し、耳に装着。久し振りにこの緑色の画面
を見たなあ。モノクルに高度な指令を任せ上空にRQ14”グロー
バルホーク”を……て、あるじゃないかSR-71が！ あれなら

マツハ三で飛べるぞ！ 操縦は機械兵に任せればいい！
よし、SR-71”ブラックバード”出撃！

あれから、四十分。そろそろ出撃させたブラックバード二機の内、一機が帰って来る頃だ。この二機の内一機には州境付近の偵察を、もう一機には州内をくまなく偵察して来るように命令してある。操縦する機械兵はそれなりに状況判断が可能なAIが積まれているし、有用な情報を集めて来てくれると期待する。モノクルに表示されている光点もじりじりと私の元へ接近中だ。

「アレシア、入るわよ」

お、お母さん！？ くう、よりによってこんな時につ！ ノックの音と共に扉が開きます。

「？ どうしたの、アレシア？」

「な、何がですか？」

馬鹿な、もうモノクルは消したし、疑問を持たれるような点はない筈。

「慌ててるように見えるけど？」

態度自体に疑問持たれてる！？

「そんな事ありませんヨ？」

「寒いのに窓開けて何してるのよ？」

「ちよつと空気の入れ替えをしようと思ったんです」

何とか誤魔化せたか？

「そうなの」

「はい、それより何か用ですか？」

話題もさつさと変更してしまえ。疑念を抱かせたら負けだ。

「サハリアちゃんが訪ねて来て、居間でアレシアを待ってるわ」

えー、来るなら来るでもっと遅く来てくれれば助かったのに。

「分かりました」

やむを得ない。私はお母さんと一緒に居間に向かった。

「アレシア！」

「うわ」

居間に入るなりお姉ちゃんに突撃された。

「会いたかったですわ〜！」

そして、同時に抱き締められる。

「ちよつと、何なんですかいきなり」

後少して情報が得られたにも関わらず、妨害されてこっちは不機嫌なんだ。そういう行為は慎んで欲しいね。と、表情で遺憾の意を表明する。

「ああ、怒った顔もいいわあ」

駄目だこりゃ。日本人なら表情から察してくれたらうに。

「お母さん！ この人何とかしてくれませんか！？」

困った時の親頼み。

「え？ あ、ああ、そうね。サハリアちゃんよくやったわ」

「お、お母さん？」

何を言っているんだいお母さん。お姉ちゃんの行為の何処によくやったと言える部分がある？

「サハリアちゃん。ようやく私達の願いが叶うわね……」

「やつと、ですわね……」

え、何なの？ この流れ。

「一体何が始まるんです？」

「よくぞ聞いてくれましたわ！ 私とお母様はアレシアがいない間、アレシアにどんな服装をさせるか想像してお互いを慰めあっていたのですわ！」

「そして今日、その空想が現実化するのよ！」

私がない間この二人は何やったんだ……色々とおかしいだろ。

「先日、体の採寸は済ませたから、後は着せるだけなのですわ！」

「冗談じゃない！ こんな事に時間を費やしてられるか！ さっさと逃げるぞ！」

抱き締められた位で私の動きを封じる事は出来ない。首に回されたお姉ちゃんの両腕に私の手を突っ込んで隙間を作り、しゃがむ事でお姉ちゃんの拘束から抜け出す。そして一直線に居間から廊下に出る扉へと駆け出す。

しかし、扉を開けた先にはデューアが立ち塞がっていた。

「デューア、裏切るんですか!？」

お前は私の言う事を聞くべきじゃないのか!？」

「偶には親孝行をするもので御座いますよ?」

く……、仕方ない。少しだけ付き合おうか。

あれからもう一時間は経過しただろうか。衣装の着せ替えという行為に時間を費やす事を無理矢理させられている私だったが、楽しげに動き回っている筈のお母さんが時折表情を陰らせている事に気付いた。それに気づいた私はさらに注意して観察してみると、お姉ちゃんもお母さんの顔から笑顔が消えたのを見た瞬間、ほんの一瞬だが難しい表情をしていた。お母さん達も新聞の内容は気掛かりで仕方がないのではないのだろうか。ならばやめればいいのにと思っただけ、やめられない理由でもあるのか？

私の注意を逸らす為? そんな馬鹿な。私は証拠を残すようなへまはしていない……と、思う。どうだったかな。でも、私が行動を開始したのはついさっきだぞ。この世界の情報伝達の速度からしてたった四十分やそこら。その僅かな時間でお姉ちゃんに情報が伝わり数十着にも及ぶ衣服を用意し馬車に詰め込みここまで来れるか? 無理でしょ。

ならば、このイベントは当初から予定されていたと考えた方が無難だろう。妨害のタイミングがジャストミート過ぎる気もするが、

それは私の運が悪かったのかねえ。

となるとだ、このイベントは何が目的で行われているのかが分からない。純粹に衣服の着せ替えの為か？ まあ女性はそういうの好きだろうしそれが理由でもいいだろう。でもそれだったら、何故あんな深刻そうな表情を一瞬間見せたんだ？

ん？ そういえば、私は見た目が女性じゃないか。つまり、私も衣服の着せ替えに多大なる興味を持っていると思われていて、このイベントは私を喜ばせようとして企画されたのかもしれない。じゃあ、その思いを無下にするのも忍びない。

「アレシア、どうかした？」

「いえ、ちょっと疲れてきただけですよ」

お母さん、私の精神はそろそろ限界です。

「そうですね。もうすぐお昼になりますし、休憩に致しましょう」
休憩……この好機を逃してなるものか。

「何処行くのアレシア？」

「ちょっと私の部屋まで」

「昼食は私が持参してましてよ。すぐに戻りなさいアレシア」
「分かりました」

ばれたら元も子もないが時間に余裕がないのも事実。慎重かつ迅速に自室へと舞い戻った私はモノクルを「物質創造」。急いで上空を旋回して待機している偵察機からの情報をモノクルに収める。見ている時間はないが、取り敢えず情報自体は手に入った訳だ。よし、さっさと戻ろうか……でも少し気になる。ちょっとだけ覗いて見よう。偵察機は画像データとして現場の情報収集をして来たようだから、無難に最初から見してみるか。

んー、一枚目から順番に眺めてるけど、特に何も変わらない森林と丘陵の写真ばかり。まだこの地域の雪は融けきっていないんだ

な……ん？ この写真、ロミアア軍が映ってる。結構多い、一千人はいるんじゃないかな。それだけの人数の兵士達が陣地を作って何かと戦っている。何かの方も凄い数だ。兵士達とも引けを取っていない。むしろ若干何かの方が多いうた。この何か、以前私も戦った事がある。確か、一体ずつはそんなに強くはなかった。魔法さえ使えるならば、そこらの大人でも数人集まれば殺傷出来る位の強さでも、こいつらは群れを成して襲いかかってきた。数でゴリ押ししてこちら側の対処能力を飽和させ、着実に接近して来る嫌な戦法を取る。

でも、兵士達も同数ならばキツイだろうけど、ロミアア軍は質量共に充実しているから増援を呼べば撃退出来るでしょ。ん、ちよつと待てよ。ゲルマフィリオ州で死傷者数百万名とか聞いたな。という事はさ、もしかして、ロミアア軍の対処能力を超える数が侵攻しているんじゃない……？

二十八、先遣的な【物質創造】開始

「アレシア、遅いですわよ！」

突如として開かれる扉の音に反応してすかさずモノクルを消す。

「お姉ちゃん……」

「まずい。見られたか？」

「何をしていますの？ もう準備が出来ましてよ」

ふう、大丈夫だったようだ。それにしても、予想だにしていなかった情報を前に時間の経過を失念してしまっていたな。私があんまり遅いのでお姉ちゃんが私を呼びに来てしまった。

「すみません」

「ほら、行きますわよ」

私はお姉ちゃんに腕を取られて食事室まで引つ張り込まれた。食卓には様々な料理の詰まった大きな籠がいくつも並べられ、既にお母さんとディーウア、それにお祖父さんが着席して私達の到着を待っていた。

「凄いわよアレシア！ このお肉トルアンス産ですって！」

料理にはしゃいでいたお母さんだったが、私を見た途端表情を固くする。

「アレシア、どうかしたの？」

いけない、私の態度に問題があったらしい。だが、お母さんを巻き込む訳にはいかないんだ。何とか取り繕わないと。

「ちよつと昨日はしゃぎ過ぎちゃったのかもしれないね。少し疲れてるみたいです」

「大丈夫なの？」

う、真面目に心配してくれるお母さんに罪悪感が……しかし、仕

方ない。「実は州境でのロミア軍と魔物が交戦する画像データを取得して、それに衝撃を受けているんですよ。ははは」なんて言う訳がない。

「……はい」

少し肯定するのにためらってしまったが、何とか怪しまれる事は無くお母さんは信用してくれたようだ。

「昨日何かありましたの？」

ありがたい事に、上手くお姉ちゃんが話題を変えてくれる。

「近所に住んでいる友人達と遊んだんです」

それにしても、昨日までのほんんと生活出来ていたのが嘘のような気分。これからどうなるんだろう。

「羨ましいですわね。私達もいつか遊びに行きましょう」

そう出来れば私も嬉しい。でも、果たしてその願いは叶うのか。

「いいですね」

心から私はお姉ちゃんの提案に賛成した。

だが正直な所、私は食事なんてほっぴり出して当該地域の魔獣群についての情報収集並びに従事し、必要とあれば爆撃しに行きたい。至急片付けなければならぬ仕事を抱えているのに、子供の遊びに付き合わなくてはならないお父さんみたいな気分。子供の遊びに付き合うのは楽しいが、仕事の事が頭を放れず素直に楽しむ事が出来ない。仕事さえなければとため息を付く所も私の心境と似ている。

だが、例えとして挙げたお父さんと異なる点は下手に動く事態を悪化させる恐れがあるという事。ここは慎重に行動しなくてはならない。まずは偵察機から得た情報を整理してこの状況が何を示しているかを判断しよう。だからお願いだ。さっさと私を自由にしてくれ。

私としては普段通りに行動していたつもりだったのだが、どうや

ら周りからは疲労しているのに無理していると判断されたい。
今の私は自室のベッドに寝かされている。

「ほら、しっかり休みなさい」

お母さんが横になった私にシーツを掛けてくれる。

「はい」

「全く。だらしないですわね」

お母さんの幾分後ろに立つお姉ちゃんは不満そうだ。当然だろう、わざわざ訪ねて来てくれたのに私がこの様なのだから。

「すみません」

本当に申し訳ない。今抱えている問題が解決された時、今日の埋め合わせをしたいと思う。

「今日は帰りますわ。次来る時までにしっかり体を休めなさい……無理は禁物ですよ？」

仏頂面のお姉ちゃんだけど、私を心配してくれているようだ。嬉しいんだけど、これが嘘なので心に刺さる。

「勿論です。今日は来てくれて嬉しかったです」

ただ、タイミングが良ければもっと嬉しかったんだがね。

「そう?」

「はい」

来てくれた事自体は本当に嬉しいよ。

「では、御機嫌よう」

「はい」

「さあ、少し眠るといいわ」

「はい」

「お母さんお皿洗って来るけど、すぐ戻るから」

そう言い残してお母さんは部屋を出て行った。

「はい」

時間は今しかない。モノクルを【物質創造】して、入手した情報の解析を開始……よし、終わった。何々、長さ約五百キロにも及ぶ州境線上に展開しているロミリア軍戦力はおよそ八万六千。対して

群がる魔獣はおよそ十二万。ふむ、展開地域の広大さ故、軍団規模で丸々交戦している部隊もあれば、魔獣の監視の為戦闘に参加していない部隊もある。ただ幸いにも、いや兵士達にとつては幸いではないだろうが、魔獣は人間目掛けて動いているようだ。兵士を餌と判断し、わざわざ兵士の多くいる場所目掛けて突撃しているようだから、防衛線からの取りこぼしはそこまで多くない。

主な戦場は二つにまで絞れそうだ。この主戦場においては”火力の鬼”と呼ばれている第二魔法軍団が、爆炎のカーテンを歩兵部隊と魔物の群れの間にくる事で大幅に魔物の数を削って、ロミリア軍側が優位に戦況を進めている。画像から判断するに、第二魔法軍団は数キロ四方を一回で制圧しているっぽい。恐ろしい火力だ、地球にある最新鋭の兵器を備えた軍隊だって中々真似出来ないだろう。しかし、ロミリア軍側がこの優位を保ち続ける事は出来ないだろうね。第二魔法軍団がロミリア軍随一の火力投射能力を持っているとしても、彼らも人間だ。いつかは歩兵への支援が出来なくなる時が来る。そうなった時、防衛線が持ちこたえられずとは到底思えない。私からも、ロミリア軍に戦局を傾かせる事が出来るだけの早急かつ強大な火力支援をしなくてはならない。もししなかつた場合、他の地域にも甚大なる被害が発生する。時間はほとんどない。お母さんが皿洗いをして戻るまで……いや、ディーウアが手伝っているからもう戻ってくるかもしれないぞ。

州境防衛に死力を懸けるロミリア軍兵士達の為に私ができる事は何だ？

弾道ミサイルに核兵器並みの破壊力を持つN2弾頭を搭載して叩き込むか？ 駄目だ、座標が分からないから命中精度に期待出来ない。偵察機の航行データから指定座標の数メートル以内に投下は可能だが、その程度の命中精度では下手すればロミリア軍側に被害が及びかねない。とすれば、N2を使うならば爆撃機に搭載するし

かないか？ しかし爆撃機じゃ間に合うか分からない。いや、命中精度が数百メートル程度でも後方に叩き込んで、魔物の混乱を誘えばいい。そうして稼いだ時間でどうにか爆撃機を送り込む。

まずい、誰かが階段を上る音だ！

私はベッドから跳ね起きて窓を開き、魔獣目掛けてパーシング弾道ミサイルとB-1爆撃機、それにU-2偵察機を【物質創造】しロミリア軍支援に送り込んだ。

私がモノクルを解除した次の瞬間、お母さんが扉を開き室内に入ってきた。

「何しているのアレシア？」

変な目で見られるのも仕方ない。今の私は疲れてベッドに横になっっているべきなのに、窓から顔を突き出しているのだから。

「空気の入れ替えを……」

我ながら苦しい言い訳だ。

「今日はもうしたでしょう？」

お母さんにいぶかしげな視線で見られているが、もうこの言い訳で押し通すしかない。

「でも入れ替え足りなかつたんですよ」

感情論に持つていけばどうにかならないだろうか。

「十分よ。寒いんだから閉めなさい」

お母さんは、肩をいからしてずんずんと私に近づいてきてぴしゃりと窓を閉めてしまった。

「分かりました」

でも、間に合ったから良しとしよう。

さて、私の火力支援は効果があるだろうか。

二十九、ディーウア出撃

お母さんに見守られながらベッドに横になる私。頭の中では州境の戦闘の事ばかり考えている。私が投入した戦力は役に立っただろうか。あれでも結構強力だとは思うけれど、敵が敵だけに戦果を直接確かめたい。ああもう、じれつたいなあ。私自身が行けば万事解決なのにこんな所で何油売っているんだ。

早急に対策を講じないとならないというのに……もう駄目だ、我慢出来ない。

「アレシア？」

思わず目をかっぴらいてシーツをはねのけた私に、お母さんの声が耳に入る。

この状況下で無駄な時間を費やすのには耐えられない。でも、ここで私が飛び出したら家族に秘匿していた私の能力が知られてしまう。そうなれば、どうなるだろうか。

私の持つ力は、人が持つには大きすぎる。家族のみんなは私を人間として見てくれるだろうか。それとも怪物として見るようになるだろうか。

問題はそれだけに止まらない。何らかの権力が私を知ったらどうするだろう。家族を人質に利用される事になるかもしれない。いや、私を利用するのはリスクが高いと判断して殺されるか？

考えれば考える程、私自身が出るのは難しいと判断せざるを得ない。

だがしかし、私にはディーウアがいるのである。自立判断すら可能なAIを搭載し、何故か人型に変体出来るディーウアなら前線に行つて的確な指揮を執れるだろう。ディーウアに州境へ出撃するよ

う頼んでこよう。

「私、お手洗いに行つてきます」

そうと決まれば、早速行動だ。

「気を付けるのよ」

「はい」

お母さんの温かい声を背に浴びて自室を出た後、ディーウアの魔力を探る。ん、どうやら一階にいるようだ。

階段を下りると、廊下を掃除するディーウアの姿が見える。箒で大きな汚れを掃き出している最中のようだ。私の足音に気付いたのか、こちらに笑顔で顔を向けるディーウア。その笑顔は私を見た途端弾け、ディーウアは眉間にしわを寄せる。

「御主人様、どうかなされましたか？」

私は掃除をしているディーウアに近寄り、前置きなしに話を切り出す。

「ディーウア、時間がないから手短に行く。今からモノクルの情報を送るからそれを元に魔物を撃滅して来てくれないか」

こう言い終えるなり、有無を言わずモノクルを【物質創造】してディーウアへ情報を与える。

だが、ディーウアは州境に出撃してくれるのだろうか。今の日常を楽しんでいるディーウアには酷な仕打ちだろうし。もしかしたら断られるかもな。

「分かりました。御主人様」

私が案じていたのを恥じ入らせる位の即答を頂いた。何てありがたい。

「ではお祖父様とお母様に挨拶後、現地に向かわせて頂きます」

「私が行くべきなんだろうが、押し付けてすまない」

「宜しいので御座います。これが本来の私の務めで御座いますから私に向けて、清々しい笑顔を見せてくれるディーウア。そんな顔するなよ、お前を戦線に投入する事に引け目を感じちゃうじゃないか。

「本当にいいのか？ 無理はしなくてもいい。他にやりようはある」
「ですが、私を投入した方が確実に御座います。安心して下さいませ。私の心配は御無用で御座います」

確かにディーウアの言う事はもつともだ。極端な話、ディーウアが粉々に撃破されても私の膨大な魔力を以てすれば簡単に再生させる事が可能だ。

「では、行って参ります」

私が、自身の良心の為にディーウアの決意を鈍らせるような台詞を量産しようとするのをこれまた良心によって躊躇ちゅうちゆしている間に、ディーウアはすすすつと動き回ってお祖父さんとお母さんに挨拶を終えてしまっていた。仕事の早い奴だよ、本当に。

「それでは、しばらくお暇させて頂きます」

玄関に立ち、ぺこりと頭を下げるディーウア。

「いつてらっしやい、ディーウアちゃん」

見送りに一階に下りてきたお母さんの背中中しゅんじゅうで、どうしたものとと逡巡する私。何とディーウアに声を掛けるべきだろうか？ 何か上手い言葉はないものだろうか。

ああもう、そうこうしている間にディーウアが行ってしまっ！

何を喋っても構わないから、口よ動け！

「ディーウア！」

それで出たのが名前だけかい……まあいい、出発しようと思中を向けていたディーウアを振り向かせる事には成功したのだ。後はことういっ場面ばめんに相応しい台詞を口走っちゃえばいい。さあ、思うがままに声帯を震わせよう。

「あの、その、頑張ってください！」

うわあ、やってしまった……”頑張れっ”て、何て陳腐で無責任な台詞なんだ。もう、私の馬鹿馬鹿馬鹿！

「はい！ 行って参ります！」

それにも関わらず、ディーウアってば、とびっきりの笑顔で飛び出ていきやがった……無事でいてくれよ、ディーウア。

三十、三人兄妹の来訪

デューアがゲルマフィリオ州へ向けて発つたのを見送った私は、お母さんに食事室へ誘われお茶を嗜たしなんでいた。

お茶にも色々と種類があるのだろうが、白い陶製マグカップに注がれたこの空色の液体は何という種類なのだろうか。よく分からないが、ほのかに感じる爽やかな酸味は中々悪くない。

「デューアちゃん、楽しんでるかしら？」

隣に座るお母さんがカップを両手に持ちながらぼつりと話す。どうやらデューアは観光を理由に外出したらしい。

「そうだといいですね……」

実際は魔物との戦いだからなあ。うん、後で爆撃機を追加で送っておこう。それこそ十二万の魔物を根こそぎ焼き払える位。少しはデューアの負担を減らしてやらないと、デューアの主人としての面目が立たない。

お母さんと二人つきりではんわかとお茶を啜すする。何て素晴らしい時間なのだろうか。

ゲルマフィリオ州では大変な事になってるのに、私だけこんな幸せでいいのかねえ。というか、お姉ちゃんも来訪するのが今だったら大歓迎だったのだが。つくづくタイミングの悪い人だ。

と、誰かが来たみたいだ。玄関の扉がガンガン叩かれている音が響いてくる。

「あら、お客さんみたい。見てくるわ」

「はい」

お母さんが食事室から出ていくのを眺めつつマグカップに口を付け、中身を含む。美味しい。

お母さんが玄関の扉を開いた音が耳に届くと共に、ばたばたと駆け足で誰かが食事室に接近する音も聞こえてくる。何だ？ またこそ近所さんの誰かか？

「アレシアお姉ちゃんっ！」

扉を無造作に叩き開けて食事室に入ってきたのは、ラインラ君の妹のチャイイちゃんだった。

「チャイイちゃんですよね？ どうしてここに？」

「お兄ちゃんたちに連れてきてもらったのーっ！」

私の質問に答えると同時に私目掛けて跳躍してくるチャイイちゃん。まさか幼い子供を床に激突させる訳にもいかない。即座にマグカップを食卓に置き、チャイイちゃんを受け止めた。が、私の小さな体では幼女とはいえチャイイちゃんを受け止めた場合その運動エネルギーを受けきれぬ筈もなく、椅子から転げ落ちてしまった。運の悪い事に私は物凄く長い髪の毛を有しているのでそれが衝撃を緩和してくれ事なきを得たのだが。

「女神様だいじょーぶ!？」

「はい、大丈夫ですよ。ただ女神様はやめて下さい」

「何があつたの!？」

椅子が倒れてうるさかつたのかな？ お母さんを先頭に、ラインラ君とルール君達が開きっぱなしの扉口から慌てて入ってくる。

慌てて入って来たが、私とチャイイちゃんが抱き合ってるのを見てお母さんが呆れたような目線で私達を見て一言。

「何をしてるの？」

「いや、何と云えばいいのでしょうか。チャイイちゃんが少しはしやぎすぎちゃったみたいですね」

脱力するお母さんに対して、ラインラ君は頭をかつかさせて私達に近づいてくる。

「オレが連れて来てやったのに勝手な行動すんじゃねえ！」

「わーん！ 女神様助けてーっ！」

ラインラ君の剣幕に怖がって強くくっついてくるチャイイちゃん。

仕方ない、仲裁に入るか。

「まあまあ、私もチャイちゃんも怪我もしてませんし許してあげてくれませんか。ただ女神様はやめて下さい」

「ちっ」

何とか舌打ちだけで我慢してくれたラインラ君。昔なら迷わず鉄拳制裁だったろうに、進歩したなあ。

「それで、今日はどういう用件ですか？」

「なんにもねーよ」

え？　じゃあどうして来たんだ？

「あのねあのね！　ワタシズーッと女神様に会いたかったんだよ！　私の胸元に顔を埋めて何処か恍惚とした表情を浮かべているチャイちゃんをラインラ君が苦々しげに見つめているのに気付く。」

「もしかして、チャイちゃんを連れて来ただけですか？　あと女神様はやめて下さい」

「……ああ、そーだよ。悪いか？」

「ははは……」

それは御愁傷様だったね。

「まあまあ。せつかく来たんだから、お茶とお菓子でもどうかしら？」

お母さんがラインラ君達にお菓子を出してくれるようだが、ラインラ君は苦い表情を崩そうとしない。

「ありがとうございます！」

だがルール君がその申し出を受けたので、お母さんは少し待っててねと言いついて台所に消えてしまった。

「なーにありがとうございます、だよ。お前アレシアと一緒にいる時口調が変だぞ？」

え、そうなの？　というか、いつにもましてやさぐれているならラインラ君。

「なっ、そ、そんな……」

顔を真っ赤にして抗議するルール君。おやあ？　何か動揺する所

があるようすな。

「んー？　もしかしてルール、まさか……？」

「兄ちゃん！」

ラインラ君がニタニタと嫌らしい笑みを浮かべるのを見たルール君は赤かった顔を一層赤くしてラインラ君のみぞおちに頭を突っ込ませた。クリーンヒット！　ラインラ君は片膝を付いた！　しかしラインラ君歯を食いしばり、ルール君を突き飛ばす。体勢を崩したルール君は一直線に私に向かって倒れてくる……ってええ！？

私今チャイちゃんを抱えているんだけどな。でも、私がルール君をキャッチしてやらないと頭から床に衝突してしまいそうだ。

チャイちゃんを胸元から右脇に移し替え、自由になった左手でルール君の背中を受け止め……あー無理だわ。左手痛い。左手を引っ込め、代わりに胸元でルール君の頭を受け止めた。

「ルール君、大丈夫ですか？」

「はい！」

良かった、何ともないみたい。

「大丈夫で」

あれ？　私と目が合った後、私の胸元を見た瞬間に動きが停止してしまっただぞ。

「あの、ルール君？」

「ルール兄ちゃんどいて！」

非道にもチャイちゃんはルール君を突き飛ばし再度私の胸元に戻る。いいのかわ、チャイちゃん。自分の兄だろ……。というかわ、ルール君は無事なのか？　私の左手が未だに少し痺れてる位だから、意外に私が時間差で止めを刺してしまっただけかもしれない。

「ラインラ君、元々あなたがルール君にちょっかいかけたんでしよう。どうにかして下さいよ」

とは言えラインラ君が諸悪の根源だよな。

「オレのせいじゃねえだろ」

何を言う。

「ラインラ君が下卑た笑いを浮かべて何か言おうとしなければこんな事にはなりませんでした」

あ、もしかして自覚はしてる？　ラインラ君は無言で私の元まで来てルール君の頭を持ち上げ揺すり始める。

「おらっ、起きろ！」

ああああ、そんな乱暴に扱うなよ。気絶してるんだぞ。

「ちょっと、ラインラ君。もう少し丁寧に扱いましょうよ」

「うっせ！」

「しかしですねえ、私が背骨に直接打撃を当てて気絶したんですから」

しまった口が滑った。案の定ラインラ君がすっごい睨んできてる。

「それ、本気で言ってるのか？」

ん？

「あ、いや……」

どうしようか考えるが、そうだな、ここは私に非があるのだし素直に謝った方がいいかな。

「あら？　皆して何をしているの？」

お母さんがトレイに色々乗つけて台所から戻ってくる。

「こいつ寝かせてーんだけど場所ねーかな？」

「ルール君どうかしたの？」

「……」

何故無言で私を見る。そりゃ私も須すべらく悪いだろうが、明らかにお前にも責任あるだろ。

「分かったわ。隣の今に寝かせましよう」

お母さんもどうして納得するんだよ。私ってお母さんにどう思われているんだ？　頻繁に人を気絶させるような危ない人だとも思われてやしないだろうか。でも今回は全部が全部私が悪くはないと思うんだ。いやしかし、私の周りで頻繁に人が気絶したりするのは事実なんだよね。これは異世界だからこそだろうな。地球じゃ気絶したりしたら一大事だが、ここじゃ皆大して驚かない。

お母さんとラインラ君に抱かれたルール君を追い、私はチャイちゃんを抱き締め居間に入る。ルール君はソファに寝かされているが、何だかその寝顔は幸せそうだ。

「ルール君の具合はどうですか？」

「大丈夫よ、すぐ良くなるわ」

「そうですか」

それならば一安心だ。

「ルール君が起きるのを待ちながらお茶にしましょう」

お母さんが食事室に置いてきたお菓子とかが乗ったトレイを取りに行った。

三十一、州境派遣部隊第三梯団の攻撃

ルール君が目覚めてからしばらく居間にてお茶を飲んだりお菓子を食べたりしていたが、ラインラ君が突然外に遊びに行くと言出し出掛けてしまった。ルール君も乗り気じゃなかったし私を誘ってもくれたのだが、疲れているってお母さんに嘘付いてるしチャイちゃんにずーっとべたべたくっつかれて事実疲れてたので私は辞退させて貰った。ルール君は強引に引っ張って行かれてしまったが。

にしても、戦闘時には魔力で身体能力無理矢理向上させてたのは不味かったな。五歳児を常時抱っこしてるだけで体力がガリガリ削られてく。

「アレシア、やっぱり寝てたらどう？」

私の疲労は目に見える位ひどいのか、お母さんから心配されてしまっ。

「そうさせて貰います」

横になれば、チャイちゃんの重さも苦にならないだろう。それ以前に、チャイちゃんが離れてくれるだけでもいいのだがね。

「ワタシもいつしよにおねんねする！」

どうにもそうはいかないらしい。決意に満ちた表情で必死に主張して来るチャイちゃん。

別に大声で叫ばなくとも一緒に寝る位構わないというのに。

「じゃ、チャイちゃんもおねんねしましょうか」

寝てくれれば、隙を付いて部隊を送れるかもしれないし。と、黒い考えも少しあったり。

「はいー！」

元気のいい返事だ。この位の年齢の時って生きるのが楽そうだ。

羨ましくなるね。

「お母さんは家事をこなさなくちゃならないからついてあげられないけれど、ちゃんとするのよ」

こうしてお母さんも都合よく席を外し、自室にてチャーイちゃんと共にベッドで横になったのだが、少し前世とでも言うべき地球での事を思い出す。

前世でも自分が幼少の頃、妹の添い寝をしてあげた事があったっけ。もうあつちには行けないと思うと少し悲しくなるね。

まあ、今更戻った所でどうなるのか考えたくもないが。結構年月経ってるから皆年を取ってるのにも関わらず、私だけ小っちゃくなっておまけに性別入れ替わってるんだからなあ。

おっといけない。感傷に浸ってないでさっさとチャーイちゃんと寝かしつけよう。そうすればゲルマフィリオ州に飽和爆撃出来るだけの航空戦力を叩き込んでやれる。

チャーイちゃんの添い寝をしつつ、体感時間にして十分程が経過する。

「えへへへ」

にこにこしながらずーっとすりすり頬をすり寄せてくるチャーイちゃん。うーん。中々眠らないなあ。

「チャーイちゃんは眠くはありませんか？」

と、私が問うと

「寝てられないもん！」

との返事が帰って来た。

「それはどうしてですか？」

寝てくれよ。

「だって、お姉ちゃんと会ったの久し振りなんだもん……」

そう言い終えるとまたすり寄ってくるチャーイちゃん。

「そうですかあ」

こう慕われると悪い気はしないのだが、いかんせん時期が悪い。

州境に投入した中距離弾道ミサイル二発と爆撃機十二機だけでも単純計算で 致死面積（そこにいけば確実にお陀仏）十平方キロ（東京都台東区程）はある。危害面積（そこにいるとあの世に逝くかもよ）ならば一気に広がり二百平方（アメリカ合衆国首都ワシントンDC程）キロだ。

地球のような一部地域に人口や構造物が集中しているのならば十分過ぎる戦力なのだが、州境は五百キロもの長さがあり主戦場は二か所に絞られているとはいえロミア軍はその州境線上の至る範囲に展開している事もあって魔物を全滅させられるかと問われると自信は持てない。

さっさと増援をディーウアに送ってやりたいなあ。

よし、こうなったら出来るだけチャーイちゃんに尽くして満足させてやろう。そうすればまどろむ位はしてくれるだろう。

「じゃあチャーイちゃん。横になりながらなんですが、したい事を言ってみて下さいよ。出来る事ならさせて貰います」

「ほんと!？」

私の申し出は喜ばれたようで、チャーイちゃんは目を光り輝かせ始めた。

「ええ。勿論」

「ほんとにほんと!？」

「はい」

そんなに喜ばれるとこつちも気分が良くなる。でも、ここまで喜ばれる事を言ったつもりはなかったのだけれど。

「じゃあね! じゃあね! お体触らせて!」

「……」

うわあ、そう来るのかあ……。

「だめ?」

「……いい、と思いますけど……何故触りたいんですか?」

「あのねあのね! 女神様のお肌すべすべしててね、気持ちいいの

！」

「そうですか……」

私もまだ若い肉体だから、肌はそれなりに綺麗なのだろうけど、絶対チャーイちゃん自身の肌の方が良好な状態を保っていると思うのだが。

「だめ？」

まあ、大した事でもないか。体を触ると聞くと卑猥だが、実質は肌を触らせてという事だし。

「いいですよ」

「やったー！」

喜びの雄叫びを上げたチャーイちゃんは私に絡ませていた両腕を離し万歳の格好をして、指をワキワキさせる。

「ちよつと待って下さい！」

だが私は、タダでは動かない！

「？」

万歳の格好のまま動きが止まるチャーイちゃん。

「その代わりに、条件があります」

「じょーけん？」

首をかしげるチャーイちゃんに、条件を投げかける。

「はい。目をつむってゆっくり十秒数えてくれませんか？」

「何で？」

「少し覚悟がいるんです」

「どうだ？ 乗ってくれるか？」

「んー……いいよー！」

少し頭を悩ませていたようだが、割かし簡単に承諾してくれた。

「ありがとうございます」

「じゃあ、行くよー」

両手で目を隠し、準備万端なチャーイちゃんに私は始めてくれと促す。

「いーち……にーい……さーん……」

よし、今からが勝負だ。ベッドの上をもそもそと進んで素早く窓を開き、爆撃機編隊を【物質創造】。魔力をあまり大きく使うとお母さんにはれるかもしれないので、五派に分けて十二機ずつ州境へと出撃させる。

「よーん……ごーお……ろーく……」

爆撃機だけだと、細かな支援が出来ないだろう。機械兵を満載した上陸艇も三隻程送るか。上陸艇と言っても海上を移動する奴ではなく宇宙空間から惑星に上陸する時に使う物なので空を飛ぶ事も可能だ。

「なーな……はーち……きゅーう……」

さて、四種類しか【物質創造】出来ない制限の中、爆撃機に上陸艇を【物質創造】した訳だが、まだ二種類の余裕がある。後何か足りない物はあるかな？ いや、大丈夫だろう。上陸艇には機械兵以外に火炮や戦車、工兵機材とかも入ってるし。

「じゅー！ もーいーかい？」

「もーいーです」

頑張れ、デューア。

三十二、アーザ君と二人の学友

「入っていいかしら」

ノックと共に聞こえてくるお母さんの声。

「……ええ！ いいですよ！」

私は息絶え絶えに返答を叫ぶ。

「アレシア。アーザ君がお友達連れて来てくれたわよ。どうしましようか……それは何をしているのかしら？」

お母さんは私の服の中に頭を突っ込んでいるチャーイちゃんを見て、凝視しながら質問してきた。チャーイちゃんの両手は私の背中をすりすりしている。

この状況を、見られた！？

うう……この場から消えてしまいたい。

「女神様をたんのーしてたの！」

何を言っているんだこの少女は！？ 答えるんじゃない！

「そ、そうなの。良かったわね」

お母さん完全に引いてるよ。

私がおかしく思われるだろうが……少女趣味とか流言流布されたら社会的に終わる……。

「わ、私なら大丈夫です。会いましょう」

いや、お母さんがそんな事するとは思えない。ここはさっさと話題を変えて気を逸らしてしまおう。

「そう？ 分かったわ」

お母さんが階下に下りていく足音を確認し、少し冷静になった。

「チャーイちゃん。今日はもうこれで終わりにしましょう」

「え〜」

服の中からいかにも嫌そうな声がするが、無視無視。

「また今度という事で」

強引にチャイイちゃんを引きずり出す。

「……約束ね」

「は、はい。それより、横になって出迎えるのもなんですし身を起
きましよう」

ムスツと頬をちょっと膨らますチャイイちゃんに、体裁が悪いの
でベッドに腰掛けるよう促す。

「うん」

「入るよ。いいかな？」

どたどたと幾人かが階段を上る音が聞こえて来たかと思うと、扉
の向こうからアーザス君の遠慮がちな声が響いて来る。

「歓迎しますよ」

「こんにちは、アレシアちゃん」

扉を開けて私の部屋に入ってくるアーザス君。私を見るなり爽や
かな笑顔で挨拶をしてくる。

「こんにちは、アーザス君」

「失礼します」

「失礼します」

アーザス君の後から入って来たのは同じ年頃の二人の子供。

一人は女の子でとび色の髪を腰の辺りまで長く伸ばして水色のワ
ンピースを着ている。幼いながらも目鼻立ちのくっきりした美しい
顔で口元に清純な笑みをたたえており、優等生として男子の憧れに
なっといういなイメージ。

もう一人は男の子で、顔は綺麗な造りなのだが、薄い茶色の髪を
ぼさぼさにしてているのとほがらかな笑みを口元にたたえている事で
愛嬌があるように見える。

「この方々は？」

「紹介するよ、こっちはイグヴァ」

「よろしく、アレシアちゃん」

男の子の方はイグヴァというそうだ。にしても、イメージ通りのんびりとした口調で話すんだなあ。

「彼女は又アム」

「よろしくね、アレシアちゃん。ところで、その隣の子は誰なのかしら？」

あんたもイメージ通りの反応だな。というか、なにこの美形三人衆。嫌味なのか？

「ワタシ、チャーイだよ」

よくよく見るとベッドに腰掛け足をプラプラさせているチャーイちゃんも美しいと形容は出来ないが、茶髪がふわっと波打ってる感じ……ソバージュとかそんな髪形がよく似合ってる可愛らしい。

「近所の子で、遊びに来ていたんです」

チャーイちゃんが名前しか説明しなかったので、私からも軽く事情説明させて貰う。

「チャーイちゃんもボク達と遊ぶかな？」

ふわふわした笑顔でチャーイちゃんに微笑みかけながら、イグヴァ君が遊びに誘いかける。

「遊ぶ！」

「でも、アレシアちゃん体調が悪いんだってね。外では遊べないね。アーザス君無理して私に合わせようとしなくていいよ。」

「彼女の体調が悪いのが悪いけど、仕方ないわ。今日は室内で出来る遊びにしましょうよ」

「そうして貰えれば助かるね。」

「そうだね、そうしよう」

新たに知り合ったイグヴァ君と又アイちゃんを加え、皆で室内で出来る遊戯で時間を潰しているとあっという間に日が傾いていた。

「いけない、そろそろ帰らないと」

アーザス君が慌ててそう言う。

「そうね。では帰らせて貰いましょう」

又アムちゃんもそれに賛同。

あれ。そういやチャイイちゃんはどうなるのだろう。

「チャイイちゃんはどうするんです?」

「一人で帰るよ」

ここロミリアは地球の日本には及ばないが特別治安が悪い訳でもない。だが、それでも幼児が日暮れに出歩いて大丈夫なのかね。

「それはいけないね。アーザス、お家まで届けてあげようよ」

私と同じ思いをイグヴァ君も抱いたようだ。

「そうだね」

アーザス君も付いて行くようだし、これなら安心だろう。

「では、玄関までお見送りさせて貰います」

「悪いよ」

「いえ、私を訪ねて来て貰ったのですからそれ位はさせて下さい」

「そっか。じゃあ行こう」

アーザス君が筆頭に、皆でぞろぞろと歩き始める。

「あ、皆は先に行つて。ワタシとアレシアちゃんは女同士のお話があるから」

どんな用事が私にあるのだろう? 又アイちゃんに引き留められた。

「なら下で待つてるよ」

皆が階下に下りた所を見計らって、私から会話を切り出す。

「えーと、何でしょうか?」

「死ね」

ん?

「はい? 失礼ですが、聞き間違えかもしれません。もう一度述べて頂けませんか?」

「死ねば良かったのに、何で帰ってきてんのよ」

さつきまでの清纯そうな少女は成りを潜め、現在の彼女からは負の感情が満ち溢れている。何だ? まさか、魔族の残党!?

だとすれば、下手な動きは出来ない。彼らの力を以てすればこの

家もろとも私を攻撃する事が可能なのだ。私を傷付けられるかは分からないが、階下のアーザス君やお母さんを無傷で救えるか……。くっ、頭だけ潰して満足していた私が愚かだった。

「はあ」

ともかくここはまず、敵意を見せず無害な存在に徹しよう。何とか隙を付いて出来たら捕獲、最悪殺傷しなくてはならない。油断を誘う為に、気のない返事を返しておく。

「アーザスにはもう近付かないで」

ん？ 話がおかしくなってきたぞ。

「成る程」

「分かったわね」

何だか知らないが、アーザス君と私を会わせない事が目的なのか？

「前向きに検討させて頂きます」

じゃあ、魔族ではないのか？ どうなんだろう？

うーん、私をものすごい形相で睨んでいるけど魔力は確認できないなあ。魔族ではないと考えて動いておいた方がいいな。もし一般人だったら後々厄介だ。

「……今日はこの位にしてあげるけど、もし近付いたらどうなるか分かるわね？」

「はあ」

これって、どういう意味なんだ？

「その態度ムカつくわ。やめなさい」

「善処します」

もしかして、ホの字って奴？

「あんた馬鹿にしてんのっ!？」

おおっと。私が適当に返答していたせいか、張り手をかましてきやがった。

又アイちゃんが振り上げた右手。うーん、迫力に欠けるなあ。

少し派手にしようと、回避で思いつき後ろに跳躍してベッドに着地してみる。

もふ。あーもう寝てしまいたい。

でもこの修羅場っぽいのを解決しないと。面倒だなあ。

「駄目ですよ大声あげちゃ。アーザ君に本性ばれますよ?」

最初に、追撃にずんずん近寄ってくる又アイちゃんへ牽制の意味を込めた言葉を発する。

「……とにかく! アーザとはもう会うんじゃないわよ!」

やっぱ、アーザ君にはいい格好しておきたいようだね。又アイちゃんは足を止めて捨て台詞を吐き、くるっと背を向けて立ち去ろうとした。

「あ。もしかしてアーザ君を好いているんですか?」

そこへ確認の一言を発射。

「……言わないで恥ずかしい! もう! アーザは私が狙ってるんだから、あんたがいたら困るのよ!」

あるえ。もしかして、この子くみ与し易い?

「私もアーザ君を兄のように慕ってますが、あなたもそういう感情をお持ちなんですか。仲間ですね!」

私は微笑を口元に浮かべながら仲間宣言を投射! この餌にかっかるっかな?」

「あんたと一緒にしないで! って、え? あんた……こほん、あなたはアーザ君の恋人じゃないのかしら?」

私の餌に見事掛かった! 又アイちゃんが顔を真っ赤にして路線修正に入ろうとした!

「恋人? ははは、何ですそれ? あいつを恋人ってないですよ。ないない!」

ここで最後の一押し。少しアーザ君に失礼な気がするが、これ位言わないと止めにならない。

「そんな事ないわ! アーザはとっても優しいし、頼りになるし、いてくれると心が温かくなるし……アーザを馬鹿にするとワタシが許さないわよ!」

恐ろしいまでの入れ食い。意外と大物かもしれない。

「すみません。でも、さっきのは私の意見なんでね。あなたがどう思ってもそれはあなたの自由ですし、おおいにやってくれて構いません」

あ、これは失点一か？

「そうなの……ごめんなさい！」

んんん？ 何か流れが更におかしくなってはしないか？

「何ですか唐突に？」

性悪女みたいな態度を一変させ、今この部屋に人が入って来たら私が悪役と思われかねない程完璧な”可哀想な薄幸の美少女”に見える。

「実は、アーザスと仲良く話してるあなたを見てアーザスを取られるんじゃないかって思っちゃったの。今まではアーザスに一番近かったのはワタシで、学校でもワタシとアーザスの間はウワサになってた。ワタシがアーザスの彼女だって浮かれてた。でも今日あなたに会ってその自信がなくなっちゃって……焦って焦って、気付いたら脅迫してた。何でこんな事しちゃったのかしらワタシ」

要約すると、私を恋敵と誤認して攻撃したって事ね。気が付いたら体が勝手に動いていたって奴ね。

「本当に許せない事をしちゃったって思っているわ。ごめんなさい！」

おいおい、泣き出すなよ。ますます私が悪役然としてきた。

「あなたの話を聞く限り、それだけアーザス君を愛しているという事が分かりました。兄のようなアーザス君にこんな素敵な彼女がいてくれると、私も嬉しいです」

日本人的技法。”とりあえずおだてておく”を発動。

ここで勝てると思って責め立てたら逆切れされて、また面倒な事になるかもしれない。それなら、なあなあで済ませたくなるのが普通だ。

「アレシアちゃん……こんなワタシにそんな言葉を掛けてくれるのね」

泣きながら、抱き着いてきた又アイちゃん。あんたも怒ったり泣いたり忙しい奴だ。演技してるんじゃないかと思っちゃうね。それでも、どうにか厄介事は回避出来たようだから一安心。

「ん……アレシアちゃん気持ちいい」
ん？

「ふああ……」
頬を擦り付けてくる又アイちゃん。今日チャーイちゃんが私にくっ付いていた時と同じ表情を浮かべている。

「ふふふっ。アーザスからアレシアに鞍替えしようかしら」

状況が二転三転ってレベルじゃないぞ！？ 何なんだよもう！

「あ、あのっ。皆さんを待たせてます。早く下に行きましょう」

これ以上の接触は危険だ。主導権を奪われそう。

「決めた。ワタシ泊まらせていただくわ」

何でそうなるんだ！？

「駄目です！ 連絡しないとご両親が心配しますよ」

「そういうのに敵しい子、嫌いじゃないわ」

ええい！ 私の頬に妖艶な目つきをしながら手で撫でるんじゃないわい！

「いいから、さっさと下に行きますよ！」

私の頬を両手で撫でる為に両腕の拘束を解いたのは愚行だったな。後ろにステップを踏んで一端距離を取る。

「あ、待ちなさい」

私に掴みかかってもう遅い。

私は【身体強化】の魔法で肉体を強化し、オリンピック選手顔負けの速度で一気に自室を飛び出し階段を駆け下りた。

玄関には、私らを待っていたアーザス君、チャーイちゃん、イグヴァ君に加えてお母さんが立っていた。

「どうしたのアレシアちゃん走ったりして」

「ははは……上で少々愉快なお話をしましてね」

ほんと、愉快極まりなかったよ。

「？」

「あー、又アイちゃんまで走ってきた」

「イグヴァ君の間延びした口調が精神に優しい。癒される。」

「はあ……はあ……ま、待ってアレシアあ」

「きやがった。ていうか、息を切らす程何をしてたんだ？ 私の部

屋から廊下を少し通って階段を下りてもそんな距離ないだろうに。」

「アレシアお友達を置いてきちゃ駄目でしょ！」

「すみません」

「お母さんそりゃ理不尽だ。あの子普通じゃありませんぜ。」

「さ、皆。急いで帰らないといけないわ」

「お母さんが一人先に進んで玄関の扉を開き、皆に帰宅を促す。

確かにそうだね。もう日が随分低い所にある。」

「今日はありがとうございました」

「ありがとうございました」

「扉を支えるお母さんにアーザス君、続いてイグヴァ君が感謝を述べる。感心だ、教育が行き届いているんだなあ。」

「ありがとうございました！」

「二人に手を繋いで貰ってるチャーイちゃんも見習って挨拶します。」

「あ、ありが……とうございました」

「又アイちゃんはまだ息が整っていないみたい。」

「今日は来てくれてありがとうね。アレシアも喜んでるわ」

「じゃあねアレシアちゃん」

「さようならアーザス君」

「ボクも楽しかった。さようならアレシアちゃん」

「私もですよ。さようならイグヴァ君」

「また会える？」

「チャーイちゃんそんな寂しそうな顔をしないで。」

「勿論です」

「むしろ会いに行くから。」

「じゃーねー！」

「はい、さようなら」

「……」

何で無言なのかな又アイちゃん？ 無言で無表情というのは中々に威圧感があるからやめて欲しい。

「さ、さようなら」

取り敢えず挨拶してみる。

すると耳元に口を近寄せて来る。何だ何だ？

「……いつか、ワタシのものにしてあげるわ」

ひい。背筋に寒気があ……。

「さようなら、また会いましょう」

一転してもうそれはそれは清純な笑顔でもって微笑みかけられたが、もうあなたの印象は良くなるらないよ。

「は、はい……」

苦笑するのが精一杯。

それから三分も経たずに、ラインラ君がルール君を引き連れてやってきた。

チャイイちゃんを迎えに来たとの事。

一階居間にてお母さんとお祖父さんとで談笑していた私が、何故か二人に後押しされ一人で応対している。

「何だよアーザスと一緒に帰ったのかよ」

途端に不機嫌になるラインラ君。

「一足遅かったですね」

「ちっ」

舌打ちをすると、ルール君に目配せ。

「おい、帰るぞ」

二人して背を向けて歩き出す。ああ、この二人見ると何か安心するなあ。

「案外ラインラ君妹思いなんですね」

「うっせえ！」

おっと、口が滑った。

乱暴に閉じられる玄関の扉。同時に外からラインラ君とルール君が走って去って行く足音が聞こえてくる。

「ふふふ、からかい甲斐がある奴。」

「あら、帰っちゃったわ」

「うーむ、良い仲間じゃの」

居間からよきつと延びる二つの首。

「見てたんですか」

「ふふ」

「ほっほっほ」

「もう、何ですかその意味深な笑みは」

「何でもないわ」

「ちゃんと言って貰いたいんだがね。何を企んでるんだい？」

「何、アレシアの元気な姿が見れて嬉しいんじゃない？」

「そ、そうですね」

お祖父さん……さらっと重い事言っなよ。

元気な姿を見せ続ける為にも、魔物を州境線上から出す訳にはいかないな。

ディーウアもだが、私も頑張らないと。

著休め五品目：妄想か洞察か

首都ロミアアはこの世界有数の人口を抱える一大都市である。郊外の住民を含めると百万にも届こうかという人間が集うこの都市には、あらゆる娯楽が存在している。

その中の一つ、中流階層が好んで集まる一角では居酒屋や賭場が公然と立ち並び、夜になると松明や蠟燭、魔力灯が煌々と辺りを照らしていた。ゲルマフィリオ州で起きた大事件を知ってか知らずか、この界隈は多くの人で賑わい、肩と肩が触れ合いそうな程には混雑が激しい。

この界隈に、一人の男がいた。髪形をロミアア国内では軍人の証と言ってもいい丸刈りにし、服装は北部の人間や鉱員が好むズボンと長袖の毛織物を着用している、何処か雰囲気固い若い男だ。男は目線を前を歩く男に向けている。視線の先の男は金髪を七三に分け鋭い目つきをしており、ロミアアでは伝統的な成人男性の服装である白いトーガを身に着け、先を急ぐのか混雑をかき分け突き進んでいる。どうやら尾行をしているらしい。

視線の先の男はしばらく混雑の中を歩いていたが、やがて混雑している幅の広い道を逸れ人がようやく一人通れる程度の幅しかない脇道に入っていく。その脇道には照明の類は一切なく、夜という事もあって全く先がどうなっているのかが分からない。尾行しているらしき男は見失う事を恐れて早く脇道に入ろうと駆け足になる。

男が脇道に入ろうとしたその時、何者かにいきなり腕を掴まれ脇道に入る事を阻止された。驚いた男が自身の腕を掴んだ人間を確認すると、それは既知の人物であった。

「エリソン、邪魔をしないで下さい！」

男は尾行の邪魔をされた事に対して怒りを張り上げる。

「ジャレド、勘付かれています。自然に振る舞うんだ」

だが、エリソンの言葉を聞きその意味を理解すると即座に彼の言う事に従った。

「よし、もういいだろう」

先ほどの路地から歩いて数分。二人は下層階級の者が集まる狭い居酒屋に入っていた。幸いエリソンの服装も変装して冒険者といった風情だったので、食卓を置けるだけ置いてぎゅうぎゅうと狭苦しく客を詰め込んでいるこの汚らしく騒々しい居酒屋に入るのに二人は相応しい格好をしていた。

「こちらの席へどうぞ」

くたびれきつた中年女中に、少しばかり動く肩が触れ合う席へと二人は案内される。二人の席の右側は壁で、左側は図体がでかく柄の悪い男達が喚き散らしている。この男達に限らず何処の食卓でもどんちゃん騒ぎが繰り広げられているので、少し声を絞れば会話が聞かれる恐れもない。照明も隣の席の人間の顔を判別出来る程度の光度しかないので、人相も注意すれば割れないだろう。他人に聞かれたくない話をするには中々良さそうな場所である。

「どうして俺を尾行したんです？」

腰掛けすらない木製の小さな椅子に座るなりジャレドはエリソンに詰め寄った。自分をどういう料簡で尾行したのというのだろうか？ 事と次第によってはジャレドにも法的措置も含めて考えがある。

「お前をじゃない、ジェレイコスを尾行していたんだ」

一方のエリソンは喧嘩腰でつつかかってくる後輩に苛立ちを覚えていると共に呆れていた。お前を尾行する程俺は暇じゃない。

「あなたも？」

「ああ、そうだ。一か月前からな」

エリソンの言葉にジャレドは驚かなかった。いつもエリソンは自

分の数歩先を進んでいる。

「それで？」

それよりも、エリソンが得た情報を知りたがった。

「あの路地に入る者は全て監視される。一度監視を承知で潜入してみたが、撒くのに大分苦労した。それ以降は方針を変えたらしい。許可なく入った者は問答無用で消されるようになった」

エリソンとて、嚴重な警備の前にジェレイコスの行動の秘密を解き明かせていなかった。それにしても、ジェレイコスの秘密主義も入った者は問答無用で消すともなると、徹底している。

「そこまでしてジェレイコス部長は何をしているんです？」

「分かん。政府の重要ポストに就いている人間も何人かあそこに入っているようだが、何を企んでいるのか……」

また、ジャレドの知らない情報が出てくる。あの路地に入っているのは、ジェレイコスのみではないらしい。もっと情報をジャレドは欲しかった。

「それじゃあ、他の機関との会合しているだけって事ありませんか？」

軽い冗談のつもりでエリソンに言ってみる。否定して何か漏らすかもしれない。

「その可能性もある」

しかし、エリソンは食いつかなかった。ジャレドを眼中に入れていないようでもある。

「何を考えているんです？」

「ジャレド、俺は……」

この世界に隠れた秘密結社のような存在があるような気がする。と、言おうとしたがエリソンは思いとどまった。あんまりに荒唐無稽な気がして他人には話す気にはなれなかった。

世界を裏から操る輩がいるなんて、そしてそれを俺が追っているなんて馬鹿げてやがる。

「何です？」

「いや、何でもない。とにかく、お前は手を引くんだ。確証もないのに、付き合う事もないだろう」

席を立ってお話の終わりを告げるエリソン。

「嫌です。あなたがここまでこだわるなら何かがあるんでしよう。俺はそれを突き止めるまで動き続けます」

見ているよとばかりに捨て台詞を吐き、去って行ったジャレド。

「……後悔するぞ」

三十三、人工衛星網

「……人様。ご主……ま。御主人様！ 衛星網の完成で御座いますよ！」

右耳に掛けたモノクルに内蔵されたイヤホンから聞こえてくる、弾んだディーウアの声。

「よくやった。ありがとう」

私はディーウアが払ったであろう多大な努力を思い、労いの言葉を掛けた。

私がディーウアに衛星網構築を依頼してから一週間。

ついに構築が完了し、私とディーウアは通信衛星を介しての交信にはしゃいでいた。

自室の机の上に置かれた液晶ディスプレイには、鮮明にディーウアの姿が映し出されている。ディーウアだけでなく、背景として焦土と化した街並みや魔物の死体を機械兵が積み上げて火葬しているのも見える。あっちは相当荒廃してしまっているようだ。

「本当にディーウアは良くやってくれたよ」

ディーウアには、心から感謝するよ。

『お褒めの言葉、真に嬉しいで御座います！』

画面越しににっこりと微笑むディーウアを見て、無性に彼女に会いたくなった。

「これからはここから部隊の指揮を執る事も出来るし、州境に行ってもう六日だろう。そろそろ帰って来ないか？」

幸い過剰に投入した爆撃機戦力が地形もろとも魔物を焼き払ってくれたおかげで、州境沿いのロミリア軍の負担は激減してる。

又、機械兵三個連隊およそ三千六百兵がゲルマフィリオ州内に侵攻して積極的に魔物を掃討して回っている。

状況は最悪から脱していると判断してもいいだろう。ただ、爆撃が激しすぎて地形が一変している土地が多々存在しているから、後で避難した元住民とかに恨まれるかも分らない。まさか、画面の背景の瓦礫しかない街並みは私のせいじゃあるまいな。

『ですが、御自宅からの指揮となりますと、どうしてもタイムラグが生じてしまいますし、依然現場指揮をする者には必要ではないので御座いましょうか？ 失礼ですが、御主人様の【物質創造】なされた機械兵の思考能力は高くありません。私抜きで大丈夫で御座いますでしょうか？』

「大丈夫。問題ないよ。十二万もの数の魔物が文字通り壊滅してしまっただ。いくら魔物の繁殖力が高いとしても数週間どころか出来るような数じゃない。それよりそつちでは何もなくて苦労するだろう。早く戻って来て休んだ方がいい」

本心はただディーウアの顔が直接見ただけだが、私の言ってる事に間違いはない筈だ。

まだ通信衛星位しか使っていないが、偵察衛星も軌道上に上げているし奇襲食らうなんて事はまずない。まあ、情報を読み誤らなければの話だが。

『しかし……』

「ディーウアも心配性だな。いざとなれば、私がもう一度爆撃機で丸ごと焼き払うから大丈夫だよ。私はディーウアの顔がすぐにでも見たい、戻って来てくれ」

核パトロールの如く、常に爆撃機を上空に待機させればいざという時だって乗り切れるさ。

『了解致しました。即座に戻って参ります』

ディーウアも私の話に納得したらしく、頬を赤らめつつ帰還する旨を告げる。

やはり彼女も魔物の死体がそこらに転がっているであろう州境に

は辟易していたのだろう。何だか嬉しそうだ。

「じゃあ、待つてるからな」

『光栄で御座います!』

ディーウアが空に飛び上がるのを最後に通信は途切れた。

さつき鐘が鳴ったから、今はお昼か。

戦闘攻撃機体型となったディーウアの最適巡航速度はマッ八四だから、およそ二十分あれば戻って来る。

どれ、一階で到着を待つ事にしよう。

一階に下りて、居間でお祖父さんとお話ししながらそろそろ二十分が経過する頃。

「おや、誰かが来たようじゃな」

玄関の扉を叩く音にお祖父さんが気付く。

「本当ですね」

ディーウアだろうか？

「私が見に行つて来ますね」

「いや、お母さんに任せておきなさい」

何故かお祖父さんに引き留められた。

「ですが、お母さんは今昼食を作っている最中なので私が出た方がいいと思います」

「なら、僕が対応するかの」

お祖父さんは大義そうにロッキングチェアから腰を上げる。

「私じゃ駄目ですか？」

「気持ちは嬉しいんじゃないのう。最近は何騒じゃから」

お祖父さんは苦笑いしながら私の頭に手を伸ばし、わしゃわしゃと撫でまわしてくる。

「はあ」

そういうものか？ 玄関の対応が危険なら、そのうち私は外出も駄目になりそうだな。

過保護は良くないと思うよ、お祖父さん。

「どなたかしら？」

あ、お祖父さんとやり取りしてる間にお母さんが玄関の扉を開けちゃったようだ。

「お久しぶりで御座います。只今帰って参りました」

ディーウアの声だ。たった六日しか離れてないし、ついさつき交信したばかりなのに、ひどく懐かしいように思えるのは何でだろう。

「ああ、ディーウアちゃんじゃない！ 元気にしてたかしら？」

「はい、お陰様で」

「お祖父さん！ ディーウアなら、問題はないですよね！」

「そうじゃな、どれ、僕も一緒に行こう」

私はお祖父さんと連れ立って居間から廊下に出て、ディーウアの姿を目の当たりにする。

肩に触れそう程まで伸ばし長さを切りそろえた茶髪は土埃にまみれ光沢を失い、ディーウアの自由裁量で魔力を分解・再構築していくらでも作り変えられる服装も変える余裕が無かったのかくたくたよれよれだ。

いくらディーウアが魔力で構成された擬似生命だとはいえ、酷使してしまつた事に後悔の念を抱く。

「ディーウア……」

すまない。適度な休息を挟むべきだったな。

「御主……アレシアちゃん、私はこの通り無事に帰って参りました」
私が近づくのに気付いたディーウアが清々しい笑みを浮かべ帰還を告げる。

疲れてるのに、無理して笑顔なんか作らないでもいいというのに。
「よく帰って来ました。今日は存分に休んで下さい」

待ってる。隙を見て魔力を補充してやるから。

「そうね。ディーウアちゃん疲れてように見えるわ。一度横になつて眠るといいわ」

「そうさせて頂きます」

ふらふらよろよろ。何ともおぼつかない足取りのディーウア。

「私が付き添います！」

「そんな。だ、大丈夫ですよ！」

大丈夫なんかじゃないだろ！ 口調が魔力節約モードの頃の頃に
戻りつつあるじゃないか！

「いいから、二階に行きますよ！」

早く人目につかない場所へ！

理由は分からないが、背中にお母さんとお祖父さんの生暖かい視線を感じつつ、私は二階の客室へとデューアの左腕を引っ掛けて連れ込んだ。

三十四、又アイちゃん

二階の客室に入り扉がちゃんと閉じているのを確認した私は、疲労で床にへたり込んでしまっているディーウアに魔力を補充してやる。

私の体から、私が掴んでいるディーウアの左腕を通じてディーウアへ魔力が流れ込んでいく。

「っ！」

「どうした？」

私の魔力がディーウアの左腕を流れた時点で、彼女の表情が疲労でぐったりしたものからいきなりしかめ面へと変わった。何か問題があったのだろうか。

「急に魔力が入って来て痛いです御主人様……優しくお願いします」
「そんな事言われてもな。魔力を高速で流した事が問題なのか？」

「優しくって、魔力の流れをゆっくりしろという事か？」

補充に時間がかかるが、痛いというならディーウアを苦しませる訳にいかない。お母さんやお祖父さんに秘密が露見する危険があるとはいえ、何とか都合しよう。

「いえ、魔力はもつと……そうではなく、私と御主人様の接触面を広げて頂けませんか？」

接触面？

「つまり、狭い範囲に大量の魔力が急速に流れ込むと痛いという事なのか？」

「その通りで御座います」

言ってみれば、川が洪水で溢れるようなものか。溢れる水が周辺の街を濁流に飲み込むか、肉体を破壊して回るかが異なる。

「むづ……」

ならば、ディーウアの左右の二の腕を両手で掴み魔力を注入しようか。これなら接触面は二倍だ。

「い、痛い痛い痛い！ もっと広げて下さい！」

じゃあ、私の両腕をディーウアの両腕に絡ませ、両手を握り合う。もっと、もっとお……！」

ええ？ ん、そうだ。へたっているいるディーウアの太ももに膝立ち。

「それは物理的な意味で痛いです！」

「あ、すまない」

となると、もう私がディーウアに寄りかかる位しか思い付かない。私は頭をディーウアの肩に乗つけて体と体をくっつけ合わせた。

「あ、むず痒いので御座います……」

目をギュツと閉じ、頬を染めながら文句を言って来るディーウア。「それ位我慢してくれ。これ以上くっつきようがないだろう」

「うづ……ん」

どうやらディーウアは満足しているようだ。心なしか表情が和らいでいる。

「アレシア？ ここにいるの？」

おっと。早速お母さんが来た。魔力の供給を停止。

「はい！」

「入るわよ？」

「どうぞ！」

危ない危ない。いきなり入って来られたら少し困った事態になってたな。

「ちょっと、離して……」

「も、もう少し！」

く。がつつくんじやないディーウア。

「あら、羨ましいわね」

ああもう。せっかく時間的余裕があったというのに、ディーウア

が私を離さなかつたせいで床で抱き合つた状態のままお母さんの目に触れる事になつたじゃないか。

お母さん。その、あんまり見ないで欲しい。目が怖いのだが。

「久し振りで御座いますから」

ディーウアは何を言っているんだ？ まあいい、とにかく話題を変えよう。

「あの、何か用があつて来たんじゃないですか？」

「今日も又アイちゃんが来てるわよアレシア」

「なにい！？ 今日も来たのか！ くそっ、いい加減にしてくれ！

「そ、そうですか」

今日はもう彼女とやりあう気力はない。何か適当な理由を見繕つて帰宅して頂こう。

「今呼んで……あら、又アイちゃん」

お母さんが部屋から出ようと私達に背を向けたその時、廊下から又アイちゃんが姿を現す。

「ごめんなさい、アレシアちゃんのお母さん。アレシアちゃんに早く会いたくてつい……」

今日もまた、私以外の人間にはすこぶる優しく可愛らしい姿を演じきつてやがる。

「そんな、気にしないでいいわ。私の方こそアレシアと仲良くしてくれてありがとうね」

「お礼なんてしないで下さい。ワタシ達、本当に仲良しなんですから。ねー、アレシアちゃん？」

首を傾げ笑顔を振りまく。本性を見せられた私にそんな演技を見せられても苦笑を誘うだけだ。

「ははは……」

私にも猫をかぶり続けていて欲しかった。アーザス君も余計な者を押し付けてきたものだよ、全く。

「ちよつと待つててね。今お茶でも持つてくるから」

「お気遣いありがとうございます」

行くなお母さん！

「アレシアちゃん。その人、だあれ？」

お母さんが消えても、ディーウアがいてくれて助かった。

化けの皮を脱ぎ捨てて問題ないか又アイちゃんは判断しかねてい
る。

ただし私とディーウアは未だ抱き合つたままなので、又アイちゃ
んが時折向ける私への視線はかなり厳しい。もし二人きりになつた
ら危ないかも分からない。

「私を我が家に連れ帰らせて頂いた恩人の、ディーウア……さんで
す」

「あなたがアレシアちゃんを？」

口に手を当てて驚く又アイちゃん。

「その通りで御座います」

「ディーウアさんのおかげでワタシはアレシアちゃんに会えるのね。
ありがとうディーウアさん」

騙されるなよ、ディーウア。今お前が見ている清純な笑顔は巧妙
な偽装だ。

「当然の事をしただけで御座います」

だからって、さも大任を果たしたような顔をするのもいただけな
い。私はディーウアにそこまで迷惑を掛けた覚えはない……よな？

「まあ。ディーウアさんって立派な人なのね。尊敬しちやいそう」

「それ程の事はしていないので御座います」

それにしても、と話を変える又アイちゃん。

「何だかディーウアさん随分汚れているわ。どうしたらそんなにな
るのかしら？」

「御見苦しい姿をお見せしてしまいました、申し訳御座いません。

実は私、つい先ほど旅路から帰宅したばかりです」

「あら、そうなの。なら疲れているに違いないわ。アレシアちゃん、
休ませてあげましょう」

二人きりになるなんてとんでもない！

断ろうと思いい口を開いたが、そもそも私がディーウアを疲れてい
るといつ名目でここまで引っ張ってきたんだった。

「あ……そうですね」

「何てこったい。警戒していたのに、あっさり又アイちゃんと二人
きりになる状況が成立してしまった。」

三十五、肉体に引つ張られる精神

ああ、やつちまったなあ。

「何なのあの女。ちょっとアレシアに恩が売れたからって生意気よ」
デューウアを休ませるといふ名目を出されると、私に反対が出来る筈もない。何故なら私も人目につかないようにデューウアへ魔力補充しようとお母さんとお祖父さんに同じ事を言ったのだから。反対した事を又アイちゃんがうっかり彼らの前で口に出したりすると途端に厄介な事になってしまう。

「アレシアも恩に感じる必要なんてないわ。あの女はアレシアの見た目だけしか気にしてないに違いないもの」

あーあ。自室で又アイちゃんと二人きりだ。

まあこれでも嫉妬心と独占欲が凄まじい事を除けばいい子なんだが。除けば、な。

「そんな事はないと思いますが」

しかし、デューウアへの批判は主人としてやめさせておくか。

見た目うんぬんで付いてきてくれる程度の覚悟じゃ、とつくにデューウアは私の元からいなくなっているだろうよ。そもそも彼女は人間じゃないしな。

「……ふん。いつか本性が分かると思うわ」

私はあなたの本性を知りたくなかったがね。

私にとって苦行になりつつある時間が終わるのは決まってアーザス君が来てくれるからだ。

「又アイちゃん。今日も一番乗りだね」

「仲良しだね」

今日はイグヴァ君も一緒に来てくれたのか。だがイグヴァ君よ、君の目は曇りきっているようだ。

いや、又アイちゃんの偽装が優秀過ぎるのか。

「だってアレシアちゃんに会いたくて仕方なかったんだもの」

又アイちゃんの偽装能力は並外れたものだ。二人が扉をノックした時には浮かべていた黒い表情は一瞬にして影を潜め、扉が少し開いてアーザス君のドアノブに伸ばした腕が見える頃には笑顔顔を顔に貼り付けている。

その驚異の変貌を目の当たりにした私でも騙されそうな清純な笑み。

何て……未恐ろしいんだ。

とは言え彼ら二人が来てくれれば優等生モードに移行してくれるので私の負担は激減する。

ありがとう、アーザス君、イグヴァ君。

君らのおかげで心労が和らぐよ。

「アレシアおねーちゃん！」

「チャーイちゃん！ 今日も来てくれたんですね！」

そして一番の癒し要素が来た！

扉をあけ放ち飛び込んでくるチャーイちゃんを私はしっかりと抱きとめる。

胸元に目をやると、締まりのない笑顔ですりすりと頬をこすり付けてくるチャーイちゃんの顔。

「チャーイちゃんは可愛いですねえ……」

チャーイちゃん……あなたがいなかったら、もう私はとうにストレスでぶっ倒れていた事だろうよ。

「えへへへへ」

うぐ、褒め言葉に素直に照れてくれるのも嬉しい。

又アイちゃんの黒さに穢れきった私の心が洗い流されるよう。

よし、これだけの人数がいれば又アイちゃんも本性を現せまい。

何とか今日も一日乗り切ってやる！

「……で？ 何でそれをオレに言う？」

時は過ぎて夕刻。皆が帰宅していつて静かになった私の部屋に、ラインラ君が訪れていた。いや、私が引きずり込んだと言うべきか。私はベッドに腰掛け、ラインラ君は椅子の背もたれに顎を乗つけて座っている。

「いや、ラインラ君なら大丈夫だと思ひまして」

「毎回愚痴聞かされるオレの身になれよ」

渋い表情を隠さないラインラ君。明らかに面倒くさがられている。毎日ラインラ君をはけ口にしてるのは申し訳ないと思うよ。やめる気はないが。

「すみませんね」

連日やってくるチャイちゃんを送り迎えの為にラインラ君も毎日我が家に来ていたのだが、私の交友関係の中で唯一軽口を言い合える中なのでついつい甘えてしまっていた。

「しかし、又アイがそんな腹黒だったなんてな」

「悪口はあまり言いたくはないですがね。あの子と本音で付き合うのは少々気力がいらいます」

ああいうのが好きな人だっているんだろうが、私には少し荷が重いかな。又アイちゃんによって削られた精神が一向に回復しない。

ラインラ君がいてくれてやっとどっこいどっこいに持ちこめている感じだ。

「学校でばらしたら面白い事になりそうだな」

ニタリと嫌味な笑顔を浮かべるラインラ君。

「ラインラ君の立場がどうなるか。私も楽しみです」
残念だが君では彼女に勝てないだろう。

「……学校じゃあいつすっげえ人気者だもんな」
現実にげんざりしたのか様子。

本当の所、ラインラ君に言っても何も出来ないのが分かってるから暴露してるんだけどね。すまんね、私はひとしきり言いたい事言

つてすつきりしたのに、ラインラ君には口閉じさせて。

「まあ、好意を抱かれてるのは間違いないですし。命の危険はないです」

「……そんなひどいのか？」

命と口に出した私にギョツとした表情をするラインラ君。驚かせてしまったか。

でもね、彼女に迂闊にちよっかいかけないよう釘を刺して置こうか。

「んー。敵に回したら躊躇なく対象を追い落としに掛かるでしょうね」

あれ、何か同情の眼差しをよりにもよってラインラ君から浴びせられている。

そして、ラインラ君が私の頭に手を乗っけて来た。

「何ですか？」

「何でもねえよ」

ひょいとすぐに離された手だが、まあ気持ちは伝わった。

だが同時に悲しくなった。

お前に同情されるようになってしまったか……。

「じゃあオレは帰る」

「明日も来てくれますか？」

しかし非常に貴重な精神回復剤を手離すわけにはいくまい。

「さあな。オレはチャーイの送り迎えしてるだけだし、チャーイに聞けよ」

「じゃあ、一緒に下に行きましようか」

「ああ」

チャーイちゃんにはなるべくたくさん訪問して貰えるよう吹き込んでおこう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4525p/>

伊吹さんの真相

2011年12月14日23時50分発行